
漫物語

楓麟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漫物語

【Nコード】

N9162M

【作者名】

楓麟

【あらすじ】

原作未読の方でも楽しめる作品を目指して。原作：化物語、の二次創作となっています。ただ、主人公ヒロインは全く異なります。タイトルは、そぞろものがたり、すずろものがたりどちらでも構いません。更新もタイトル通りのんびりやっていくと思います。

以下あらすじ

栗国頌史と同じ学校に通う、青柳訝藍は、突然人が変わってしまった。彼女が誓いを立てた真っ赤な怪異とは？ 舞台も新たに、彼の周囲で知らず知らずのうちに現れた、怪異、怪異、怪異。これ

はそんな、突然に偶然に巻き起こる、とりとめのない物語。そして
原作のキャラクター達も……。現在第二章。

がらんブル 其の壹(前書き)

原作未読の方でも大丈夫な形に仕上がっていると思います。
拙い文章ですがよろしくお願ひします。

がらんブル 其の壹

001

あおやぎがらん
青柳訝藍はいたって普通の高校生だった。

普通に元気で、普通に友達がいて、普通の生活を送っていた。

ただ、ここでいう普通とは、人並みに元気で、人並みに友達がいるという意味で、そして、普通でないものと一緒に関わらない生活を送っていたという意味であり、彼女自身が平凡な人間であるという意味ではない。

むしろ、良い人間である。素晴らしい人格の持ち主と言い切ってしまうといい。

成績もよく、運動神経もよく、真面目でクラスの人気者、その上見た目も可愛らしい、といった感じの同級生だった。どうしたらこんないい人間ができるのだろうかと疑問に思うほどだ。

何より笑顔が取り柄の女子だった。心から笑う人というのは彼女の笑顔を見れば納得するだろう。少なくとも、一年前までは。

一年前といえは、俺には思い出ともいえない、かといって忘れることは決してできない嘘のような現実を思い出し、多少の親しみを感ずるといえば感じるのだが。

親しみなんて。好意なんて、会った後に抱いたものだ。しかも偏見で。この悪い癖は一向に改善される気配がない。全く、浅ましにもほどがある。ちょっと似通ったところがあるというだけで、好意を抱いてしまう。俺の小さささもしさといったらないだろう。

まあ、当時まだ彼女に対して間違った感情を抱いていた当時の俺は、彼女にはそこまで興味は無かったし、関わりうと思ってもいなかった。

いや、むしろ彼女から関わってきたようなものだ。

今年になって、つまりは学校が始まってから、彼女は大きく変わっていた。一言で言えば、厚かましくなった。

面張牛皮。

何にでも首を突っ込みたがり、自分からトラブルに巻き込まれる。ほんの三日前、こんなことがあった。

青柳のクラスメイトが飼っていたカナリアが死んだ。勿論、飼い主はそれを埋葬しようとしたのだが、青柳がそれを引き取りたいと言って聞かなかった。ついには口論になり、今回は渋々青柳が折れる形となった。

そう、彼女は一度首を突っ込めば、最後まで突っ込む。そうしてしまいいには自滅するか、また新しいことに突っ込むかだ。

彼女が関わりたがるのは、人の死に関することだ。この間も、誰かのペットが死んだ時無理矢理引き取ったとか、事故で死んだ野良猫をどこかに持っていくのを見たというような、気味の悪い噂がある。去年同じクラスだった時は決してそんな奴じゃなかったのに。

クラスが変わって、全く見かけることもなくなった青柳だけれど、噂からすると、今の彼女はもう以前俺が知っている彼女ではない、豹変してしまっているのだと思う。

人が変わるの、当たり前のことだ。それでも。

これはあまりにも唐突過ぎないか。

それに、冗談にならない。

ただのイメチェンとは違う。

ベクトルが違いすぎるのだ。

普通、何もなしに突然こうも人は変わるものなのだろうか。否。

少なくとも彼女には、理由があった。

簡単な。至極、簡単な。

青柳が変わってしまったのは、正確には去年の一月。
彼女の兄が死んだ月だ。

がらんブル 其の貳

002

「栗国^{あぐくに}くん、ちょっといいかな」

放課後、俺が一人になったのをまるで見計らったかのように、青柳訝藍が俺のクラスにやって来た。

今日は日直だったから、必然的に俺が教室の鍵閉め等をする為に最後まで残ることになるのだが、まさかそれも見越してなのか。

「何だ、長話だったら帰るぞ」

「あいつがへそを曲げる。」

早く帰りたいたい。

「まあ、栗国くん次第だよ。何、栗国くん、部活とかやってんの？」

「いや。入ってない」

「あいつが腹を立てる。」

「あ、じゃあバイトとか」

「まさか。忙しいだけだ」

別に俺の学校は禁止というわけではないが、そんなことしたらあいつが何をするか分からない。

「忙しいって、具体的には？」

……。

色恋沙汰。

とか言えるかよ。

「プライバシーに関わるから、これ以上は無理」

「えー聞きたいなー、なにになに、何で忙しいの？」

「お前さあ、そんな話をしに来たんじゃないだろ。さっさと本題に入れよ」

窓の鍵が閉まっているかチェックしながら言う。

はいはい、ごめんなさいと彼女は窓際の席の一つを選んで腰掛けた。

ふん。

見た目は昔と何ら変わってない……な。

シヨートで少々癖のある髪にヘアピンをして。二月だから、上着のブレザーを着て。指定の青いリボンをしている。学年によってこれは色が違う。制服も……改造はしてない。ややスカートが短いだけ。

別にグレた訳でもないのか。

じゃあ、今までに聞いた噂は。

まあ、噂は噂か。

「栗国くん、ご両親は」

座るなり、彼女は訊いてきた。

こいつ、何で。

「死んだよ」

「それで、今は一人暮らし　なんだよね」

「まあ、」

半分正解。

正確には、もう一人いる。いや、もう一人というか……まあ、もう一人いる。

でもこいつ、よく知ってるよな。誰から聞いたんだか。

「ずいぶんあっさりしてるね」

「ん」

「いや、ご両親のこと」

「昔のことだしな。慣れるさ」

そう言いながら青柳を見た途端、俺は口を閉じた。

声とは裏腹に、彼女はうつろな目をして俺を見ている。

空ろ。

虚ろ。

その空虚に、押し潰されそうで。

「慣れる？」

「……」

ぎし、と椅子が軋んだ。

立ち上がるのか、と思ったが彼女はただ窓を見る為に体を傾けただけだった。いや、正確には窓の外だが。

ただ、見ていた。

「私のお兄ちゃんも、つい最近死んじゃって」

最近……それは聞いていた。本人からではないけれど。

それを節目に、お前は変わったよな。

良い変わり方かは分からないが。

「はは、栗国くんって話しやすいね。初めて話してる気がしないや」と。

ちよっと暗くなった空気を仕切りなおすかのように、彼女は明るく笑ってこちらを向いた。

外を見ていた時とは随分と表情が違う。

明るく、元気で、快活で、そしてまた虚無だ。

ただ、笑っている。そんな感じ。

魂が抜けかけているような。

「そうか、そういや前のクラスでも、話したりはしなかったな」
でも見てはいたさ。

クラスで目立っていたお前を。

今の目立つ、とは大分違う意味で。

普通の意味で。

よく授業で発言して、クラスをまとめ、しっかりしていた。

俺みたいに一日の半分をぼさっと過ごしてなどいない。

「うーん、栗国くん、いつつ同じ子とばつか話してたよねー。え
ーと確か」

「そうやってまた脱線していくだろ。脇道逸れるな」

「あー」

はは、とまた彼女は笑った。からっぽの笑顔で。

顔を逸らすのに勇気がいる。

お前は、昔はそんな風な笑顔ではなかった。

「はは、私って変かなあ、栗国くん 私、幽霊とかそういうの信
じる派なんだけどさ」

オカルト系ってことか。

そうは見えなかったけどなあ。

噂を聞けば、納得するっちゃあするけど。

黒板に書いてあった日直の名前を消しながら、俺は話を訊いてい
た。ついでに汚かったから端から消すことにした。

栗国くんはどうなの？ と相手は問う。

「霊とか……か。うん、どっちつかずだな。いると思う時もあるし、
いないと思う時もある」

「何それ、意味分かんないよ」

どうしてそんな考え方するんだろっ、と首を傾げる青柳。

分からないだろうな。でも実際そうなんだぜ、常にいるとは限らない。

「でもまあ、五十パーは信じてるってことだよな」

「そうは言っていないがな」

「少なくとも信じてる、と言え。」

「いやなんか訂正も恥ずかしいぞ……。」

「ああ、分かった」

手を合わせる青柳。

「いると思う人にはいて、いないと思う人にはいないってやつ？」

「違う！」

「何だその幼稚な考え方！」

「意味合いも全然違ってるぞ。」

「あーなんだ、違うのかあ、という声を背中に受けながら。」

彼女は再び切り出した。

「じゃあさ」

「何気なく、という風を装っているのがバレバレだ。」

「栗国くんは、今でもご両親が側にいると思ってる？」

「何で」

「俺は笑っていた。黒板消しを落としそうになる。」

「思わないよ。死んでるんだ。側になんて」

「死んでも、霊として、いるかもでしょ？」

「……何が言いたいんだ？ 守護霊のことか？」

「うーん、そうじゃなくって」

「と、再び外をちらと見る。」

まるで、そこに、何かがあるかのように。

「私は、お兄ちゃんが側にいると思ってる。ううん、いるんだよ」

「……………」

「でも、会う為には対価が要るんだ」

「……………何だ」

「死んだひとの魂」

俺は黒板消しを取り落とした。

振り返ると、そこには微笑した彼女がいた。

死んでいる笑顔と、生きている無表情。

「だから栗国くん、もしよかったらご両親の」

「馬鹿言っな」

自然と、声は震えていた。色々と危ないことばっか言ってるぞ、こいつ。

「お前の兄さんがいるいないはともかくとして、他人を巻き込むのはよせ」

「……………」

「じゃあ本当みたいだな。人のペットの死体を引き取ったりとか…

…そういうこと、してたんだな」

「でもっ……………だ、だって」

青柳は弾けるように立ち上がる。

ぼろぼろと、涙が零れていた。

「もう私はっ、誓いを立ててしまったの……………もう、止められない、止めたら、お兄ちゃんが、魂を喰われ、」

すっ、と小さく息を吸う。

がらんとする教室に、声が、響いた。

「赤い雄牛に、食べられちゃうんだよ」

がらんブル 其の参(前書き)

PCの方で読むことをお勧めします。ルビが大量にあるので、携帯だと大変読みにくいかと。

がらんブル 其の参

003

すっかり暗くなっていた。辺りもそうだが、俺の気分もだ。

急いで帰り道を走っていると（俺は自転車通学ではない）、ふいにどこからか歌声が聞こえてきた。

歌、というかハミングというか、とにかく口ずさんでいるメロディーだけが聞こえてきた。思わずぴたりと足を止め、どこからするのか周囲を見回した。

「やめる、恥ずかしい」

そう言つと、歌は止み、代わりにくすくすと笑い声が聞こえてきて、電柱の影から彼女は姿を現した。

「えー？ いい歌だと思うけどなー」

「……俺が創った歌だ、広めんな」

「でももつ着つたフルでゲットできるよね」

「嘘言つな」

たく、っーか俺はプロはもちろんアマとしてもデビューしてねーんだよ。

そもそもバンドすら組めてない。

ジョークにしては黒すぎないか。

両手を後ろに回して、にこにこしながら彼女は近付いてくる。結わずにそのままの長い黒髪が、流れるように。

そして、海の香りがした。

佐式優補。

才色兼備。

背は女子にしては高く、俺と同じくらいだ。ちなみに俺は百七十・二センチ（この〇・二センチが大事）。

「で、何でこんな所にいんだよ」

「しょーじを待ってました」

「ああ……遅くなって、悪かったな」

そのしょーじと伸ばすのはやめてくれないだろうか。気が抜ける。障子みてえ。正しくは、頌史。

「心配させて、悪かつ　!?!」

目にも止まらぬ速さで彼女は俺の腕にしがみついてきた。がばつと。腕が折れるかと思うほどの力で。

あーあー、周りが痛い目で見てるよ……。

「まったく、五時までには帰るって約束でしょー!」

「いやいや、どこぞの箱入り娘じゃねーとそんな門限はねーよ」

「しょーじは箱入り娘でしょ?」

「いつ俺が女子になったよ」

「しょーじは私の娘でしょ?」

「お前の子供になった覚えもない」

「だってしょーじはオレの彼女じゃん」

「急に一人称を変えるな! 混乱するだろうが!」

「え? しょーじが?」

……俺以外にもだ。

「大体そうならお前のポジションは彼氏になるじゃん」

「最初からそのつもりでお付き合いを　」

「嘘つけ!」

相手が言い終わる前に突っ込み切った。

「でも否定はしないんだね」

「あ？」

「いや、私が、しょーじは彼女じゃんって言ったことに対して、否定しなかったよね」

「違う！」

今頃否定。

いや、隙が無かったただけだ！

というか突っ込みどころがありすぎて困るんだよ。

「そんなんだから芸人として生きていけないんだよ」

「いや、ならねーし」

諭すように言われてもな。

「……大体、俺が目指してんのはミュージシャンであってコメディアンじゃねーし」

アーティストにボケも突っ込みも必要ない。

「そうやって横文字がカッコいいって思い込んで多用しない」

「悪かったなカッコつけて！」

思わぬところに指摘が！

「あー、私スゴい発見したー」

間延びした声で、拳手する優補。もちろん空いたほうの手だ。

「ミュージシャンをショービジャンと言い換えれば、なんだか棒読みしてるみたいだよー」

「横文字が一瞬で気落ちした！？」

「ショービジャンを指摘すのって、やっぱショービジャン？」

「読みにくい上意味が分からなくなった……」

「ショーガナイジャン」

「開き直りやがった」

「でもまあ、しょーじのいい所は、そうやって夢を隠したりしないで宣言できるところだけだねー」

もたれかかりながら彼女は言った。歩きにくい。

そうして彼女は俺の歌の一節を口ずさむ。

「『アオイ シロい 波へ 海へ 走れ

探しに行こうか 君と僕の メロディを』」

こうして訊くと恥ずかしいな……。

それにしても、優補はとて歌が上手い。

まあ、彼女は上手くなくてはいけないのだけれど。

上手くなくては彼女はいけなかったのだけれど。

ふんふーん、としばらく間奏まで歌ったあと、彼女は訊いてきた。

「で、今日は何で遅くなった？」

「ああ、まあ色々……日直だったしさ」

「ふーん」

「……。ごめん嘘」

「よかった、隠し続けるのかと思った」

そうそう、こいつに嘘なんて通用しない。

どうせバレるのだし。

バレたら怒るとかそんなレベルじゃない。

津波が起こる。これはマジだ。

どんなに些細でも嘘はつくべきではない。

これは一年前学んだことだ。

人外である、彼女から。

「実はさ、」

「いーよ、言わなくても。どうせ洗^{しゅう}雅^がくんと馬鹿話してたんでしょ

？」

「違えよ」

「ああ、じゃあ瞳ちゃんとおしゃべりしてたんだ」

「んな訳ねーだろ」

矢部とも皆紅みなくれないとも、最近は控えめに接するようになっている。

浮気だとかそんなのじゃなくて、これは深刻な問題なのだ。

俺や優補に関わった人間が、果たして無事でいられるのか。

『怪異』に関わらないと断言はできない。

「嘘じゃないみたいだね」

「だから今から話すっての。」

……ほら、去年俺と同じクラスだった、青柳って憶えてるか」

「ああやぎ ああ、訝藍ちゃんね。うん、憶えてる」

クラスでリーダー的存在ってやつだったよね。と続けた。

彼女は俺のクラスメイトは全て把握している。何故か、なんて言うまでもないことだ。

「彼女は、私達のことを知ってるの？」

……私達、か。

「何なのかは知らないと思う。いることに、気付いてるといっかな」

「それで」

「それで、去年の一月から、あいつは怪異に」

「……」

「赤い、雄牛なんだってさ」

優補は静かに俺から離れる。

しばらく彼女は無言だった。

俺は慌てて言う。

「お前の所為せいなんかじゃないって。これは純粹で純粹なケースだよ。ほら、何だ、必要とされたときに存在するってやつだ」

「その怪異は、どんな怪異なの？」

佐式はそれではあるがそれに詳しい訳ではない。

よく知らないのは俺も同様だ。

全く、あの『完璧な彼女』の言う通りだ　怪異に遭ったとき、いつでも私みたいな人がそばにいることなんて、普通は無いことなんだよ　今回、青柳は自分の力で解決しなければならぬ立場にあるといえる。

だが、それで彼女がとった行動は。

非人道的。

「それでしょーじはどうしたいわけ？」

先程の質問に答えてもいないのに。

ちよつと突き放す感じに相手は訊いてくる。

俺は答えた。

彼女を助けたい、と。

がらんブル 其の肆

004

「もつと詳しく訊かせて」
優補の言葉に、俺は頷いた。

アパートの二階。二〇二号室。

アパートとは言っても、鉄筋コンクリート造の集合住宅である俺の住む地域では、こういうのもマンションでなくアパートと呼ぶのだ。

基準は何だったか、確か米軍と何か関係があった気がするがまあ、俺にとってマンションとは超高層ビルなイメージがある。とにかく。

そこが、俺の家だ。

2LDK、冷房完備、クローゼットが三つもあり、小さいがバルコニー付という学生にしては贅沢な所だ。

大家さんも優しく、特別に学生割引がされて家賃は……まあ、それでも学生で普通払える額ではない。これも優補がバイトを頑張ってくれているお陰だ。

お気付きかもしれないが、俺と彼女は交際している。だけでなく、プラスアルファ同棲している。

もう周りから叩かれること覚悟の上だ。だがのろけるつもりは断じてない。

これは責任だ。

俺が償うべきことで、彼女を生かしてやるために俺ができる唯一の方法だ。

……まあもちろん、彼女のことは好きだけど。

白い扉を開け、玄関で靴を脱ぎ、直進……すると寝室になってし

まうので左折。

十二畳のリビング。荷物を下ろして腰を下ろす。

「訝藍ちゃんは、しょーじが怪異を知ってることは知らないで、話してきたってことだよな？」

「ああ、そうなるな」

偶然。にしては出来過ぎなのだが。

いや、これも『彼女』が言っていたよな。一度怪異に関わると、惹かれやすくなるとか。

そんなことを言われたって、覚悟なんてできるわけがないし、どうしようもないのが事実だ。

「その牛の話をして」

彼女の言葉に俺は再び頷き、口を開いた。

以下、放課後の回想シーン。

「…………ごめんね。突然、意味の分かんないこと言って
「いや…………」

驚いた。

青柳は、怪異に関わってしまったているのだ。

それなら。

これほどに変わってしまったても納得できる。

「なあ、その牛って…………何なんだ？」

「し、知らない」

あまりにも平然としていたからだろう、相手は珍しいものを見るかのような目つきになった。

涙も止まっている。

「ただ、去年の冬休みに……出遭おとった、というか」

「それが何なのか、お前分かるのか」

「え？ えっ……と、妖怪の一種かな、なんて思ったんだけど。何ていうか、『生き物でない』感じだったし 牛っていう見た目をしてたけど、真っ赤だったし」

しゃくりあげながらそう答えた。

牛。

ウシ目ウシ科の哺乳類。

そして赤い、雄牛の怪異、か。

ねえ、と彼女は首を傾げる。

「どうしてそんなことを 栗国くん、何か知ってるの？」

「別に」

急いで教室の外を見て、戸を閉める。鍵もかけた。

そして彼女の前に立つ。

「え、な、何？ か、監禁？」

「どうやったらそんな発想が出るか知りたいよ」

脳味噌の構造はどうなってんだ。

「怪異」

と俺は言った。小さな声で、しかしはっきりと聞こえるように。

「そういう魑魅魍魎ちみもつりょうの類を、怪異っていうらしい。俺も詳しくは知らないけど」

一息ついて。

やっぱり言うしかないか。

「俺も、その怪異に関わった人間の一人だからさ」

「カイイ……」

「お前が関わった牛とやらがどういう怪異かは分からない。でも、特徴とか言ってくれれば、何か分かるかもしれない。今までみたい馬鹿な真似しなくて済む」

もちろん嘘だ。

怪異に対して詳細を述べられたところで、対処法なんて俺に浮かぶわけがない。

希望は、佐式優補だが、彼女もどうだか。

「そういえば……誓った、とか言ってたな」

「うん……私はその牛の怪異に、誓いを立てたの」

目を擦り、俺を見上げる。

「お兄ちゃんを現世に留める間、その対価として生き物の魂を集めること」

「ああ、牛に食べられるとか言ってたけど、それは魂なんだな」

「う、ん。そうだよ」

あまりにも的確な答えだったらしく、青柳はさらに驚いていた。

「お兄ちゃんの魂が、牛に食べられるっていう意味　牛は、定期的に魂をねだるの。それで捧げなかったその時には、お兄ちゃんの魂が食べられて、輪廻から外されてしまう」

「よく分からないけど、何だ、あの世に帰れずに牛に消されるって感じが」

相手は頷く。

「あの牛は、多分この世とあの世を渡る　その、怪異、なんだと思う。魂を運ぶ、そんな怪異」

「魂を、」

「だって　私がお兄ちゃんを呼び戻す為に、私は魂を半分捧げた。

それと交換に、牛はお兄ちゃんを連れてきてくれた」
待て。

魂を半分、だって？
それじゃあ、今のお前は。」

「どうして　そこまでするんだよ。お前、そんな状態で大丈夫なのか？」

相手は答えなかった。

顔を伏せ、目を合わせようとしない。

なら、踏み込むまい。

一線は引いておくべき。

「で、お前はどう思うんだよ」

「……え？」

「え？　じゃねえよ。さっき泣いてまで訴えたじゃん。牛に喰われるとかつて。お前、今の自分をどう思ってるんだ。」

問題は、お前が何をどうしたいかなんだから」

「やめたい」

やめたい、そう連呼して。

はんすう
反芻して。

「もう死体を探し回るのは嫌だ、牛に会うのは嫌だ、お兄ちゃんに会えないのは嫌だ、お兄ちゃんが帰れないのは嫌だ」

「……」

「お兄ちゃんを帰すのにも、魂が必要な。大きな対価が。でも、集められなかったら、お兄ちゃんは」

「でもそういう風にしたのは、お前が牛に誓ったのが原因だろ」

「……何で、」

見れば青柳は下を向いたまま震えていた。

「どうしてそんな風に言えるの？　そもそも、おかしいよ　私は栗国くんのご両親が亡くなったことを知ったから勇気を持ってこうして会いに来ただけのに……その栗国くんが偶然私と同じように怪異に関わってるなんて」

「キツイ言い方に聞こえたかもな」

「うーん、ほとんど受け売りだからな……それに俺みたいに失敗してほしくないし、正直俺自身が切羽詰ってるみたいだ。」

「青柳が冬休みが明けてから、色んなことに首を突っ込んでいるのは、その大きな対価を探しているからだろう。」

「だから……そんなことが言えるほどの怪異と、栗国くんは関わったってことだよな」

やはり、頭がいいだけある、理解が及ぶのが早い。

「じゃあ栗国くんは、どんな怪異に関わったの？　私のと似たようなもの？」

「いいや」

俺はゆっくりと首を横に振った。

「俺が出遭った怪異は、俺の望みを叶えようとしたし、俺を恨んでもいたさ。それは、俺が用も無いのにあいつと関わって、あいつの人生を滅茶苦茶にしたからだ」

自分に言い聞かせるようにそう言った。

「……どうなったの」

「ちょっと、変わったただけさ。それ以外は、何も変わっちゃいない」

「……意味分かんない」

「分かんないだろうな」

分かってもらおうとも思わない。

これはあまりにも馬鹿馬鹿しい話だから。

そして、信じられない話だから。

青柳はといえば、もう、と頬を膨らませていた。

茶化されてると思ったのかもしれない。

確かに、俺が言うべきことじゃないかもな。

これはあのズボラなおっさんが言いそうな台詞だろう。

あるいは、完全無欠なあの人が。

あの人も、なかなか怖いからなあ……。

「まあ、これも何かの縁だろ。生憎俺は頑固でね。事情を知ったからには、できるだけのことをしようと思う」

「はは、栗国くんカッコいいね。私と少し、似てるかな」
いや、お前のは厚かましうって言うんだ。

「私も栗国くん風に言うなら、生憎私も、事情を知られたからには、最後まで付き合ってもらおうと思う」

そして彼女は、ありがとうと言ってきた。

俺は、まだ早いぞ、と答えた。

「……そうだ」

青柳が席を離れ、教室の扉へ向かう。

そして振り返って笑った。

「私、図書室に行ってみる」

「図書室？ 今？」

うん、と相手は頷いた。

「栗国くんの話聞いて、怪異のこととかちゃんと調べるべきだな……って思ったの。それで、今から図書室」

「開いてるのかな……」

「開いてるよ。あと三十分くらいしたらアウトだったけどね」

「うーん、優等生だなあ。」

「図書室に足を運んだことなんてないんだが。」

「でも牛の怪異、ってマイナーなイメージがあるな……いや、俺の知識がなさ過ぎるだけか。」

「それでも、俺の怪異よりはマイナーだろう。」

「じゃあね、栗国くん、また明日報告するよ。」

「ああ。」

再び静かになった教室で、俺は再び黒板を消し始めた。

「……相変わらず几帳面だねえ、しよーじは。」

「いや、そんな感想は必要ない。」

一通り話し終わって、優補はうんうんと頷いている。

「しよーじは正しいよ。あの後訝監ちゃんについて行って一緒に調べなかったのがね。」

「そうか?」

「できるだけ、自分の力で解決するべきだよ。」

「答えを導き出すのは、結局自分自身なんだし。と彼女は言う。」

「私達は、助けるとはいつでも手を貸すだけみたいなものだから直接的だけど、間接的。」

「なあ優補、俺的によく分かんない事があるんだが。」

「何故生きてるかなんて、そうそう分かるものじゃないんだよ。」

「いや、今俺はそんな深刻なことに疑問を抱いてねえよ!」

「あー……ここで口説くとか、そーいうのはないわけだ。」

「う。」

そこまで気が回らないのだった。

「俺が今生きているのは、」

「もう遅いばーか」

冷たく突き放して、それで何？ と訊いてくる。

うう。駄目だな俺……。

「別に彼女は何とも思っていない風だったから問いたださなかったんだけど。青柳は魂を捧げる為に悪戦苦闘してる。だからって何で死体を集めるなんてしてんだ？ 死体は魂なんて無い、蛻の殻もぬけじゃねえか」

「んー。しょーじは蛻の殻どころか間抜けの殻だね」

まあ、気付いただけ凄いや、と。

自分の髪をくるくる巻きながら優補はおそらく持論であるだろうが、答えた。

「残りかす、かな」

「かす？」

「体に、少しだけ欠片みたいなのが引つかかったりする事があるんだよ。知らない？」

「いや、知らないけど……」

「とにかく、そんな生命の欠片が残ってる場合もあるってこと。あるいは、成仏できてなかったり、死にたてはやはやなら、魂が完全に残ってるかもね」

嫌な言い方だ……。

気分が悪くなる。

本人に訊かなくてよかった。

「魂というよりは、魄たましいって感じかな。肉体に属し、体朽ちるまでそれを支える気のことだけだ」

「よく分からないけど……じゃあ俺の両親が成仏してねえとも思
ったのかな」

「焦ってたんでしょ、だから嗅ぎ回ったりしてるんだよ。それとも
表情は穏やかだったか、優補は言うのだった。」

「しよーじを捧げようとしたか」

「……んな訳ねえだろ」

「そーお？ 案外そうだったりするかもよー。だから誰もいない時
を選んだとか考えられるし、もししよーじが怪異を知らなかったら
ぱくり、だったかも」

「疑えばいくらでも疑えるけど……俺はそうは思わねえな」

「ま、それはそれでいいけど」

興味なさそうにそう言っつて、優補はそれからだんまりだった。

俺は姿勢を崩して優補、というよりは独り言のように言った。

「いやしかし俺としては、どうして一年以上も経って怪異について
調べなかったんだかっていうのも疑問に思うけどな」

「愚問だよ」

「え？」

「何でもないさー」

「……」

優補は立ち上がり、伸びをしながら同室の台所へ向かった。夕食
を作るらしい。

「今日はシチューの予定だったんだけど、ビーフシチューにする？」

「なんかとんだブラックジョークだよな……」

「じゃあ黒鮫でも入れる？」

「それはブラックシャークだろ！」

面白くないわ。

黒鮫どころか興ざめだ。

優補はといえば、さっすが横文字のプロだとか言いながら冷蔵庫から野菜を取り出していた。

俺も手伝えるんだが、彼女邪魔されると怒るからな……（邪魔する気がなくても、だ）。

「にしても青柳のやつ、大丈夫かな」

優補はまな板と包丁を取り出していた。

「そもそも学校の図書室に怪異の文献なんてあんましないと思うんだよな。俺が思うに、牛の怪異といえばあれしか思い浮かばねえ。

ほら、半人半牛の」

「分かった、ミノタロスね」

「……なんか仮面ライダーに出てくる敵キャラっぽい名前だぞ」

ミノタロスだ。だが優補は頬を膨らませて俺の突っ込みに指摘した。指摘してきやがった。

「イマジンは敵なんかじゃないよー、主人公と最後まで戦ういいひとたちだよー」

いや、電王とか興味ないから。ほんとごめんだけど。

くらいまっくす　と歌いだす優補。能天気め。

「ミノタロスってギリシア神話の半人半牛だったよねー」

「ああ、だから牛の怪異って思ってたさ」

「ラビリンズ！」

優補が叫ぶ。うーん、このギリシアマニアめ。

「うーん、でもミノタロスって赤いかもだけど現世と来世を渡る怪異、じゃないよ」

「あ、そうだったか」

「それにあれは魂どころか人間もろ食べちゃうしねー。あー怖い」

お前もあんまり人のこと言えないからな。

人というか、化け物というか。

「じゃあ俺には何も思い浮かばねえや。牛の怪異なんて
優補は鍋に火をつけ、野菜を切り始めていた。」

「そうだ、なあ優補、明日久しぶりに青柳に会って
みるか、と言いつらないうちに、彼女は飛んできていた。
正確には、青柳の「ああ」も言いつらないうちに。
包丁を構えて。」

「お、おい　！」

「さっきから思ったんだけどー」

ゆるゆるとした口調で包丁を頭上にかざす少女。
ついていた野菜が落ちてくる。

「どうしてそうやって青柳って親しげに呼ぶの？」

「……っ」

いや、お前は全員を下の名前で呼んでんじゃん！
どちらかといえばお前の方が親しげに聞こえるよ！

「興ざめはいいけれど、恋ざめは赦さないんだからね」

「……んなつもりはねえよ」

「ふーん」

台所へ戻っていく。口の端を歪めているところからして、マジで
怒ったわけではなさそうだ。

「いい年の女子が包丁振り回すなよ、俺じゃなかったら通報してる
ぜ」

「通報される前に刺してます」

「物騒なこと言うなやー！」

「それにさつきから私、『次にしょーじが青柳と言ったら刺す』ってずっと考えてたんだよね」

「マジでおっかねえ」

計画まで練っていやがった。

本気かよ。

あと、落とした野菜を放置するな。玉ねぎとかもあつたせいで微妙に目が痛いぞ。

全く。

拾い集めて捨てる。勿体ない。

「で。どうだ？ 明日にでも青柳、さんに会うか？」

「どうしてそうやってさん付けにするの？ 堅苦しいよ」

「お前が言ったからだろうが！」

「しょーじらしくもない」

「俺も自分で言いながら思ったよ！」

「別に私は今後一切呼び捨てにするな、とは言ってないよ？」

「言うてはなくても態度で示したたる！」

「いや、あれは単に、面白いかなーと思って」

「将来歴史に名を残す殺人鬼みてーな台詞を言うな」

「気分は乗らないけど、会っておこうかなー」

「……ああ？ そうか」

話がようやく戻ったのな。

「だって、関わった怪異のことはもちろんだけど、訝藍ちゃんのこと、何も分からないんだもん」

ああ。

そうだ。そうなのだ。

彼女が牛に誓ってから人が変わったという点は納得できた。

だが、どういった経緯で、というのは全くもって何も分かっていない。

あの笑顔。

もう見れないのだろうか。

何があつて、彼女はああなつてしまったのだろうか。
魂を半分、捧げた青柳は。

どうして、そこまでして兄を呼び戻したかったのか。

がらんブル 其の肆（後書き）

なんてところに住んでるんだ！ と突っ込みの声があがりそうです
が、とりあえず今はするするスルーでお願いします（！？）

がらんブル 其の伍

005

さて、次の日。

俺達にとっては思わぬ転機、というか奇跡というか。とにかくことが起きた。

土曜日でも午前授業がある俺の高校は、私立みなしぐじ虚栗高校。

いつものように朝早くに起きて、いつものように優補と家を出た。時刻は七時。

ゆっくり歩いてても余裕で着くくらい。

「じゃあ、いつ訝藍ちゃんに会えるか訊いてね」

「ああ、あいつ親は夜遅くまで仕事とか言ってたな……いつも、何してるんだらうな」

「……何でそんなことまで知ってるわけ？」

「疑り深いなあ、おい」

信用してくれよ。

「私が知らないことを何でしょーじが知ってるのよー！」

「キレるポイントが分かんねえ！」

そりゃあお前は頭いいけれども。

俺よりも頭いいけれども！

「しょーじの分からず屋！」

「このタイミングで使われると悪意しか感じないぞ！」

何でも分からない人みたいな。

「昨日、青柳から聞いたただけだしさ」

「ほんつと、訝藍ちゃんが怪異なんかに関わっていなかったら嫉妬のあまり呪ってたかもね」

「物騒なことを……」

それに怪異なんかって。

「今回は祟るだけで赦してあげるけど」

「祟んな」

余計酷いじゃねえか。

大体お前のそこらへんの発言は洒落にならないんだって。

疑り深いか嫉妬深いかそんな言葉じゃ形容できないな。

怖い、怖い。

「楽しんでいるところ、お邪魔して申し訳ないのだけれど」と。

後方から、女性の声が出た。

振り返ると、

うわ。

すごい美人さんだ。

のろけになるかもだけど、優補とタメ張る。

でも相手は遥かに大人って感じた。

短い綺麗な黒髪に、丈の長い黒スカートに長袖の薄着。胸にペンダントを付けてという落ち着いた服装だが、とても魅力的。って、こんな言い方してたらマジで優補が怒るかも。

「私の連れを知らないかしら。さっきまで一緒にいたのだけれど」

「連れ　ですか」

優補がちらりとこちらを見てきた。

「あの、その連れってどんな人ですか」

俺は尋ねる。もしかしたら見たかもだし。ここでいいえ、知りま

せんと丁寧に断るといふ選択肢もあるにはあるのだけれど。

気が進まない。

女の人は指を唇に当てて、そうね、と呟いた。
ナチュラルに綺麗な動きをするなあ……。

「ちびだけど可愛くて格好いい、私の彼氏なの」

「……」

のろけやがった。

連れてって、男だったか……残念ではないが。

「すみません。見てないです」

「あらそう。彼のことを知らないなんて、現代では生きていけないわよ」

女性がそう言い終わるか終わらないかという時に、足音と声が聞こえてきた。

「おい、何やってんだ」

息を切らしながら現れたのは、きつとこの人が彼氏なのだろう、女性に比べればパーカーにジーンズという簡潔な服装で、また少々子供っぽい、それでもやはり年上の男だった。高そうなジャケットを抱えている。

「またお前やってたのか」

「私は何もしてないわ。ただ、^{しんみ}暦くんを探していただけよ」

「探していたとかこつけて僕の自慢話を周りにしてるだけじゃねえか！」

現れるなり突っ込み始めたこの男。

目の前に俺達がいるのにまるでお構いなしか。

俺はそんなことできねえなあ。

「全く ひたぎが迷惑かけた、悪いな」

相手……確か、こよみ、とか呼ばれていたが……男性は俺達二人を見て（見上げて）謝った。

恥ずかしげもなく初対面の人の前でも下の名前呼びだった。

ひたぎ、ねえ。

何だか変わった二人だ。

観光客っばい。

「い、いえ……」

そう俺が言っている間にも、男性は彼女にジャケットを渡していた。彼女のか。

「沖縄って思ったよりも暖かいのね。冬でも上着なんか必要ないくらい」

あ、やっぱり観光客だ。

ひたぎ、と呼ばれた女性は俺を見る。

「あなた、地元の生徒さんよね」

「あ、はい」

「じゃあ名字も珍しいのかしら」

「ああ、はあ 栗国といます。地名性です」

これ、県外の人からよく言われるんだよなあ……。

相手はうんうんと頷いていた。

「沖縄の地名ね。知ってるわ 私は、戦場ヶ原せんじょうがはらひたぎ。お忙しいところ、邪魔してごめんなさいね」

戦場ヶ原。

人のこと言えないじゃん。

いや、本州だとよくある姓なのか？

「そして、こっちの可愛い子が阿良々木曆くん」

「だからそうやってのろけるんじゃない、ひたぎ」

顔を赤らめて言う阿良々木さん、だった。

素直なんだろうなあ。

「で、お隣の子は彼女さん？」

ストレートに尋ねてくる戦場ヶ原さんだった。次は、俺が赤くなる番だった。

「おはよーございます。佐式優補です。しよーじの彼氏です、はい」
「彼女だって言ってるだろ」

あ。

人前で突っ込んだじゃった。

そしてそれに対して、そうなの、と普通に返してくる戦場ヶ原さんもどうかと思います……。

「私達、観光、というか旅行に来たの。去年は大学入学祝いで北海道だったのだけれど、だったら沖縄も行ってみたいわ、と私が無理を言ってるね」

随分と親しげに話しかけてくる。

「あれ。大学って、まだ冬休みなんですか？」

優補が尋ねる。

こいつそんな所によくすぐ気が付くよな。

それに頷く阿良々木さん。

「ああ、大学って結構休み長いんだよ。特に僕達のところはな。だから平日の人が少ない日を選んできたわけ」

「ということは、阿良々木さんも戦場ヶ原さんも同じ大学に通ってらっしゃるんですね」

「そうだよ。……なあ、言いにくいんだが阿良々木さんってのはちよつとやめてくれないかな、栗国」

「はい？」

なんかいきなり名前を呼ばれて驚いた。

二人ともフレンドリーだな。

何だか……初対面な気がしない。

「さん付けされると、生意気な小学生を思い出してさ」

「……」

よく分からない思考回路をお持ちのようだった。そして隣で戦場ヶ原さんが、

「私もさん付けはやめてほしいわね。さま付けでないと」

と言っのだった……。

いやいやいや。

阿良々木さ……阿良々木も、やれやれ、と首を振っているところからして、いつもこんな調子なのだろう。

ふいに、彼は下を向いた。何かに反応するかのよう。

俺も下を見たが、そこにはもちろん、何も無かった。

足元から生じる影以外は、何も無かった。

「っ！」

隣で優補が一瞬震えた。

どうした、と目で合図を送ったが、ただ下を向くだけだった。

対して阿良々木がゆっくり顔を上げる。

「栗国。お前」

「……ふむ。この匂いには憶えがあるぞ」

すぐ近くで舌足らずな声が聞こえ、気が付けば目の前に金髪の少女が立っていた。

「わ　！？」

「驚くな、人間よ。僕はうぬに危害を加えるつもりなどない」
「誰だ！？」

何だこの古風な口調！

とうかまらずどっから現れた、この美少女！

頭が混乱しているにもかかわらず、金髪少女は優補を見上げた。

「久しぶりじゃのう。うぬとは何年振りじゃろうか」

かかつ、と笑う。

え？　え？

久しぶり、だと？

横を見ると、目を瞬かせた彼女がいた。

唇がわなわな震えている。

「お、御姉さま」

えええ！？

御姉さまだと？

どっからどう見てもこの金髪は年下だろうが
まさか。

「お、おい。優補。何なんだ、この子」

「この子だなんて、恥を知れよ」
「うわ。」

優補がお怒りだよ。

キレると口調も変わるから、もう怖いっただらありやしない。

「この方は、怪異の王、伝説の吸血鬼だよ、しょーじ……」

吸血鬼？

吸血鬼ってあの、血を吸う鬼　怪異の？

「そうよ」

何かを理解したのか、戦場ヶ原さま……戦場ヶ原さんが言う。

「彼女は五百歳の吸血鬼で、そして曆くんはその眷属^{けんぞく}。忠実な僕^{しもべ}だつたわ。そして私は、その彼女。ただの、彼女よ」

「ただのじゃないよ、ひたぎ。……大切な、彼女だ」

「あら」

……またのろけられても困るのだが。

本当に、困るのだが……。

「挨拶が遅れたの、人間よ。俺の名は忍野忍^{おしのしのぶ}という。しかとその胸に焼きつけよ」

「はあ……」

えっへん、と胸を張る少女を目を点にして見つめる俺。

日本の名前だ……。

日本の吸血鬼なのか？ いや、金髪の日本人なんていないだろ。

うわー、肌白いな、こいつ……じゃないこの人……。

ちゃんと食事してんのか？

食事……吸血を。

怪異の王が、こんな姿だということが信じられなかった。

続いて、再び戦場ヶ原さんが問う。

「こうして彼女があなた達の前に姿を現したってことは……あなた達も、何かそれに関わっているのかしらね」

「……」

何という偶然。

ただのカップルじゃない、というかトリオじゃない。

彼らも……怪異を知っている。

「いいえ。でも、関わってはいました。もう、俺達は解決したことです」

もう曖昧な言い方も駄目だろう。

そろそろ潮時か。

彼女の正体。

佐式優補。

見た目は俺と同じ高校二年生だが。

年齢は、四百歳ほど。

そして、怪異だ。

「俺が関わったのは、この隣にいる彼女。彼女は、人魚なんです。するまでもないことだが、ここでちよっと昔の話。

昔といっても一年前の十二月だ。

青柳が牛に関わる一カ月前に。

俺は、人外存在、上位の存在を知った。

綺麗な歌声を持つ人魚だった。

とても美しい半魚人だった。

彼女に、恋をしてしまっていた。

そんな彼女に俺は恨まれ、拳句の果てには泣き付かれた。

まあ、俺が悪いのだが。

全ては、俺からだったのだから。

人魚に戻れなくなった彼女。

そんな彼女を俺にできるただ一つの方法で、助けた。

助けることができた、のだろうか。

そうであってほしい。

今の彼女が、今に満足してほしい。

勝手だけれど、俺は、そう思うのだ。

おや。

ちよっと待てよ。吸血鬼？

ということは、彼が彼女の言っていた

俺達を助けてくれた彼女が言っていた

「そう。人魚」

戦場ヶ原さんは首を傾げながら、優補を見ていた。

人間とは何ら変わりない見た目の彼女を。

一方で優補は感動の再会、というやつだろう、吸血鬼少女とお話中だった。

「御姉さま、お変わりないようで何よりです！」

「うむ。見た目はお互い随分と変わってしまっておるが、まあうぬにも色々あったのじゃろうよ、トラストメロ」

「いいえ、御姉さま。今の私は、佐弐と言つのです。しょーじが、付けてくれた名前です」

「ふむ。若僧にしては、なかなか危険なことをするのう」

少女に若僧と言われて正直突っ込みたくなるのだが、だが彼女は五百歳だと思ひ出して止まる。

昔話に花を咲かせる少女二人だった。

シニールすぎる……。

「人魚、には見えないわよねえ」

「そうだな……でも、忍が出てくるくらいだから、本当なんだよな」
この二人もこの二人で、すげー落ち着いてるよな。

吸血鬼と人魚じゃあ、格が違うのか。

ましてや、怪異の王と関わったのだから、少しのことでは動揺などしないのか。

「えーと、優補？」

「それで、御姉さまの今のお名前は、忍野忍といたしましたよね」

「そうじゃ。刃の下に、心有り。儂らしい名であろう。今では気に入っておるぞ」

「おしのしのぶ……二重の意味で、三重の意味を持つ、ですね！私と似ていますっ」

「いや、うぬ……佐式優補の場合は儂のよりも少々重い……二重三重どころか、永遠、連鎖。永久の補佐という感じがするがのう」
名で縛る。そう忍は言った（いや、申し訳ないのだが彼女をさん付けにするのに抵抗があったり）。

「御姉さま、重々承知しております。私はその名の通りの存在なのですから」

「そうか、ならばよいのじゃが」

「なあ、優補」

「あ、え？　しょーじ？」

まるで初めてこの場に俺がいることに気付いたみたいな顔をするなよ。

「いや、何というかもう俺遅刻しそうだから、学校行くぞ」

「あー」

そういえばそんなのもあったねー、みたいな顔をするなよ。

「私、もうちょっとみんなとおしゃべりするから」

「そうか、じゃあ行ってくるからな」

ちなみにちなみに。

優補は、高校には通っていない。

正確には、最近までは通っていた。

だが、通う必要がなくなった今　彼女はバイトに明け暮れる日々だ。

本当に、助かる。

そして俺は阿良々木、そして戦場ヶ原さん、忍にお辞儀をする。

「それじゃあ、しばらく彼女を頼みます」

「ちょっと待て、栗国」
走ろうとした時、相手は言った。

「僕達、明日まではここに居るからさ」
戦場ヶ原さんと忍を見ながら彼は言う。

「僕も色々、お前と話がしたい」
「……俺もです」

俺は人魚に出遭い。

阿良々木は吸血鬼に出遭い。

そして青柳は牛に出遭った。

それでも俺はもう優補とのいざこざは終わったし、阿良々木も見ている限りでは吸血鬼、忍と上手くやっているようだ。

だから、あくまでも今重点を置くべきは青柳だ。

俺は十分ほどで、学校に辿り着いた。

「……あ」

校門で、青柳とバツタリ出くわした。

相手は毎日この時間帯に来ているのかもしれない。

俺が登校する時に、そういうえば彼女を見かけたことはなかったし。

「……おはよう、栗国くん」

「ああ、おはよう」
あれ？

何だか声が沈んでないか？

そう訊くと、相手は首をぶんぶん横に振った。

「そんなことないよ。ただ、疲れただけ」

「ぶんぶん……」

「あれから図書館で調べて、多分、だけど分かったよ」
そう言って、青柳は少し笑った。

遅刻ギリギリの生徒達で靴箱はごった返していて、そこで俺は青柳と別れてしまった。

あいつちっこいからな……人ごみに紛れて、すぐに見えなくなっ
てしまった。

まあ、時間も時間だし、あとで話は訊けるだろう。

そんな軽い考えでいたのだが、結局。

その日、学校で青柳に会うことはなかった。

彼女は、授業中に倒れたのだという。

がらんブル 其の伍（後書き）

何の前振りも前触れもなく原作キャラ登場です。原作の大きなネタバレはしないよう心がけています。そして時系列は忠実に。

がらんブル 其の陸（前書き）

本編と矛盾が生じたらそのつど修正していきたいと思ひます。

がらんブル 其の陸

006

保健室に行ったが、もう遅かった。

放課後、土曜日なので半ドン。

正午と早い時刻。

いつまで経っても青柳が来る気配はなく、こちらから彼女のクラスに行ったが彼女はいなかった。

そしたら青柳のクラスの人から、彼女が三時間目（今日最後の授業）で倒れたのだということを知った。

「ただ疲れただけって……嘘つきやがったな、あいつ」
無理してたんじゃん。

保健室の先生から彼女の住所は訊いた。

渡す宿題があった、とか嘘をついて教えてもらった。

どうやら青柳は熱でも風邪でも貧血でもない、ただの過労だという事で早退させられたらしい。

親は仕事。

だから徒歩で帰ったそうだ。

いやしかし、彼女の家は学校からさほど離れていない。

むしろ近すぎる。

歩いて三分ほどだ。

家から学校より、校門から教室までの方が距離が遠くないか？

と思うくらい（これは、俺の学校が広いという意味でもある）。

青柳の家は、普通の家だった。

ここでいう普通の家とは、沖縄の伝統的かつ独特なあの家ではなく、都会で見られる家のことだ。ただまあ、台風対策で造りは多少違うかもしれないし、表札にシーサーが描かれているのは沖縄らし

いが。

チャイムを鳴らそうとして、思い止まる^{とど}。

危ない危ない。まずはあいつに電話だ。

携帯を取り出して、コールする。

優補は、すぐに出てくれた。息が弾んでいる。

「しよーじー!? 学校終わった!? 今どこか!?!」

「うるせえ……学校は終わったよ、それでな、」

「今私、沖縄しよーかいちゅー。阿良々木さん御一行に」

「ああ!?!」

「おすすめスポットというか、いいトコのお土産屋さんとかね。あ、あとおいしーお店とか!」

「じゃあ、今みんなでぶらぶらしてんだな」

「うん、しよーじも早くおいでよー」

いいのかなー。

沖縄旅行っていつても、あれデートみたいなものじゃないのか?

あ、いや忍がいたか。

それでも、何だか申し訳ない。

迷惑かけてないだろうか。

というかまず優補は扱いが難しいのだ。

触ると火傷するし、無視すると寂しくて死んでしまう、みたいな感じ。

人魚で火傷という例えも可笑しいが。

「ごめん、俺忙しい」

「はあ!?!?」

大きな声だ。周りにご迷惑をおかけしていないだろうか。

「何がどうして忙しいの? 今日は何も用事がないことくらい私は知ってるよー」

「いや、青柳が今日倒れてさ。今そいつの家に行つて」

「待て！ 待て待て待て！ 何？ しょーじいつの間に訝藍ちゃんとそんなに仲良くなっちゃってんの！？」

「仲良くねーよ」

「そいつ呼ばわりなんて、赦せない」

「またよく分からねーところにキレるなあ！」

「それで家に招き招かれる関係ですか」

「いや、あいつ倒れたって言つたら！」

「あいつ呼ばわりですか」

「じゃあ何て呼べばいいんだよ！」

「名前忘れたけど、まあ大した奴じゃない、同じ学年だったと思われる人」

「曖昧すぎる上に俺の学校の生徒ほとんどが一応当てはまる！」

余計お前怒るだろ。

誰か分からないじゃん、って。

「じゃーもうなんでもいいよ、下の名前以外ならなんでもいいさー」
「……………」

いや、それが普通だと思っただけだな。

「でも彼女でもないのに家に行くつてのは、ねえ」

「………… 隠してないから別にいいだろ」

「おおっぴらに浮気宣言する輩もいます」

「いるか！」

「それに、もしかしたら訝藍ちゃんは倒れた振りしてしょーじを誘つてるのかもよ？」

「なんつー巧妙な！」

「それに親は仕事だし、二人つきりだし」

「………… 疑り深すぎだろ」

「海より深し」

「計り知れないな」

「やっぱり心配だから、私も行くのかな、いや行く！」

「優補」

相手を落ち着かせようとわざと間を置いて言った。

「お前は来なくてもいい。他の皆を置いて、俺のところへ来るって言うのかよ。そんな自分勝手な奴は、嫌いだ」

「……………」

「俺はただ、青柳が心配だからあいつの家に行くだけだ。それ以外の理由なんてない」

「しよーじ……………」

「イチャリバチヨーデーって、あるだろ？ 会った時から家族同然なんだよ。家族が倒れてる時に無視なんてできるかよ」

「そーやってそういう時ばっか格好いいコトバつかって」

「悪かったな、格好つけてて」

「いーよ、しよーじ。疑ってごめんなさい。しよーじが電話してきたのって、誤解を生まない為だったんだよね」

「……………」

「訝藍ちゃんのこと、私の代わりに色々訊いてきてよね」

「分かってる」

「私はあなたを信用してます。私も家族の一人として、しよーじを待ってるから」

「ああ、ありがとう」

そう言ってくれると素直に嬉しいよ。

「じゃあな」

「あ、ちよっと待って」

彼女の息遣い。

少し荒い。

「私はそんなお人好しなしよーじを、愛してましゅ！」
「恥ずかしいことこの上ない台詞を、最後の最後に囁んで言ったのけた。」

「いや、言つてのけてないが。」

「俺も」

「もしもし栗国？」

男の声がした。

携帯を取り落としそうになる。

「だあつ！？ あ、あららら、さんつ！？」

「囁むな！ それにさん付けはよせつて言つてるだろ！」

「いや、どうして急に電話に」

「あ、今まで優補の隣には阿良々木達がいたんだつた！
やべー。」

途中からすっかり忘れてた……。

訊かれてる。

絶対全部訊かれてる。

今更真っ赤になる。

「気になったことがあつてさ、ちょっと代わつてもらつた」

「いや……阿良々木、空気読めないのか……」

あ。タメ口になつてた。

「そついやKYは曆の略語とか訊いたな」

「そつなんですか！？」

「ちなみにひたぎも空気読めない。KY仲間だな」

「戦場ヶ原さんに謝つた方が……」

と俺が言い切らないうちに、鈍い音と阿良々木のうめき声が聞こえてきた。

もう彼女は怒りの鉄拳を放っていた。
案外、分かりやすい人だ。
そして面白い。

いやしかしあの人の拳はあんな音がするのか……。

「それはともかくとして、さっき佐武さんから話は訊いた。同じ学校で、怪異に関わった子がいるんだろう?」

「……優補が話した?」

「忍に、だけどな。正確には。」

その怪異、忍が知ってるよ」

「え?」

「色々あつてさ、忍は一応怪異のこと詳しいんだよ」

「……教えてくれますか」

「教えない。助けるだけさ」

笑いながら彼は言う。

ふざけて言っているのかもしれない。

「助けるって……でも、阿良々木は何も関係ないじゃ」

「関係ないけど、関わらないなんてこと、僕にはできないな。お前だつてそうだろう、栗国。お前だつて直接的にはその子とは何の関係もない」

「同じ学校です」

「そう。ただの、同じ学校の生徒だ。でもそれ以外は何も関係ない、だろう?」

「だからって……放っておけるわけ、ない」

「そうだろう。僕も、同じだ」

あ。そうか。

同じだ。

結局俺と彼の言っていることは同じなのか。

僕達、結構似てるのかもな　　そう阿良々木は呟いて。

「だから栗国、僕はお前を助ける、お前が助けようとしているその子も、助けることになるが」

「い、いいんですか」

「言ったろ。関わらないなんてこと、僕にはできない」

「……お人好し」

「お前のことか？」

とぼけた声が返ってきて、俺は思わず吹き出してしまった。

阿良々木暦。

いい人なんだな。

チャイムを鳴らしても何も反応が無かったので、恐る恐る玄関を開けた。

「青柳？ ……誰かいますか」

「……栗国、くん……？」

がら、と玄関のすぐ隣の部屋の戸が開いて、青柳が顔を出した。真っ青だった。

「お、おい……お前、大丈夫か!？」

「え？ うん。平気だよ」

「平気ってことは何か我慢してんじやないだろうな」

「……冴えてるね、栗国くんは。冴えすぎだよ」

「違う。無理してるのが丸分かりなただけだ」

「ああ、私の演技が下手なのか」

演技してたのか。

何だか信用されていない気がしてならないな。

青柳は制服姿のまままで、寝ていたらしい（開けっ放しの戸の向こうは寝室だと見て取れた）。

それでも無理して起き上がり、俺を家に入れてくれた。
とりあえず食卓のテーブルに移動して、向き合う形で俺達は腰掛
けた。

「大丈夫なんだよな」

「うん、今はもう大丈夫」

青柳はちよつと横を見て、そしてこちらを見て笑う。

「どうしたの、栗国くん。私に何か、用でもあったっけ？」

「いや……お前言ってただろ。あの怪異について、何か分かったっ
て」

「……」

青柳は硬直したように動かなくなった。

笑顔を貼り付けたまま。

「調べたんだろう？」

「うん。調べたよ……」

頷く青柳。

だが、言葉が続かない。

「どんな怪異だ、言ってみろよ」

「……」

ちらりとよそ見して、ついに黙り込んでしまった。

俺はやっぱり、と唇の裏を噛んだ。

「……お茶出すね」

「誤魔化すな」

「喉渴くでしょ」

「別に」

そう言うと、青柳は困ったようにそっぽを向いた。

「怖いよ、栗国くん」

「悪かった、別にキツイ言い方するつもりはなかったんだ」

「こつという時は遠慮なんてするべきじゃないのに……お茶、淹いれるよ？」

「俺はいらない。お前まへと兄あにさんの分ぶんだけでいい」

そう俺が言うと、青柳は弾けるように椅子から立ち上がり、そしてじっと俺を見据えた。

「……見えるの」

「見えねえよ」

「じゃあ、何で」

「いやそれとなく」

「……嘘」

「簡単だ。お前の視線」

「……」

ずっと思っていたのだが、こいつは会話をする時によく目を逸らす。

それは、兄の方を見ているのだ。

何をしているのか、そんなことまでは分からないが。

青柳はゆっくり座りなおす。

「怖いよ、栗国くん」

「……」

「何でも、分かっちゃうんだから」

「見えないとは言ったけど、感じるんだ。俺だって、関わった人間だから」

「……怖くないの？」

「は？ 俺自身が？」

「まさかまさか。その、幽霊とか、怪異とか」

「怖いよ」
素直に答えた。

「でも、私はそういうの見えるとか言うし、隣にはお兄ちゃんがいるんだよ」

「はっ」

思わず笑う。

青柳が眉をぴくりと動かしたから、慌てて謝る。

「何者か分かっているなら、怖がる必要はないさ」

「でも……」

「言つたろ。そういうものを、俺はいると思う時もあるし、いないと思う時もある。今はいると思ってるさ」

それで、訊きたい事があるんだが、と俺は椅子を少し手前に引いた。

「お前は兄さんの魂をこちらに留めた、だろ？」

「……うん」

「そのこと、兄さんはどう思ってるんだよ。そこ………にいるなら 答えてくれるだろ」

青柳はちらりと隣を見る。彼女の左側にいるのだらう、俺から見て右を、彼女は向いていた。

じつと右を向いて、兄を見て。

やはり、少し不気味だった。

俺には見えないものが、彼女には見えている。

本当にいるかいはいかはともかくとして。

「自分が生きているか死んでいるか分からない、どのような存在であるのか分からない、なぜここにいるのか分からない、どこへ行けばいいのか分からない」

「……兄さんはそう思ってるんだぞ。お前はそれでいいとは思うのか」

「思っわけないよ……だから、帰したいと思ってる。でも、その為には」

「誰かの魂が要る」

俺も、兄がいるらしい所を見つめた。

無論、何も見えないし、何も聞こえない。

それでも、感じる。

何かの気配。

青柳訝監ではない、人の気配を。

これは、昨日教室でも、微かだが感じていた。

「他に、方法は知らないのか。魂を捧げずとも、兄さんを帰せる方法」

「知らない」

「俺は今は何とも言えないな。お前が、その怪異について詳しく言ってくれないと」

「……」

青柳は一瞬、迷ったように見えた。

言うべきかどうかを。

彼女は兄を横目に見ながら（これはあくまで俺の想像なのだが）、小さな声で言った。

「マジムンって、いるじゃん」

「マジムン……小さい頃絵本で読んだことがある。道具に取り憑く妖怪だよな」

「そうそう。マジムンは、悪霊とも言われるらしいけど。ここら辺では、結構知られてるよね。」

マジムンで、色々化けることができるみたいだよ。主に、女の人、家鴨、それに牛」

「牛、か」

俺は先程まで電話でしていた会話を、思い出していた。

「じゃあ、その怪異について教えてください。関わった彼女自身も、それについて昨日色々調べたって言ってましたけど、それでも意見が一致するかの確認で役に立つ」

「そうか、分かった」

阿良々木は、正式な怪異の名前を、口にした。

「その子が関わった、赤い雄牛の怪異。それは、現世と来世を渡る怪異だ。つまり、その中間に位置する存在。言うなれば、陸と海の狭間。岩頭牛がんとうしっていう名前で、知られてるぜ」

がらんブル 其の陸（後書き）

のろけるつもりはないと言っておきながら、のろけてるといふこと
ろを栗国くんのウリにしようかと（！？）
て、とんだバカッブル小説になっています…

がらんブル 其の漆

007

「岩頭牛？」

数十分前の俺と同じ反応を、青柳は示してくれた。

「でも、それってマジムンとは違わない？」

「それは名前だけだろう。ちゃんと俺の説明を訊いてたのかよ」

「ううん」

「堂々と言いな」

全く。

説明し直した。

「岩頭牛は、人の前には、主に牛の姿をとって現れる。人にも、道具にも化けることができる。ほら、マジムンと共通してるだろう？」

名前は違えど、同じものだよ」

「マジムンは、こっちで知られてるだけで一般的にはそう呼ぶのかな」

「そうかもな」

「それに、栗国くんの話からすると、それは牛マジムンって感じだね」

「そうだな……」

いやでもマジムンってここでも結構マイナー妖怪だぜ？

絵本がお祖母ちゃんの家にあったから俺も知ってるわけで。

俺も青柳が言うまで気付かなかった。

これは、沖縄の怪異だ。

「栗国くん、あれ見てた？ 『琉神マブヤー』」

「ああ、なんかあったな、それ……」
戦隊もの。

沖縄限定ヒーロー。

ニライカナイからやってきた、魂の戦士 だったか。

「あれの敵の軍団の名前、『悪の軍団マジムン』だったよね」

「いや、知らないけどさ……」

「あれは、悪い魂の総称であって、牛ではなかったな」

……。

「ごめん、知らなくて。」

「それにしても、栗国くんも調べていてくれたんだ」

「言っただろ。できるだけのことはするって」

だがこれは阿良々木の受け売りだ。

俺は……何も、していない。

「何だかとっても心強いよ」

「……………」

「これなら、信用してもいいかも」

「やっぱ今まで信用してなかったのか」

「だって普通そうじゃん。あまりにも偶然だったし、信じられない

よ」

「まあ、俺も今朝はびびったよ……吸血鬼なんて」

「ん？ 何のこと？」

「何でもない。それよりもさ、青柳」

「ん？」

「その量はなくないか！？」

今は午後一時。

いつもなら家で昼食の時間だ。

折角来てくれたんだから、好きなと一緒に食べようよ、と。

青柳は買い溜めしていたと思われるパンやらカップ麺やらをテーブルに積み上げていた。

体に悪いだろ……。

風邪ではないとはいえ、栄養のバランスがよろしくない。

長い間一人暮らしをしていた所為か、そこら辺気になって仕方ない。

しかもこいつは。

「ええ？ 普通じゃない？」

「お前の一日の摂取量はどれくらいだよ……」

テーブルの上に、お湯が注がれた即席ラーメンと、スパゲッティが二つずつ。

皿の上には、菓子パン含む様々なパンが盛られ山積み。

それ一人で全部食べるのかよ……。

「今日は気分が悪いから、こんなもん」

「見てるこつちの気分が悪い！」

「もー、酷いなあ、栗国くんは」

「……お前結構スタイルいいのにな」

まさかこんな裏面が。

ドン引きだ。

「私太らない体質だから」

「羨ましすぎるな！」

「それに背も伸びないし」

うーん、不思議少女だ。

中身が色んな意味で。

タイマーが鳴り、青柳はお湯を捨てて早速食事に取り掛かった。一方俺はパン一つ。

マンゴー味のメロンパンを頂いた。
青柳は口が空になる度に話しかけてくる。

「何でメロンパンなの？」

「いや、久しぶりに食べるなーと思って選んだんだけど」
「ここはパン屋か、って思うほど種類が豊富だったが。」

「違う違う、どうしてメロンパンって言うんだろっね」

「そんな根本からかよ……見た目がメロンっぽいからじゃねーの」
「……。は？」

「何だそのジト目！」

「メロン味でもないのに何でメロンパンなんだろ。ネーミングセンスを疑うよ」

「いや俺に訊かないで！」

これは優補が！ 優補が言っていたことなんで！

「どっちかと言ったらメロンよりもマンゴーに見えるな」

「それはこれがマンゴー味だからだよ！」
オレンジに着色されてるし！

そもそもマンゴーに見立てて作ってあるんだろっがこれ！

あ、だったら名前マンゴーパンにするべきじゃね？

「知ってた？ 昔メロンパンはサンライズって呼ばれてたんだよ」

「かけえ！」

メロンパンは太陽だったのか……。
しばらく食事。

黙々と。

俺がパンを食べ終わった時、青柳は二つ目のカップ麺に取り掛かっていた。

麵伸びないのかな。

「よくそんなこと知ってるよな。やっぱり頭いいよ」

「物知りイコール頭がいいは違うよ」

「む」

それが分からないということは俺はそれほど馬鹿だということになる。

「お前なら知ってると思うけど、うちの学校って成績でクラス分かれてるよな」

「うん、いい人から一組、一番下は七組まで」

「お前なら知ってると思うけど、俺は五組なんだよ」

「何さつきから枕詞みたいに……で？　それが？」

「いや、一年の時は俺達同じ四組だったじゃん。だけど今俺は五組、お前は二組だ」

「……だから？　私が頭いいとか言いたいのか？」

「……そういうことだ」

「まさか」

青柳は笑った。

乾いた笑顔。

「私が頭いいわけじゃない。私が頭いいんだったら、私より上のクラスの人は何なのよ、神様？」

「例えが奇抜過ぎる……」

「それに、私が頭がいいんじゃないで、みんなの成績が下がっただけだよ」

「酷い言い方の上に意味的には一緒だな」

「頭いいといえば、あの子がいたじゃん。ほら、栗国くんも話してた子」

「ああ、ゆう……佐式のことな」

「そうそう、佐式さん。あの子一組だったけど、いつつも栗国くん

「ここにきてたよね」

「そうだったな」

懐かしい。

一年前までは優補も高校に通っていた。

「つーかお前食べるのも早いのな」

「え？ 普通だよ」

「お前の普通の基準が普通じゃない」

麺が伸びる前に食べきれんな、こりゃ。

勿論パンを食べることも忘れてません。

「お前はあれだな、めだかで言う不知火半袖だな」
謎な子。

ぼきゅぼきゅはしてないけどおチビさんだし。

そして胃袋にブラックホール装備。

ラーメンをドリンクだと思ってんじゃね？

「しらぬい？ 半袖？ 私今長袖だよ」

流石にめだかボックスは知らないようだった。

まあ、ジャンプだし。

「つて、話逸らさないですよ。佐弐さんの話の途中でしょ」

「あーそうだったな」

「あれ、何だか顔赤いよ？」

「は。んなわけねーよ」

思わず手を顔に当てるが、何ともない。

騙しやがった。

青柳は済ました顔で、最後のカップ麺の蓋をピリピリと開けていた。

「はっはーん。なるほどね」

「何かなるほどねだ。小学生かお前は」

「栗国くんこそ。小学生並みに純粹なのね」

「なっ……………」

何その我が子を見つめるお母さんみたいな目！

言っておくがなあ！

ラーメンの滴が頬くわしについてる奴にそんな目で見られたくないぞ！

「それでそれで？ 彼女とはどんな関係で？」

「ノリが中学生になってきた……………」

「海苔？ ラーメンにまだ入ってるけど。いる？」

「いらねえよ！ そしてどうして食べ物の方に行くんだよ、お前の思考回路はどうなってるんだ！」

「海苔が中学生って、どんな海苔よ」

「こつちが知りたいわ」

「もー、栗国くんたらノリ良すぎ」

「そっち！ 俺が言ってたのはそっちです！」

……………って何だこの馬鹿な会話。

「思い出した。その佐武が、お前に会いたがってたよ」

「へー？ 佐武さんが？ 何で？」

「まあ、話をしたら、色々とな」

「ふうん……………じゃあ、今度会ったら詳しく聞かせてもらおうと」

「思わぬ機会を与えてしまった！」

何やってんだ俺！

自殺行為だった。

「まあ私には大方予想がつくけどね。多分あんなことやこんなことを」

「やめろ。優補とは何もやましい事はしてねえ」

「優補。優補ねえ」

「……」

口が滑りすぎだ、俺。

自殺も同じだった。

「栗国くん、仏頂面だけど案外可愛いんだね」

「ダブルブロー……」

どっちも言われたくない言葉だった。

もうHP減りまくりだ。

「今度話は佐式さんに聞くとして、っと。お口直し」

空になった容器と、山積みのパンが乗っていた皿を片付けて戻ってきた彼女は、ポテチの袋を持ってきていた。

「まだ食べるのかよ！」

「当たり前じゃん」

「お前の胃袋はマジでブラックホールか!？」

「嫌だなあ、四次元ポケットだよ」

「異次元空間があることは否定しない!？」

「栗国くんも一緒食べよ」

「その台詞がもう怖くなってきた……」

何時間付き合わされるか分からない。

「お前そんなに食べたら牛になるぜ」

「それは嫌だけど、でもそれは食べた後寝たらでしょう。私は食べる前に寝たから大丈夫」

上手くすり抜けられた気がする。

茶化して言ったんだけど。

「どっからそんなに湧いて出るんだ食べ物が……お前んち、金持ち

「？」

「違うよ、知り合いが某食品会社に勤めてて。主にパンとかお菓子のだけだ」

「へー、なるほどな。それでお試し品とか貰ってる感じか」

「うーん、そうだけど、……むしろ頼み込んで貰ってる。賞味期限切れのやつ」

「はひっ!？」

「いやいや大丈夫、栗国くんのは大丈夫なやつだよ」

「そういう問題じゃなくってだな……」

「さっきのパン、二日過ぎてるだけだし」

「謝罪を求めろ!」

俺はそういうの気にしないけど、人様に出すもんじゃねえよ!

「ご、ごめん……。いやでも、他のはほとんど一週間切れてたし」

「あー、お前の中ではまともな部類だったのか……」

貰った俺も悪いっちゃあ悪いんだけどさ。

常識ってものを弁^{わか}えてくれ。

俺はちらと青柳の隣を見る。

ふいに、思った事があった。

「そつえばさ、お前の兄さんって物静かな人なのか？」

「違うよ? 急にどうしたの」

「いや、隣で笑ってたりするのかなーって」

「……笑わない、かな」

「そつなのか? ちよつと気になってさ。隣にいたりとか言ってるけど、全く話す素振りを見せないから……」

「ああ……」

すると青柳の表情が戻^{かえ}ってきた。

笑顔は消え、代わりに生気が感じられる。

「お兄ちゃんは、物静かな人じゃないよ。でもね、今は、違うの」
「……………」

「ここにいるとはいっても、死んでしまった人だから……………話はできても、彼から話してくることはないの　話が噛み合わない時だつてあるし」

生ける屍しかばね

とは多少意味合いが違うだろうが。

それでも、色んな寓話で使われる話だ。

友人だったか恋人だったか、とにかく死人を再び現世へ連れてきた人がいた。それでもそれはやはり死んだ人間だから、どこか違う気がしてならなくなる。そしてしまいには後を追って死人となってしまう物語が、よくある。

青柳も、死んではいないが、魂を捧げてしまった。

半分も。

その所為だろう、彼女が死んだように笑うのは、魂が抜けている。

「なあ青柳、話してはくれないか。どうして兄さんをここに連れ戻した。兄さんは、どうして亡くなったんだ」

「……………」
菓子の袋に伸ばしかけたその手を、俺が止めた。

「お前が話す気がないんなら、俺から話す」

「……………」

「俺の両親は死んだ。俺がまだ小学生の頃だったよ」

「え……………」

そんなに前から、と言いかけて彼女は言葉を濁した。

「俺はお祖母ちゃんの家に取り取られた。だけど、中学生になって意識しないようにしてるつもりだったが、やはり思い出してしま

う。

涙が 込み上げてきていた。

「お祖母ちゃんも死んだ」

「そんな……」

「どっちも、事故だった。船が沈んだんだ。最初は入学祝い、次は高校合格のお祝いで、船旅に行く予定だったんだ。だけど、」

泣くな。

涙を流すな。

目は潤んで何もかもが歪んでいたが、俺は涙を零すまいと必死だった。

「有り得るか？ どっちも船が沈むんだぞ？ タイタニックでもあるまいし、みんなが海に飛び込んで、そして、俺以外 みんな、」

「栗国くん！」

青柳が止めた。

俺を止めた。

「ごめんなさい！ 栗国くん、辛いこと言わせちゃって」

「ああ、やぎ……」

「慣れる、とか前言ってたじゃん、でもやっぱり、慣れるなんてことはないんだよね」

「……………」

「私よりも、ずっと辛かったんだよね」

「……………」

そんなことはない、と思う。

お前の方が俺よりも辛い思いをしたかもしれない。

そうでなければ、魂を捧げるなんて真似はできない。

死体を集めるなんて真似はできない。

「私も、ちゃんと話すから。何があつたか、話すから」
そうして。

なるほど青柳の話は、ある人が訊けば俺の方が辛かったらうと言
い、またある人が訊けば彼女の方が辛かったらうと言つような
どちらが、なんて比べることなどできない重いものだった。

比べるようなものではそもそもないにせよ。

彼女にとって、辛くて悲壮な出来事だった。

がらんブル 其の漆（後書き）

文献によると、牛マジムンは正確には赤ではなく黒いのだそうです。いやしかし、今回赤い雄牛にしたのには理由があるのです…。更新を待て（誰！？）

がらんブル 其の捌(前書き)

はじめは暗い内容となっておりますが、その?、更新です。

がらんブル 其の捌

008

「去年私のお兄ちゃんは、教師になったばかりだった」
青柳が語りだした。

中学校の教師だったそうだ。それまでは、大学生の間は、家庭教師もしていたらしい。

どうしてそこまで、と俺が訊くまでもなく、彼女は答えていた。

「お母さんを、見ていられなかったから」
数年前。

青柳は都会町に住んでいた。

青柳の母親は、父親と同じ一流企業に勤めていた。
ところが企業買収により会社の方針が一変した。

何でもこの不景気を乗り越える為、とか。

定員削減の為に社員切りが行われ、青柳の母親もその対象になった。

リストラされなかった父親は、それでも、過労で亡くなった。

仕事がなくなつて、母親は兄妹を連れて祖父母の家に移してきたのは、五年前のことだ。

祖父母は自営業を営んでいて、青柳の母もそこで働いていた。だがそれは一年も持たなかった

「おじいも、おばあも、死んじゃった」
残ったのは、家族三人。

今住んでいる借家にも、いつまで住めるか分からない。
母親は、フリーターとなった。

仕事ができるだけでしたと、場所を転々としながら朝早くから夜遅くまで、働いているそうだ。

今まで。そして今も。

ここで、同情をするのは間違いだと思う。

俺としては、怒りのほうが大きかった。

どうして、こんなことに。

「お兄ちゃんは、そんなお母さんが、見ていられなくって」
あくせく働く母親を、見るに耐えられず。

当時大学三年生だった彼は家庭教師を始め、それだけでなく教育職員免許を取った。

一生懸命勉強をして。

元々、人に物を教えるのが上手い人だったそうだ。

だから、それを活かして、安定した職に就いて稼ごうとした。

母親を、救おうとした。

妹を、救おうとした。

家族を、救おうとした。

だがそんな兄の強い意志は、一瞬で打ち砕かれた。
交通事故。

バイクの無免許運転。

暴走させたそれを乗り回していたのは、高校生だった。

それに、兄は轢かれて、死んだのだそうだ。

顔の原型は分からないほどぐしゃぐしゃで。

唯一身に付けていた財布の中に入っていた、写真がなければ分からなかったそうだ。

家族写真がなければ。

兄は家族のことをいつも思っていた。

家族のために、必死だった。

だが自分はどうなんだろう　青柳は、そう思うようになった。
そしてそれに追い討ちをかけるかのように。

「……そんな」

虐待。

身も心もぼろぼろになった母親が快樂を求めて娘の虐待を始めた、
そつだ。

一時期は麻薬に手を伸ばしかけたらしいが、青柳が気付いてやめ
させた。

正しい判断だったのだろうか、いやこの時点では正しい判断だっ
たのだらう。

青柳も兄と同じで、母親の苦しむ姿を見たくはなかったのだから。
だがそれが引き金となったと言っても過言ではない。

心の拠り所を、薬から娘へ。

精神的快樂からから暴力による快樂へと。

いつでも、暴力を振るうようになったわけではないと、青柳は言
う。

たまに、仕事か何かできついことがあった時だけだ、と。

だがそれは何の釈明にもなっていない。

言い訳にしか聞こえない。

心配御無用、と言っているようにしか思えない。

お前は、それでも、虐待を受けているんだらう？

それだけは否定できないだらうが。

それに、青柳の「たまに」が俺の想像している「たまに」と同じ
とは言い切れない。

基準が違うのだから。

暴力を振るうとき、いつも青柳は言われるという。

兄はいつも勉強をしていた

兄はいつも私達の為に働いていた

兄はいつも私を気遣ってくれた

兄はいつも、兄はいつも、兄はいつも

そしてそれは悲痛な叫びへと変わり、泣き声へと変わり、そこで

エスカレートするのだ、という。

だが青柳は耐えた。

母親の溜まったストレスが、少しでも解消されるのなら、と。

母親の道具となることを決意した。

それが今の自分にできることだと。

兄が教師になったように。

それが、家族を救う手段なのだと思って。

青柳は勉強に励んだ。

いつもより元気に明るい生徒でいようと心がけ、常に笑うようにした。

だがそれは空の笑顔で。

がらんどろ。

母親のことは知られなくなかった。

今でも生々しく残っている、背中傷を見られなくなかった。

非難がましい目で見られなくなかったし、哀れみの目で見られなくなかった。

突き放されるのが怖く、母親が捕まるのが恐ろしかった。

どんな関係になろうが 家族であることには変わりがないのだから。

相手が自分のことをどう思っていようと。

母親は母親なのだ。

だが青柳が表で快活にふるまおうとすればするほど。

裏ではストレスが溜まっていった。

笑い方を忘れた。

いつもどんな風に人と接していたのか分からなくなった。

異常な食欲が芽生えて。

それは青柳の心の叫びなのに。

SOSを、発していたのに。

彼女は、変わるしかなかったのだ。

変わらざるを得なかった。

そしてまた彼女は悔やんでもいた。
自分にできることは、これくらいなのだ
その時。

「私は、赤い雄牛に出遭った」

兄が死んだ冬休みに。

母親が娘を心の拠り所としたように、娘は怪異を心の拠り所とした。

誰にも相談ができず。

一人で全てを抱えてきた彼女が、得体の知れぬ妖怪を頼ったのも無理はない話だ。

兄を連れ戻す為に、魂を半分捧げるのを厭わなかったのも。

誓いを立てたことも。

彼女にとっては、何ということもなかったのだろう。

もう既に、魂はなくなっていたも同然なのだから。

初め、青柳が兄を連れ戻したのは、母親を喜ばせたかったからだという。

だがどうやら母親には兄の姿は見えなかったらしい。
当初の目的がなくなつて、それから青柳は毎日兄と話すようになった。

幽霊と話す代わりに、クラスの子とは誰とも会話しなくなった。

だが青柳は気にならなかった。

気になる事がどういふことか分からなかった。

側には兄がいる、それだけでよかった。

たとえそれが、生きていた当時の兄と違ったものでも。

話しかけてこない存在でも。

青柳は虐待に耐える事が少し楽になつて、気持ちもちよっぴり楽になつたという。

勉強の面でも。

努力が報われたのか、青柳は二年生になつて上位クラスに上がった。

たし、同時に母親の虐待も収まっていた。

普通の高校生だった、なんて 思い込みも甚だしい。彼女の、文字通り血も滲むような努力を、俺は今の今まで知りもしなかったのだ。

勿論そうなるようにまた彼女は努力していたのだが。

青柳はもつと、もつと 成績を上げようと頑張った。

母親が一瞬見せた、あの笑顔をもう一度見たいと。

だが兄を現世に留め続ける為には、他の魂が必要だった。

青柳は必死だった。

少しでも誰かが死んだという噂を耳にすれば、飛んでいった。

道端で動物が死んでいれば、迷わず牛に捧げた。

兄が側にいてくれなければ。

いつか、自分が壊れてしまうような気がしていた。

だから、今まで怪異について詳しく調べなかったのは、きっとそんな余裕がなかったからだろう。

そして、このままでいいと思っていたからだろう。

兄を帰すにはまた大きな対価がいる。

自分の半分の魂と同じ、またはそれ以上の価値のものを。

そんなことをするくらいなら、定期的に動物の魂を捧げるほうがいい、そんなことを思っていたからだろう。

だから俺は、必要とされていなかったと言える。

ずけずけと入り込んで、厚かましいのはどっちなんだか。

必要とされたのは牛であり、また、俺の家族の魂だ。

これからも青柳は魂を集めるのだろう。

そして、母親のストレス発散の道具となるのだろう。

いつまでも、兄とい続けるのだろう。

「……そんなのは、駄目だ」

話が一通り終わり、菓子袋が空になったとき、俺はそう言っていた。

青柳は笑いながら俺を見た。

「お前はそれでいいかもしれないけど、兄さんはどうすんだよ。さつきお前言ったじゃねえか。兄さんが帰れないのは嫌だ。」
と言いかけて。

同時に俺は思い出した。

お兄ちゃんに会えないのは嫌だ、お兄ちゃんが帰れないのは嫌だ

「…………どっちなんだよ」

「え？」

「言ってることが矛盾してるよ、お前。もう死体を探し回るのは嫌牛に会うのは嫌と言っても、兄さんを留めるにも帰すにもそうしなくちゃいけない。やめたいって言ってるけど、お前実際は帰したくないんじゃないのか？」

青柳は答えなかった。

肯定もしなければ、否定もしない。

「余計なお世話かもだけど、言っとくぞ。お前がやってることは、逃げだ」

「……………」

「それじゃあ母親の為にもならないし、自分の為にも良くない」

「じゃあ、私はどうすればよかったのよ」

「……………」

「お母さんに、やめてって言うの？ 先生や友達に相談すればよかったの？」

「それは」

「栗国くんだって、私の立場だったら、」

そこで彼女は言葉を切り、目をそむけた。

俺が、お前の立場だったら。

「しょーじ、おかえりー」

帰ってきたときには、もう三時になるところだった。

随分と時間が経っていたようだ。

優補が、玄関の鍵を開けて微笑みながら迎えてくれた。

俺は何だかほっとして、靴を脱いで上がる。

玄関の小さな棚の上の、口を開けたシーサーが目に入って目尻がさらに下がる。

優補は、飲み物何がいい？ と尋ねながらどたどたと台所へ向かった。

冷たい紅茶がいい、と言いかけて、先客に気付く。

阿良々木御一行。

人数分どこで揃えたやら、座布団に皆鎮座してしまっただけ、我が家のようにくつろいでいた。

「お、栗国帰ったのか」

「いや……何してんすか」

「言ったじゃん、色々話したいって。明日僕達帰るしさ」

「佐式さんのお陰で、予定も早く終わったし。安くて可愛いシーサーも買えたし。暦くんそっくり」

「僕は安くて可愛い男なのか」

「そんなことは言っていないでしょう。文脈だけで判断しないで頂戴」
また始まった……。

一応、俺の家なんですけど。

「これで、あとは夜を待つだけ ね」

意味ありげに言う戦場ヶ原さん。

一方で呆れ顔の忍だった。

頬を膨らませているのがやけに可愛いのだが。

五百歳なのに……あれ？

「そついえば、忍……さんは、
言いにくい……。」

だが、彼女にぎろりと睨まれて身がすくんだ。
座ろうとしても、体がしばらく動かなかった。

腕に抱いているシーサーのぬいぐるみとのギャップが凄まじい。

「元々からそのような姿なんですか？」

「……ふん」

益々むくれちゃって。

「儂を誰だと心得る。怪異殺しとまで呼ばれた、怪異の王じゃぞ。

その姿が元からこのようなべったんこなロリ少女なわけがなかるう
が」

「……」

自虐ネタ……ではなさそうだ。

でも自分のことをべったんことかロリとか言うなよ……。

忍はそれから何も言わなかった。代わりに、阿良々木が続ける。

「忍は今、縛られてるんだ」

「縛る？」

「そう。名前で縛り、僕の影に縛ってある。力も制限されて、吸血
行為はできない。唯一、僕の血だけが彼女の食料なんだ」

「どうして……そんなことに」

「償いだよ」

阿良々木は言った。

そして、あとは何も言わなかった。

そう言われているにも関わらず、彼女は胸を張った。

「まあ、僕の真の姿はぱないがの。一度見たら決して忘れられんぞ」
決して、決してそんなつもりではないだろうが、その胸部を主張しているような気がしてならない……。

真っ白のすけすけのドレスを着ているし。

貴族の子みたい豪華さ。

いやでもやはりぬいぐるみが……。

威厳たつぷりの態度と飽和していい感じた。

「栗国、僕も佐式さんのことを色々訊いたけど、
話したのか、優補。」

優補はといえば、台所で忙しそうだった。

聞こえてはいるのだろうか。

「どう見ても足は魚じゃないよな、とかそんな話をしたんだが」

ああ、なるほどね。

気になる人は気になるだろう。

特に話すこともないが。

「怪異と一緒に暮らしているからといって、その周りの人間が怪異
に関わりやすくなるなんてことはないと思うんだよ」

これは優補も訊いていなかったことなのだろう、コップいっぱい
の紅茶を俺に渡しに飛んできた。

「そうなんですかっ、曆くんっ」

もう下の名前呼びだった。

やれやれ、でも仕方ないか。

彼女の方が年上なのだし。

それにそこらへんはちよつと俺と感覚がズレているというか。

阿良々木は慣れた様子で頷く。

彼も何も思っていないのか……。

「怪異に関わりやすくなったのは自分自身で、周りには影響はあまり起こらないものだよ……忍は、怪異の王だから相当影響があった」「ということ……」

変に気を回す必要はない、のか。

胡坐をかいていた阿良々木は、この話は終わりだとばかりに膝をぱんと叩いた。

「そんなことよりも、牛の怪異だよ、栗国　名前は、青柳訝藍とかいったよな」

「は、はい」

優補を横目に見ながら俺は返事をした。
ふむ、と隣で唸る戦場ヶ原さん。

「訝藍、ね　伽藍とは漢字が違うわね　確か、訝には、迎えるとかいった意味があったわね。それに、青柳の『青』に、訝藍の『藍』。それに相対するように、出遭ったのは真つ赤な怪異」

「？」

「半魚の人間よ、怪異や、またそれに行き遭った者の名前は、大事なのじゃよ　深く関わり、結びつくのには理由があるのじゃ。境遇、とかそれ以前に、の」
それはまた初耳だった。

訝藍という名前は確かに珍しいなあ、とは思っていたけれども。
戦場ヶ原さんいわく、訝には迎えるの他に、訝いぶかる、驚くといった意味があった。

怪訝という言葉があるように。

そして、訝藍自体の意味。

本人がいないので正しいかは分かりかねるが、訝藍には、また戦場ヶ原さんいわく、伽藍。
寺だ。

静かな、場所。

平穩。

または、がらん。

空虚なさま。

これもまた、静か。

伽藍堂。

がらんどろ。

そんな彼女を守護するかのような、神のような、存在。

壊れてしまいそうだった彼女を、護っているような存在。

赤い雄牛。

マジムン。

岩頭牛。

そして、兄の魂。

なるほどこうして考えてみると、色々とつじつまが合う気がする。

「あー！」

突然優補が叫んで拳手をした。

うるせえよ……。

忍がびくつとしてたじゃん……。

忍の睨みつける。

効果は今ひとつのようだった。

「御姉さま、私は凄いい発見をしてしまいましたー！」

「相変わらずうるさいのう、うぬは……。いやしかし、昔に比べれば随分と大人しくなったか、の。かつて儂はうぬから、姉御と呼ばれておったからな」

……。

そういえば、この二人、いや正確には二体、一体どこで知り合ったんだろう……。

優補が御姉さまって呼んでるのは、実際に血が繋がってるわけじ

やないけど、関わりが深いのは分かる。

「して、なんじゃ。言ってみよ」

「はいっ」

何だか興奮しているようだ。

「御姉さまは、マジムンがこの辺りでどんな妖怪と捉えられているかご存知ですかっ」

「いや、そこまでは僕は知らんの」

阿良々木も、戦場ヶ原さんも、首を横に振る。

「昔、沖縄では竈がんという、棺桶を運ぶ道具が葬儀の際に使われました。その竈は、真っ赤なんだとか」

「赤……」

「その竈に、霊が宿ったものの総称をマジムンと言って、さらにそれが牛の姿をとる場合は牛マジムンと呼ぶんです」

「なんだかややこしいな」

と阿良々木。

確かに。

ダブル変身。

「それがうぬの凄い発見、かの？ 真っ赤な牛の後付け、ということかの？」

「そうですが、まだ続きがあります。まだここからです、御姉さま優補は、ここでわざと間を置いた。

「つまり、岩頭牛もマジムンと同じ、そして竈も牛も同じということです。ここで、思い出して欲しいのが、岩頭牛という名前です。

『がんとうづし』、『がんとーうし』、『がんとおうし』、『竈と雄

牛

「…………凝った洒落じゃの」

こじやれとる、かかつ、と忍は笑った。

優補だから気付いたことだな、これ……。

よく語尾を伸ばしてるから。

「しかし面白い。佐式優補よ、今日は特別に僕の頭を撫でることを許してやるわ」

「え、あ、いいんですかっ!？」

「うむ。うぬは仲間であり、僕らは姉妹のような者じゃ。近う寄れ」

…………は？

意味が全く分からなかったのだが。

頭を撫でるって……。

しかし優補が歓喜の声を上げて忍に襲い掛からんばかりに飛びついたのには驚いた。

目キラキラさせてる。

俺にも見せたことないうっとりした顔してる。

そして、もう慈しむように忍の頭を撫でている。

えええ……。

阿良々木を見ても、何てことはない、と言った顔でそれを見ていたし、戦場ヶ原さんも同じだった。

「でも、初めて見るわね…………」

「あ、あの戦場ヶ原さん。これ、一体どういうことですか？」

「服従の儀式よ」

「ぎしき…………？」

「曆くんから訊いてはいたわ。吸血鬼同士が、その主従関係の証として頭を撫でるといふのがあるそうよ。最も、その上があるらしいけれど。勿論、佐式さんは吸血鬼ではないけれど、さっき本人が言っていたように、姉妹のようなものなら、この儀式は成立するの

でしょう」

「は、はあ……」

よく分からなかったが、優補にとってこれは大変名誉なことらしかったし、忍は自慢げに胸を張っていた。

怪異にも色々あるようだ。

王様に触れても良いと言われて舞い上がる部下のようなものだろう。

いや、王様がタッチングをしても良いと言うような機会が、一体いつあるのかと言うのは置いといてだ。

「……あ」

優補が小さな声でそう言ったのが聞こえた。

気付けば、彼女は、俺の目の前にいて、そして、

「はぐっ!!」

ハグされた。

おいおいおいおいおい。

ちよっ、いや、初対面同然の三人の前で何を

「しよーじ、むくれないで欲しいにゅー!」

「にゅ、にゅって　!」

いや俺むくれてないぜ?

残念ながら仏頂面なだけだ。

首が、絞まる。

喋るなと言いたいのか!?

「曆くん、語尾がにゅの子がいたわよ。私も昔やろつとしたことがあったわね」

「いや、ひたぎには似合わないよ」

「全く、うぬらのろけも大概にせい。近頃ようやっと我があるじ様

のろけが収まったばかりと言うに、今度はうぬらかよ」

「いえ、あ、あのっ」

「ひたぎも昔に比べれば、随分と大人しくなったよな」

「あら。それは久しぶりに激しい私が見たいということ？」

「違えよ！」

「恋盛りの若僧はこれじゃから困る」

「私はしょーじだけだよー、怒らないで、ね？」

「ゆ、優補」

駄目だ。

腕ががちり固定されてる。

そもそも優補も若僧などでは決してないと思うのだが。

「取り込み中のところ申し訳ないが、栗国」

返事ができないので片手をひらひらと振った。

「その青柳には、ちゃんと怪異のことを話したんだよな？」

腕の力が緩む。

即座に引き剥がす。

ロック解除。

「はあ、そうです、……すみません」

「別に。気にしてないよ」

気にしないのもどうかと思う。

優補は満足したようで、再び俺の隣に座った。

腕を肩に回さないで……。

「彼女はどうかだつて？ 解決法を一人で見つけてたりしたか？ じ

やなければ、手段はあるけど」

「いえ」

喉をさすりながら俺は言う。

対抗するように戦場ヶ原さんも彼氏に腕を回さないで……。
忍が呆れ顔だ。

「彼女は、このままでいいって思ってるみたいで 詳しくは話せませんが、彼女にはいわゆる、深い事情があつて。それで牛が兄の魂を連れ戻してきたけど、そのままいいと」

「待て」

忍が制した。

「牛が、魂を連れてきたじゃと？」

「え？ はい、そう言っていました」

「ふむ、うぬ、それは何かの間違いではないかの」

「……え？」

ぬいぐるみに力を込め、忍は歯を剥き出して笑った。

八重歯があらわになる。

「半魚の人間よ。岩頭牛は、現世と来世の間に位置する怪異じゃ。死んだ者の魂をむさぼり喰う、それ以外の何でもない。岩頭牛には、魂を連れてくるなどといった真似はできぬ。マジムンも然り、じゃろつ。」

岩頭牛が生きた人間に関わる理由はただ一つ。対象者の死を誘い、魂を根こそぎ喰う、それだけじゃよ」

がらんブル 其の捌（後書き）

言わずもがななことではありませんが、本作で暦くん達は原作でいうメメポジションなわけですね。そろそろがらんブル、簡潔に完結です。

がらんブル 其の玖 ? (前書き)

長くなったことと、一気に載せるとつまらないかなというのもあり、分割して掲載です。

がらんブル 其の玖 ？

009

忍の言うことに間違いがないのだとしたら。

否、五百歳の吸血鬼に間違いなどないと考えるべきだが。

青柳は、勘違いをしている、あるいは何か嘘をついていることになる。

そういえば 阿良々木も、あの時牛が魂を運ぶ怪異、などとは一言も言っていなかった。

牛の怪異の文献なんて少ないだろうから、何か取り違えてしまったのだと思うのが妥当だろう。

それから俺は、阿良々木達と話し合いをした。

結果、青柳の危険性を本人に伝えるべきだ、そしてできるだけ早く対処しなければならぬ、ということが決定した。

阿良々木達を知らない青柳には、彼らが直接話すよりも俺が伝えるほうがよいのだとか。

信頼関係、とか言っていた。

嬉しいことに、阿良々木は対処法がある、と言っていた。

教えてはもらえなかったが。

彼が言うには、最後の手段なんだとか。

よく分からなかったが、俺としてはこうも頼りっぱなしなのは申し訳がない。

何というか、青柳と阿良々木のパイプ役みたいな感じが拭えないのだ。

「もしもし、青柳です」

一分程コールして、ようやく出てくれた。

もう夜遅いからな……。

入手したての携帯番号。

隣で優補という名の監視官付きで、通話。

勿論、阿良々木達には帰るべきホテルがある為、今頃そこで夕食だろう。

忍は阿良々木の影に潜む事ができるそうで、普段人前には姿を現さないそうだ。

ホテルも二人分で予約してるんだらうな……。

「え？ 栗国くん？ ……どうしたの」

「いや、なあ、青柳。実は、お前の怪異で分かった事があって」

「……。言ったでしょ、私は別にこのままで構わないの。お兄ちゃんが側にいてくれるのなら、私は、」

「それが、違うんだよ。えーとだな」

「どうする。」

「ここで忍の言っていたことを正直に話すか。」

「いや、混乱させるだけだろう。」

「とりあえずは、身の危険を。」

「その怪異が、どうしてお前に付きまとして 憑きまとっている

かって言つとだな、お前の魂を食べるのが目当てだかららしい」

「えっ」

「今はそつでないにせよ、いずれ牛はお前を食べる」

「食べられる前に、私が食べればいいじゃない」

「馬鹿かお前……」

怪異に関わった本人がよく言えるもんだ。

「でも、お兄ちゃんと別れるのは、嫌かもね」

「お前……」

「自分が死ぬかもしれないって時に。」

「分かった。俺、後でお前ん家、行くわ」
「え？」

しかし青柳の言葉は、俺には聞き取る事ができなかった
が、駆けつけてきたのだ。 優補

「はあっ!? ちょっと何それ」

「栗国くん? 今の、誰？」

「あ、いや、これは」

「もしもし!!」

あ。携帯盗られた。

「わたくし、佐式優補ですけれどもっ」

何と言っているかは分からないが、青柳の戸惑った声が漏れる。

「私のしょーじに手は」

「ほら、優補も会いたがってるし」

携帯を奪いとり、話す、というより怒鳴った。

「ああ、みんなで夜御飯とか、いいねー」

「う……!!」

また飯かよ。

優補はといえば、

「夜御飯だけに、寄る御飯的な？」

なんて。

怒りながらよくそんなつまらない駄洒落が思いつくよ。

「栗国くん、牛のことだけど。私、言ったもんね 栗国くんに事情を知られたからには、最後まで付き合ってもらおう。そう言ったか
らには、付き合ってもらわないと、ってね」

「そんな 助けると言われたから助けてもらおう、みたいな言い方よせよ……お前は、牛に食べられて、殺されて、いいのかよ？」
「分かんない」

青柳は、そう言うのだった。

「まだ、分かんないよ……」

そしてしばらくの沈黙の次に聞こえてきたのは、彼女の悲鳴だった。

ゴトツ、という大きな音がした。

呼びかけても反応がない。

携帯を取り落としたのだと推測する。

「おい、青柳 !?」

「あ、ああ、あ、栗国くん」

どうしようどうしようどうしよう !

そんな声が、聞こえる。

「何だ、何が」

「お兄ちゃんが、また、いなくなった」

「いなくなった……?」

「牛が、また、求めてる……」

「どういうことだよ、ちゃんと説明してくれ、青柳！」

動揺されてもこちらは何も分からない。

苛々が募る。

「牛がお兄ちゃんを、隠しちゃったんだよ……それはいつも、牛が魂をねだる時で……だから、私は」

「青柳！」

俺は必死で呼びかけた。

このままじゃ、駄目だ。

こいつはいつまでも 怪異に頼りっぱなしで。いずれ、殺されてしまうのに。

怪異と仲良くすることはよくない。

俺が言えることでもないけれど。

「今から、そっちに行くから 親、仕事遅いんだよな?」

「う、うん……今日は、帰ってこないよ ちよっと遠出してるか
ら」

なら余計に都合がいい、と俺は安堵した。

もしかしたら、今日区切りが着くかもしれない いや、着ける

なら今日しかない。

いつ青柳の魂が全て食べられてしまうか分かったものではない
早くに、処置は必要だ。

そしてそれを本人にも分かってもらわなくてはならない。

簡単にことを優補に説明して、俺は青柳の家へ向かった 優補

は、バイトの後ですぐに行くと言っていた。

断つても来るのかと心配したが。

そこら辺は弁えているのかもしれない。

夜はなるべく外をうろつろしたくない。

特に一人では嫌だった。

心なし、心細くなる。

だから、青柳の家が見えてきた時は、心底嬉しかったものだ。

この後 何が起こるのかわからないことが分かっている。

青柳は、出迎えてはくれなかったが、落ち着いていた。

「……よう」

「栗国くん、本当に来た」

「当たり前だろ」

「全然。普通そんなことする人いないよ。わざわざ来てくれるなんて……私、今日酷いこと言ったのに」

「酷くはねえよ。お前の本音だろ」

「……優しいなあ、もう」

そこで彼女は思い出したのだろう、佐弐さんは？ と尋ねてきた。

「あいつも来るみたいだぜ」

「女の子一人で夜道歩かせちゃ駄目だよ……」

「あー、あいつは大丈夫だよ……」

よくナンパとかされて危ない目に遭ってるがな。

皆あいつを侮ったら駄目だ。

色んな意味で、優補に関わった者は大変な目に遭う。

怪異最強、人魚最強。

「どうしてそんなに……もし、栗国くんのお陰で牛とさよならできたとしても、私、何もお返しできるものなんてないよ?」

「んなもんいらねえよ。そんなに俺はお前に会ってるんじゃないんだぜ」

「……なんばに聞こえる」

「全然違えよ」

「もー、栗国くんは無駄に格好いいんだから」

「……」

俺は部屋を見渡した。

食卓には、何もない。

食べ物は一切載っていなかった。

夕食を食べていないようだ。

「青柳、やっぱり今日牛を還そう。元いるべきところに。ずっとお前に憑きまどつてるなんてこと、あっていい訳が無い」

「また……私はもういいんだって。それに、お兄ちゃんとは別れた

くない、怖い。これが、逃げだつてことは分かつてるよ。でも、やつぱり……嫌だよ」

「我が俣な奴だな」

「っ……だから、栗国くんだって私の立場だつたらそんな風には」

「知らねえよ」

さつき答えれなかったことを、答える。

青柳は怯んだようだった。

「俺はお前の立場になつたらなんてこと、考えられねえ。お前はお前で、俺は俺なんだ。人が他人の立場になつて考えるなんてこと、誰もできるものじゃない」

「何よ、何よそれ」

「俺はきつと、牛に関わつてもお前みたいには思わない。それだけは言える」

「それは、当たり前じゃない」

「そうか？ まあ、そうだろうな……」

なあ、青柳。

俺は再び呼びかける。

「このままでいいとは、思つてないつて言つたよな？ ずっと怪異に甘えてなんかいちゃ駄目だ。兄さんに頼つてちゃ駄目だ。俺は嫌だぞ、お前が死ぬなんてのは……今から、ちゃんとお願いして、半分捧げた魂を返してもらおう。兄さんも、帰ってもらおう」

「できるわけないじゃん、そんなの」

「やつてもないのに諦めんのかよ」

「……だつて」

「俺も頼む。一緒に頼んでやる。牛に、遭つ」

「……」

「どうやつたら遭える、どこにいるんだ」

「……本気？」

「本気だ」

「……………」

「思ったけど、暗示的だよな　　今月って、二月じゃん」

「う、うん？」

急に話が変わって付いていけないのだろう、首を傾げる青柳だった。

「これ、さつき優補から訊いたんだけど。俺も忘れてたよ。二月には、古くからの風習で、島クサラシってのがあったよな」

「……あ」

多分、多くの方がご存じないと思うので、説明させていただこう。俺にも自信はないが。

沖縄で、二月中に行われる行事、というかお呪いまじなというか、不気味な風習がある。

島クサラシ。

別名、看過牛かんかうし。

家畜を殺し、その肉を煮て、植物の葉などに浸して、家の入り口の柱に塗る。

一般的には家畜は豚を指すが、原点は名前からも分かる通り、牛だったという。

それらの行為は、厄除けになり、疫病神も避けるという。

さらに二月の吉日はお彼岸　である。

二月は、暗示に暗示が掛かった　月と言える。

話をしたところ、青柳も、この伝統を知っていた。

流石、と言うべきか。

「一種の悪疫払いだと思えばいいんじゃないか。悪疫つつつても、病気とかそついうのじゃないけど……牛で牛を祓うのも可笑しいがな」

「すごい上手いこと言ってるけど。佐弐さんにも話したんだね……」
「あ、悪い」

「いいよいいよ、もう大体お二人の関係は分かったから」
「いや、多分色々間違ってると思う……」
よし、分かった、と彼女は頷いた。

「駄目もとで、お願いしてみる。お兄ちゃんも、帰ってもらおうよ。
そうしてキレイサッパリ、かは知らないけどさ」

やはり、オカルトな話が彼女を少し動かしたらしい。

そんなもんで変わるのかと俺は半信半疑だったのだが。

流石優補だ。

そついう系が好きなのっていうのは、大抵が、というかほとんど
がそれを信じてたりするもんだよー、なんて。

民間伝承、都市伝説のそのものが言つと面白い。

というわけで、俺達は。

外の物置の前に来ていた。

真夜中。

丑三つ時。

丑満つ時。

普通、妖怪が出現する時刻は夕方や明け方だと言つが。
だが、それとこれは話が違う。

これは怪異だ。

最も活性化する時間帯であり。

怪異はどこにでもいる。

ここにもいるし、どこにでも、いるもの。

必要としていれば、どこにでも現れる。

物置にだって。

ここに、この中に、牛は現れるのだという。

初めて出遭ったのも、この中だったらしい。

青柳が、涙を堪え切れずに家を飛び出し、親がいる間閉じこもっ

ていた事が良くあつたという。

悩んで悩んだ末に 出遭った。

そうして、捧げものをすれば、牛は兄を連れてきてくれるのだとか。

だが今夜は勿論、違う。

捧げた魂を返してもらい、牛には還ってもらうのだ。

いい？ と片手に懐中電灯を持った青柳が、目で合図をしてくる。俺は頷いた。

優補がまだだけれど、別に大丈夫だろう。

がらら……とゆっくり戸を開ける。

鼻を突く、臭い。

藁のような臭いが、嫌でも牛を連想させる。

整理されている上、広い物置だった。人間三人、大の字になって寝転がれるくらい。

だがその広いスペースを、占領しているものがいた。

大きな体に、角を持ち。

明かりに照らされて、赤々としている、それでも実体の感じられない、牛の姿が、見えた。

視えた。

俺にも。

一步、青柳は踏み出した。

慣れている。

牛の真正面に、立つ。

普通の雄牛の、高さ横幅共に牛のひとまわりもふたまわりもある。不機嫌そうに前の蹄を鳴らしている。

青柳はちよつと懐中電灯を斜め下に傾けた。

「今日は、お願いに来ました。がん、岩頭牛、さん」

牛も、一步進み出た。

だん、とその大きな足から音が出てもおかしくないのに、音は、

無かった。

怪異だ。

間違はなく、怪異。

あともう一步、前に出ればぶつかるとはならないかというほど、青柳と牛の距離は狭まっていた。

だが、青柳は後退しない。

後ろに下がる事ができないのだ。

後戻りは、できない。

「お願いです」

はつきりと、青柳は言う。

「どうか、私の魂を返して下さい。お兄ちゃんを、あちらの世界に帰してあげて下さい。あなたも、どうか還って下さい」

頭を下げた。

ぎりぎりのところで、牛には触れていない。

もし生き物だったなら、その鼻面から、荒い鼻息が漏れていただろ。

「魂は、もう、あげられません」

すると、はらり、と青柳の髪が舞った。

牛は呼吸などしていないのに。

そうして、気付いた時には、青柳が飛ばされ俺にぶつかっていた。

反動で、思わず尻餅をついてしまう。

牛が、頭突きしたのだ。

闘牛の如く。

小柄な上、青柳は驚くほど軽かった。

魂が欠けているということを知っていると、より意識してしまう。

岩頭牛は、取引不成立だ、とばかりに頭を上げ、聞こえはしないが啼いていた。

「あおや、！」

無事か確認する暇もなかった。

牛が大きな角をこちらに向けて、突進してきたからだ。

急いで青柳の背を掴み、立ち上がらせて横に力強く押した。

懐中電灯は彼女の手を離れ、明かりこそ消えなかったものの、地面に落ちる。

思った通り、青柳は横に吹っ飛び、そして牛の角が俺を捕らえた。

小さな頭に反比例して、大きすぎる角の片方に。

象牙の二倍ほどの太さの角。

放り投げられる。

激痛。

角が、体を貫通しているわけでもないのに。

ただ、一瞬触れただけで。

腹が、酷く痛い。

「ぐ、ああアアア……」

勢いよく床に叩きつけられて、その上腹の痛みは引かず、俺は呻くことしかできなかつた。

がらがらとした音が、肺から漏れる。

身動きが、とれなくなってしまう。

何だ、この、感覚は。

牛は俺の方にやってきた。

その巨大な蹄が、高く、上げられて。

後足立ちした。

俺は、腹に力を込め、痛みを堪えながら回転した。

間一髪。

物置の外に転がり出る事ができた。

地に伏せながらも、すぐに確認する。

先程まで俺がいた所には、大きな窪みができていた。

牛は、外に出ようとしていた。

めきめき、と鉄の壁が凹む。

このまま出てきたらまずい。

俺は、地面に這いつくばったまま、叫んだ。

「お願いだ！　どうか、どうか返してくれ　還して、帰ってくれ」

がらんブル 其の玖 ？

「お願いだ！　どうか、どうか返してくれ　還して、帰ってくれ」
だが岩頭牛は中から出ようと奮闘するだけだった。
聞こえていないのかもしれない。

頭に血が上って

もしかしたら、石頭ならぬ岩頭から名前は来ているのかもしれない
かった。

そんな……、やはり、対価交換は必要ってことか。

それ以外は受け付けない、ということか。

駄目だ、まさかいきなり攻撃してくるとは思わなかったから、他の
対策を何も講じてない！

阿良々木が言っていた、最後の手段とやらだって……。

目の前を、影が横切った。

暗い中、さらに黒い何かが、俺の横を通り過ぎた。

何かと認識する前に。

背後、というよりは真上から、声がしたのだった。

「うぬも、我があるじ様といい勝負じゃの　どちらが馬鹿かとい
う点に置いては」

知っている口調。

だが、何だか違う感じの声だった。

ちよつと大人びたような……。

頭だけ捻って、声の主を見ると、俺は驚愕してしまった。

それはもう、びっくり仰天だった。

声の主は、金髪金眼の少女だったが。

見た目、俺より少し年下　十四、五歳ほどであった。

輝くようなその髪が、いや、輝いているその髪のお陰で暗くても
その髪の色まで分かるというのも驚きだった。

年齢を除けば、彼女は忍野忍だ、と断言できるのだが、この少女は。

まるで、一気に成長したかのような彼女は。

「何をじろじろ見ておるのじゃ　　儂の見てくれが気になるのかの？」

「い、いえ……」

確かに服装も大人っぽいデザインになっている。
シックなドレス。

片手を腰に当てて、立ち振る舞いも様になっている。
綺麗だった。

「あの、あなたは忍さん、なんですよね？」

「何を言うかと思えば……今はそのようなことを気にする時ではな
かるうに」

ほれ、見よ、と忍は物置を指差す。

牛の頭を両手で掴み、押し戻そうとしている人の姿があった。

こちらは、後姿からも分かる。

阿良々木だった。

牛は懸命に前に進むうとしているが、阿良々木がそれを止めてい
る。

馬鹿な……怪異相手に、互角だと？

「あれでも儂の眷属だった者じゃぞ。そんじよそこらのマイナー怪
異と渡り合って、負けることなどないわ」

「きゅ、吸血、鬼……」

恐ろしい。

俺だつて人魚に関わったけど、それとは比べ物にならない程、恐
怖を憶える。

そんなものが、こうして存在しているのだ。

「これが、我があるじ様の言つた最後の手段なのじゃよ、半魚の間よ。力で捻じ伏せ、降参させる手。まあ、我があるじ様は、正直そのような類の解決法をこよなく嫌うのじゃがな……」
腕を組み、じつと阿良々木を見ている忍。
それはまるで。

縛られた主従関係というよりも。
絆で結ばれた親友同士のような。
我が子を見守る母親のような。
そんな印象を、俺は受けた。
そして……本当に、頭が下がる。
自己犠牲。

赤の他人に対して、体を張って助けようとしている阿良々木の姿に、俺は、何も言えない。
呆れた、とも思つたが。
やはり、いい人なのだ。

「しかし、牛の怪異でも、牛鬼ではなくて良かったのう、そうは思わんか」

「ぎゅう、き……？」

「おやうぬ、知らんのか。やれやれ困つた奴がまたここに一人いるようじゃ。と。じゃが噂をすれば影がさす、という言葉があつたの……説明はするまい」

「おおおおおおおっ！」
太い声がした。

阿良々木が、牛の角を握り締めていた。
大きく反つた、一對の角。
持ち上げて、叩きつける。
有り得ない。

常識外れ。

桁違い。

並々外れた鬼の力で、牛を、ノックアウトさせた。
だが。

「ぐ、くうっ……」

がくり、と膝をつく阿良々木。

両手をキヨンシーにでも憑かれたかのようにぶらりと前に突き出していた。

転がっている懐中電灯の明かりで、俺は彼に何があったのか気付く。

両手が、酷く爛ただれていた。

青紫色に変色している。

角に触れただけで。

忍は、唸った。

痛そうな顔をしている。

阿良々木の手を見たからだろうか。

「岩頭牛は、悪霊、龕の精じゃ。疫病神の一種かも知れん。きつとあの角は、生気を吸い取るのじゃろう。それが長引けば、魂もろとも吸われてしまう」

とんでもないことをさらりと言わなかったか？

それに、そんなことを知っていて、阿良々木には何も教えなかったな……。

ただ傍観しているだけだ。

阿良々木は、立ち上がり両手で自分の顔を軽くはたいていた。

ばちばち、と。

て、あれ？

手が……治っている？

「忍、食べてくれ」

何ともないように言う阿良々木。
こちらを振り返る。

その口から覗く、人間にしては心持ち長く鋭い八重歯。
ああ、そうか。

吸血鬼。

回復能力があるのか。

怪力の持ち主で。

その上、長寿だ。

最強じゃないか。

でも、ニンニクや十字架が駄目だったっけ。

……いや、今時そんな吸血鬼っているだろうか。

無敵なイメージがある。

忍が俺の元を離れ、阿良々木の方へ歩を進めたその時。

牛が、身動きをした。

もう、意識が戻ったらしい。

人外ゆえに、人間の常識で考えては駄目なようだ。

そして、それだけではなかった。

「な？」

牛の姿が、変わり始めたのだ。

縮むように、溶けるように、その巨体は消えていき、代わりに別の姿が視えてきた。

人の形。

人間に、化けたのだ。

化け物。

「……あ」

奥で、小さな声が聞こえた。

青柳だ。

中にずっといたものの、巻き込まれてはいないようだ。

彼女は、人となった牛を、凝視する。

新品のスーツを着た青年。

背は高いが、どこことなく、彼女に似ていた。
青柳の兄。

目にかかる髪を払いのけ、青柳を見下ろしている。

阿良々木は、青柳の顔を見て、忍を制した。

忍は不機嫌そうな顔をしたが、従った。

そして彼は　牛は、口を開いた。

「やめる。邪魔をするな、吸血鬼」

「お前……どうして」

立ち上がる事ができた。

思わず、俺は尋ねていた。

牛は、静かに瞬きをする。

「私は人の姿をとらねば会話ができない」

「そうじゃなくて」

「お、兄ちゃん……？」

牛は、再び青柳を見る。

「いつも、今まで、側にいたのは……お兄ちゃんなの？」

「分からないでか。おうとも、私だ。兄は、私　私は、兄に化けていた、ただそれだけだ」

「そんな」

「愚かな」

牛はここで、少し笑ったように見えた。

「私は、岩頭牛だ。人の魂を行き来させる力など、持ち合わせてない。私にできるのは、こうして化けること、そして食事する

「ことだけだ」

今まで、青柳は騙されていたようだ。

青柳は誓った。

魂を捧げる誓い。

自分まで犠牲を払って。

だが、牛としては、彼女の望みなど初めから叶えられないものだったのだ。

相手側にだけ、利益があった。

兄は最初から、ここにはいなかったのだ。

詐欺も同然だ。

変化の能力を活用して、青柳を騙していた。

岩頭牛、マジムンのある話がある。

ある男が美女に出会い、恋に落ちた。

夜な夜な彼女が待つ松の木の下に通い、毎晩話をしていた。

ところがその男の友人が美女を一目見ようと男に付いて行ったが、彼の目に映ったのは松の木と、その下で舌を突き出した妖怪の姿だったという。

友人は男に説得した。

次会うときには、美女を短刀で刺すようにと。

それに従った男が、女を刺して、明け方に見たものは。

短刀の刺さった、龕の破片だったという。

何故牛が美女に化けていたのかは、周知のこと。

人間の気を引いて、魂を喰う為だ。

青柳も、それと同じで
いや。

「……や、やっぱり」

と、俯いて彼女は言うのだった。

「やっぱり、お兄ちゃんじゃなかったんだよね。薄々だけど、気付

いてた……」

牛は、何を思ったか黙り込む。

気付いていた　だって？

でも、お前は言っていたじゃないか　ずっと、訴えていたじゃないか。

兄を帰したくない、とか。

別れるのは嫌だ、とか。

青柳は、俺を見て、申し訳なさそうな顔をする。

「お兄ちゃんの姿が消える時って、それは岩頭牛さんがお腹が空いてた時……入れ替わるように、いつも現れていたから、まさかとは思っていたけれど」

「……………」

「私、信じられなくて。信じたくなくて。唯一、頼れたお兄ちゃんが、本物じゃないなんて。現実には引き戻されたくなくて。ずっと、ずるずる引きずったままで」

オカルト好きならば、率先して調べるものだろうと俺は思っていた。

だがそうはしなかった理由は。

今まで牛について調べなかったわけは。

真実を知るのが怖かったから。

牛が、魂を運ばないこと。

化ける事ができる、なんて。

知ってしまえば　彼女は、^{すが}縋るものをなくし、壊れていたかもしれない。

実際、今日だって、青柳は倒れてしまったのだ　牛について調べたその翌日に。

真実を知った為に。

愚問。

「……でも、それじゃおかしいじゃないか。今まで俺には姿が見えなかったぞ。教室でだって、青柳の家でだって、隣には兄がいた、お前がいたのに」

「認識しようと思った者に、私の姿は映る」

牛は答えた。

怪異の時間。

人の姿で言われると、また先程の牛と同じものなのか分からなくなる。

「……馬鹿」

ふいに、阿良々木の声が出た。

服に付いた土埃を払いながら、彼は言う。

「怪異に頼る前に、周りを見るってことはできなかったのかよ。頼るべきは、まず、人間だろ。誰でもいい、心の内を打ち明ける人は、いなかったのかよ」

「……」

青柳は驚いたような顔をして、そして、

「……あなた、誰？」

「今そこ重要じゃねえだろ！ 格好いいこと言ってるんだから締めさせるよ」

彼も彼で突っ込みをする状況ではないと思う。

咳払いを一つ。

「通りすがりの、吸血鬼だよ
通りすがりって。」

あれ、そういえばこの二人 一人と一体、どうやって青柳の家を知ったんだ？

「吸血鬼、」

「とにかく。頼るときは、僕達みたいなのでもいい、人間に、頼ってくれ。栗国だって好きでお前に付き合ってたんだ。助けたいから、な。信じて、頼ってくれ。信頼されたいから僕達はここにいる」

「信頼……」

「人間とは、解せぬものだな。そう思わないか、怪異の王よ」

「口を慎め、下劣な牛が。ぐうたらそこいらに転がつとる魂を喰ってきたごろつきが、儂にまるで同等の様に話しかけるなど、身を弁えよ。消されたいのか、愚か者めが」

「いやいや。怪異の王と恐れられた貴女が、そのように人間に憑き従っているのを見ています」

「何様のつもりじゃ！」

牙をむき出し、今にも襲い掛かりそうな勢いだった。

「やめろ、忍！ 後でだ」

「むづ……」

この畜生が、と嘲るが、一旦退く忍だった。

岩頭牛は、落ち着いたものだった。

いや、牛だけに少しとろいのかもしれない。

「消されては困る、最も私ではなく、この女がだ」

「……！」

牛は、青柳の肩に手を乗せる。

にやり、と笑って。

「私が消えれば、お前はとうなる？ 私は見ていたぞ、お前が狂乱する姿を。兄がいないと、寂しいだろう？ また、母親の暴力に耐える日々が続くだけだ。どうだ、ここは残りの魂を私に捧げてはくれないか。もう苦しまなくても良くなる、兄の元へすぐに逝けるぞ」

甘い言葉。

囁き掛ける。

青柳は、目を見開いて、手は震えていた。

「どうだ。捧げてはみないか。捧げる。捧げる。捧げる捧げる渡せ渡せ渡せ渡せ渡せ渡せ渡せ渡せ渡せ渡せ渡せ」

オマエガ、ホシイ。

青柳は目を閉じる。

彼女の口が、開く。

「私は、」

拳を握り締め。

震える声で、だがはつきりと。

「嫌です。もう、あなたを頼らない」

青柳は、地面に押し倒された。

大きな両手が、青柳の首を絞める。

締め、絞める。

兄が、妹を。

容赦なかった。

きりきり、と音がするほど。

「忍！」

阿良々木が叫び、動いた。

忍も、すかさず駆け寄り、とす。

それでも青柳の顔からは血の気が引いていた。

吸い取られる。

吸い尽くされる。

その時。

ぴたり、と牛の動きが止まった。

指の力が緩んだのか、青柳はひどく咳き込んでいる。

そして、止まっていたのは阿良々木と忍、そして俺も同じだった。動く事ができない。

体が、動くことを忘れてしまった。

ただ、耳を傾けることしかできない。

美しい、歌声に、魅了されることしか。

歌声は大きくなる。

歌詞はない。

ただ、ゆつくりと流れるその旋律は、美しいとしか形容しようがない。

声の主が近付いてくる。

優補、と俺は思った。

声は出せない。

俺の中の怪異も、歌に反応する。

混ざり、解けていく感覚。

心地よい。

海の香り。

佐式優補が、ゆつくりと俺達の方へ歩いてくるところだった。

これが、優補に残された数少ない能力の一つだ。

人魚として。

怪異しての、力。

歌で、人を癒す。

心の奥まで届く歌声は。

精神までもコントロールさせる。

自然と、落ち着いてくるのが分かる。

優補は、俺を見て、綺麗に笑った。

戦場ヶ原さんと一緒だった。

手を、繋いでいる。

これは、仲がいいとかその前に、彼女の歌の力の所為だ。

彼女の側にいれば、誰もが虜になる。

今まで何人の人間が犠牲になったことか。

そして勿論、戦う気など 起こるわけがない。

優補は、続いて、忍（軽く頭を下げた）、阿良々木を見て、そして青柳と牛を見た。

歌いながら、歌い続けながら、そつと手を離し、牛に近付く。

牛は、顔を優補に向けることしかできないようだった。

優補は、手を差し出した。

牛の顔の真ん前に。

歌が、止む。

余韻が残る中、彼女は言った。

「返してあげて
すると。」

がくり、と青柳は意識を失った。

牛は、立ち上がる。

優補が満足げな表情を浮かべていることから、魂は戻ったのだと判断できる。

魂、と言つよりは魄 牛が青柳から奪ったのは一種のエネルギー
だろう。

そして優補の歌。

一種の、催眠術のようなものだ。

彼女の歌は人を操る事ができる。

陥れることは勿論、殺すことだって 可能なのだ。

怪異は、世界と繋がっている。

故に、優補も、世界の一部。

海を、風を、自然をも虜にする。

「直ぐにでも起き上がる」
生命力を半分も吸い取られ。

そして今その分が返還されたのだから、回復が早い、とでも言い

たいのだろうか。

そうして牛は、物置から出て、こちらに向かって歩いた。

俺は気のせいだと思っていた

その時、優補と忍が素早く、目配せをしたことに。

「御姉さま！」

優補の鋭い声が空気を豹変させた。

俺が止めに入ろうとした時には。

もう、遅かった。

忍は、岩頭牛の首筋に噛み付いていた。

がぶり、と。

鋭い牙を付き立てて。

そしてそのまま 吸血、という表現で正しいのだから疑問だが

そのまま、吸う。

これで、先程阿良々木が言っていた言葉が理解できた。

これは、食事だ。

吸血鬼の、食事なのだろう。

「優補、突然、どうして」

「どうしたの、しょーじ。私が、赦すとも思ったの？ あのまま、

放っておくとも思ったの？」

「いや、でも」

俺は岩頭牛を見やる。

牛は、抵抗しない。

そのような暇もなかったが、する気もない。

覚悟を決めていたかのようにだった。

もしかしたら 今日、急に青柳の前から兄としての姿を消した
のも。

魂を求めたのも。

この為かも しれなかった。

「エナジードレイン」

ぼそり、と阿良々木が呟いた。

何ですかそれ、と俺が訊くと、代わりに優補が答えた。

「体力、精力を根こそぎ吸い尽くす、それがエナジードレイン。御姉さまにとっては食事であって食事でない、これは怪異が怪異に対して行っているだけ　王が、罰を与えているだけ」

「罰を、」

「嘘ついた悪い子は、怪異の王のお叱りを受けるんだよ」

微笑む優補を、俺はまじまじと見つめる。

人間の見た目だが、人間味がない。

たまに見せる、怪異の顔だった。

そついや、なんだか牛も牛で忍を甘く見てたしな

彼女、結構

怒ってみたいだし。

怪異には怪異の事情があるのだ。

口出しはするまい。

吸血鬼のそれをエナジードレインと言つのなら。

牛のそれも呼んでいいのだろう。

魄　いわゆる精力、気を吸い取るのだから。

牛は、力なく倒れた。

目を閉じ、消えようとしている。

存在もろとも、消えかかっている。

「岩頭牛さん」

遠くで、声がした。

青柳が、うつ伏せの格好のまま、牛を見ていた。

まだ起き上がることはできないようだった。

「今までありがとう、ございました」

兄を帰したくない、と言ったのは、牛だと知っていたから。別れたくない、と言ったのは、現実を突きつけられるのが怖かったから。

青柳は、もしかしたら最初から、兄など戻ってこないと分かっていたのかも知れない。

彼女の声に反応したのか、牛は、少しだけ目を開けた。

「やはり、……解せぬ」

そして兄の姿で、少し、笑った。

岩頭牛は、また溶けるようになくなった。

忍が顔を上げた時、彼女の足元には、真っ赤な古びた棺、龕があった。

昔は豪華で立派だったのだろう。

特に目が行ったのは、飾りで付いている一对の金の鳥の像だ。きっとこれが、牛の角だったのだろう。

物に宿り、化ける怪異。

「清々したわ」

ふう、と溜め息をついて満足げに言う忍。

私ものです、と飛んで跳ねる優補だった。

一方。

ずっと後ろにいた戦場ヶ原さんは、待ちきれないという風に阿良々木の元に駆け寄って、

「!!!?」

ディープキス。

甘く深い接吻を。

阿良々木は初め、驚いて目を見開いたものの、しばらくすると二人、目を閉じていた。

俺は、取り残された青柳を起こしに行く。
彼女は、じつと龕を見つめていた。

「ごめんね、栗国くん」

「もうおせーよ今更……」
全部終わったことだ。

「驚いた……栗国くんが駆けつけてきたのもびっくりだったけど、まさか吸血鬼さんがいるなんてね」

「ああ、後で礼言つとけよ」

今はお取り込み中だが。
うん、と相手は頷いた。

「ねえ、」

「うん？」
「私、もしかしたらだけど、また何かあったら、頼っちゃっても、いい？」

「なんだ、そんな事かよ 当たり前だ、つーかまた怪異に頼ったりしたら、俺怒るぞ」

「はは」
と、彼女は笑う。

……あれ？

「おーっと！ 私も忘れないでよね！ しょーじー人じゃ駄目駄目よー……」

「叫ぶな！ ご近所に迷惑だろうが、今何時か分かってんのか!？」

「いや、栗国くんもうるさいよ……」
おっといけない。
いわざる。

「久しぶり、佐式さん、元気？ …… って訊くまでもないけど」
「ちょ 元気っす！ おっひさー、伽藍ちゃん」
転がったままだった懐中電灯を拾って、手遊びしながら言う。

「うん？ 私のこと、憶えてたんだ」

「伽藍ちゃんだって、私のこと憶えてるじゃん」

「いや、佐式さんは目立ってたし」
「うん。」

凄くこいつは目立ってた。

優補は途端に呆れ顔になって（眩しいので表情が良く分かる）、
青柳に言った。

「伽藍ちゃんは友達じゃん、忘れるわけないよ、憶えてて当たり前だよ」
「……」

彼女は言葉を失ったようだった。

しばらくして、彼女が口にした言葉は、

「あーもう、お腹空いた」
だった。

そういえば夜食べてなかったな、こいつ……。
まあ、俺も優補もただけ。

でも青柳の食欲異常は、そうすぐには治らないだろう。

俺は、はぐらかすように彼女に言ってやった。

「どうだ。焼肉パーティーでもするか」

それを訊いて、青柳はくすりと笑ったのだった。

再び。

昔のようじに。

いつものようじに。

心から、笑ったように見えた。

がらんブル 其の拾(前書き)

蛇足になりますが、牛鬼は「うしおに」「とも」「ぎゅうき」「とも読む
そうです。語田のよさから今回はぎゅうきとさせていただきました。

がらんブル 其の拾

010

後日談というよりは、裏話。

それから、軽く俺達三人は軽く夕食を食べた（もちろん焼肉ではないし、青柳の量は軽く、ではなかった）。

夕食というのは分からないが。

楽しい、食事だった。

阿良々木達は、今日早くに帰るらしく（日付は当然ながら変わっていた）、ホテルに戻って行った。

仲良く掛け合いをしながら、帰って行った。

その前に、忍と優補の別れの挨拶が長々と続き、さらに阿良々木と忍が物置の奥で何やらこそそそとして、戻ってきたときには忍はまた八歳の幼女の姿になっていたのだの、色々あったのだが。

130

「曆くん。女の子を一人ホテルに置き去りは良くないわ」

「それは、お前を巻き込みたくなかったからだよ 待つてくれ
つて、言っただろうが」

「嫌よ。もし万一曆くんに何かあったらと思うと、射ても絶っても
いられなくなつたのよ」

「居ても立つてもだろつが！」

「とにかく、心配したんだから」

「ああ……悪かったよ」

「だから、今夜は私に優しくしなさい」

「……了解」

去り際に、彼は携帯番号とメルアドを教えてくれた。

シリラスとギャグとのろけの切り替えが早すぎて恐ろしい。

「何かあったら、助けになる。ぼちぼち連絡くれよ」

「はあ……」

「お前だったら、僕の跡を継げそうだな」

「は？」

「いいえ曆くん。突っ込みはあなたの方が上よ」

「褒められてもあんまし嬉しくないな！」

「え？」

「何だかよくわからない。」

「もっと肩の力抜いてこうぜ、と軽く肩を叩かれた。」

「うーん……」。

「全く、とんだ旅行だったぜ」

「優しくていい人なんだろうけど。」

「あ、そういえば。」

「羽川さんって知ってますか？」

「羽川？ 羽川翼か？ 知ってるのか？」

「阿良々木は今までに見たことのない仰天顔だった。」

「流石羽川…… 日本国民ならば誰もが知っているというのか……」

「いえ曆くん。きっと世界中の全人類が彼女のことを知っているの」

「よ」

「いや…… 否定したはいいもののそれはないだろう。」

「俺と優補を、助けてくれた人です。羽川さんが、そういえば話してたなあって 吸血鬼のこと。優しくて、いい人のこと」

「羽川が、沖繩に来てたのか!？」

「え、はい、去年の春に」

「ちつくしよおおおおお！」

「え。」

ええ。

嘆きまくる阿良々木。

ちよ、これは駄目だろ、戦場ヶ原さんも何か突っ込まないのか!?

「あの……」

「いや、そうか……あいつ、世界各地を旅しながらそんなことしてたんだな」

大学に行けそうなほど頭がいい人だったのに、世界遺産を廻っている羽川さん。

彼女に出会えて、俺はとても幸運だったといえる。

そして、勿論今回もだ。

「暦くん、羽川さま……羽川さんには、いつだって会えるわよ」

「そう、だな、何でも知ってるからな、あいつ」

「何でもは知らないわよ　私は、暦くんのことだけ……」

「おい、半魚の人間」

のろける二人にうんざり気味の忍が、俺の制服の袖を引っ張った。

「何ですか?」

「うぬ、これからも彼女を　我が妹を　佐弐優補を、頼むぞ」

「ああ……任せて下さい」

すると忍はにかつと笑って、阿良々木を追いかけて行き、やがて影に潜って見えなくなつた。

阿良々木達が、青柳の家が分かつたのは。

昨晚、優補が阿良々木に電話を掛けたのだ。

バイトというのは、嘘だったらしい。

いや、バイトがあるというのは本当なのだが、休んだのだとか。

優補ならやりかねん。

実際やったが。

まあそれはさて置き、優補は初めから、牛のことについては大体

予想が付いていたらしい。

怪異そのものなのだし。

察しはいい。

退治。

それが、優補のスタイル。

彼女の掲げる思想。

悪い子には、お仕置きを。

見逃しはしない　俺が止めれば、何とかなる時もあるけど。

それでも、唯一できるのは歌うこと。

それでは、俺達にもしもの事があつたら、どうしようもできないし、牛を退治することもできない。

だから、彼女は助けを求めた。

優補がいなければ、あの後どうなっていたか分からない。

だが、優補がいなかったら、岩頭牛は餌食にはならなかったかもしれないのだった。

それはそれ、これはこれ。

もう終わったこと。

故に、今がある。

俺がこうして怪異の物語を、とりとめない物語を語ることを決意したのも、阿良々木達に出会ったからなのだし。

青柳も、全ての過去を水に流すことはできずとも。

これからは、ちゃんと前を向いていくのだらう。

そして、変わっていくのだらう。

今でも両親が側にいると思ってる？

死んでも、霊として、いるかもでしょ？

そういった存在を、信じることで。

そう信じて、自らを保っていた青柳。

制御していた青柳。

伽藍堂のように何も無い心で。

それでも、がらんどう、平穩を求めて。

そして、今に至ったのだ。

からっぽになった心を、ゆっくりでいい　牛の歩みで構わない。
少しずつ、埋めていってくれるのなら。

その中に、俺達が居るのなら。

母親からの虐待が絶えなくても。

身体の傷が癒えなくても。

心の傷が消えなくても。

いつものように、心から笑顔で笑ってくれるのなら。

俺は、それでいい、そうであってほしいと思う。

がらんブル 其の拾（後書き）

がらんブル、いかがでしたでしょうか。沖縄の怪異はほとんど皆さんフレンドリーでお茶目なので、怖い感じのが少なくこのようなマイナーさんをはじめに持ってきてしまいました。

そぞろなるままに 其の壹(前書き)

徒然なるままにみたいですが、ここでちょっと休憩&お知らせです。

そぞろなるままに 其の壹

『がらんクラブ』

001

「青柳さんって、私と似ているっていう設定らしいのだけれど、一体全体どこが似ているのかしらね」

「いやいやいきなりメタネタですか戦場ヶ原さん……私のポジションは突っ込みではないのに突っ込みじゃったじゃないですか」

「そういうあなたも自分のキャラ付けについて暴露しちゃってるじゃない」

「あ……」

002

「それにしても、突っ込みって重要だと思っつよ」

「どういふことですか、戦場ヶ原さん」

「だって、曆くんや、栗国くんがいなかったら私達永遠にぐだぐだの話を続けるだけじゃない。ブレーキがないのよ」

「私が突っ込みを勤めます！」

「そう。頼もしいわ。OBである私としてはとてもいい後輩を持たものだと、誇らしくもあるわ」

「私も戦場ヶ原さんみたいな先輩ができて光栄です」

「いえ、あの……OBと言ったところに突っ込みが欲しかったのだけれど」

「あ……OGですね」

「やっぱり私達じゃぐだぐだね」

003

「原点に戻るけど、私達の似ているところってどこなのかしら」
「うーん、初めに登場するヒロインポジションですかね」
「意外と真面目な答えね」
「不真面目な答えってどんなですか……」
「私は生まれつき深窓の令嬢なのだけねど」
「生まれつき!? 凄っ!」
「青柳さんは、何かそういうニックネームみたいなものはないの?」
「うーん、小さい頃、青からブルって呼ばれてましたね」
「……作者の駄洒落好きが分かった気がするわ」

004

「蟹と掛けまして、牛と解きます」
「おや。青柳さん、そういうの好きなの? その心は」
「どちらも美味」
「まあ、確かにね」
「あれ? 何かがつかりしてませんか?」
「別に」

005

「青柳さん、最近ハマっていることは何? 私は勿論暦くんを困らせることだけど」
「とんだ彼女がいるもんですね……そうですね、ハマってること……食べること?」
「他の答えが欲しいものね」
「えっと、じゃあ、読書とか」
「読書。私も好きよ。でも暦くんの方が、」

「のろけないで下さい」

「あら、意外と厳しいのね。読書が好きなの、じゃあ好きな作家さんとかいるのかしら」

「えっと、夢野久作さんとか、素晴らしいと思います」

「あら。見事にカブったわね」

「同じ九州出身ということも手伝って、最近読み漁ってます」

「やっぱリドグラ・マグラ？」

「あれはもう息が止まるかと思いましたがね」。でも、一番は悪魔祈祷書だったりします」

「ああ、あれも好きよ。何だ、意外と趣味が合うんじゃない、私達。今度ゆつくり語り合いましょう」

「どうして本編で絡みが無かったんだらう……」

「作者に抗議ね。で、今回のギャラはいくら？」

「そんなものありません！」

『しょうじマイマイ』

001

「あれ。何かツインテイルで大きなリユックをしょったいかにも観光客って子がいるぞ、迷子かもしれね。おい、どうした、道にでも迷ったか？」

「話しかけないでください。あなたのことが嫌いです」

「……分かった」

「はい？」

「悪かったな、邪魔して。じゃあな」

「ちよつと待つてください！ ごめんなさいでした、悪い癖が抜けないのです、あなたのことは好きです！」

「変な癖だなおい……初対面にいきなり嫌いなの好きなの、変わっ

た子だぜ、おい」

002

「お前、名前は何て言うの？」

「わたしは、八九寺真宵はちくじ まよひです。わたしは、八九寺真宵といっています」

「俺は栗国頌史っていうんだ」

「障子ですか」

「商事だ、じゃない、頌史だ」

「何だか薄っぺらそうな名前ですね」

「語感だけで考えないでくれ……」

003

「それで、八九寺はどうしてこんな所を一人でうろろしてんだ？」

「さあ。迷子なんじゃないですか」

「さも当たり前そうに言うなよ」

「路頭に迷ってる栗国さんに言われたくないです」

「俺そんなに困ってるように見えるか？」

「ええ。具体的に申しますと、頌史という名前がいつまで経っても定着されず、平仮名での印象が強まってしまったのを嘆いている風に見えます」

「ピンポイントで凶星だが、お前は一体何を知っているんだ!？」

004

「ところでアゲーさん」

「俺は小型で黒い毛の、沖縄在来種の豚じゃねえよ」

「おお、なかなか突っ込みがお上手ですね」

「小学生に試された……」

「おや。小学生だとわたしはまだ言っていないませんよ？ まさか栗国さん、真正のロリコンですか」

「いや、リユックにクラス番号が書いてあるじゃねえか」

「失敬な、わたしは見た目は子供でも思考は大人ですよ？」

「なんかやらしいな！」

「栗国さんこそ、先程わたしがあなたのことは好きです、と言ったとき内心喜んでたのでしょうか？」

「嬉しくないと言ったら嘘だな」

「栗国さん、いやらしいです」

「いや、今のは別にいやらしくはねえだろ！？」

「どうです、今から大人トークでもしちやいますか」

「小学生とそんなトークしたくねえよ……」

「なるほど。しかし否定はしないんですね」

「あ？」

「いえ、ロリコンですかと言ったことに対しては、否定しませんでしたよね」

「違う！ ていうか何か前もしたぞこんな会話！」

005

「それで何を言いかけてたんだ？」

「栗国さんは、阿良々木さんの跡を継ぐにふさわしい方ですと、そう言いたかったのですよ」

「ああ、あいつの知り合いなの？」

「知り合いなんて言葉では語りつくせませんが」

「じゃあ今日は阿良々木と一緒に来たりしたのか？」

「いえ、よく分かりませんが」

「何で自分のことなのによく分からないんだよ……」

「本編には絡むに絡めませんから、無理矢理こういう形で登場させられたのですよ」

「何言つてんだお前!？」

「栗国さん。ここはそんな厳しい場じゃありませんよ。肩の力を抜いて、もっとメタメタして構いませんから」

「マジで何なんだこの小学生!」

「まあ、何故わたしが沖繩にいるのかなんて、どうして地球が回っているのかというのと同じくらい、どうでもいい話なのです」

「スケールはでかいんだな」

「謎なままでいいんじゃないですか？ 無理に理由付けるより、面白いですし」

「迷子になつてるのに面白いなんて言うんじゃないよ……」

「それでも本編には出てみたかったです」

「……相談してみるよ」

【次回予告】

りゅーう。

ということでもー、佐武優補ちゃんですよー。今回というか、毎回次回予告担当になったんでよろしくなー。じゃあ早速始めるなり、行くぜよー。

しょーじがいつの間にかまた怪異に絡んじやったみたいで、ほんとうしようもないねえ。それも今回は厄介でお節介で……まあアブナイやつなんだよ。それにその怪異と一緒にいるあの子もまたアブナイ子でさー。おっとここらへんでやめといた方がいいかもね。じゃあ次回、

『さちねハウンド』

お楽しみにい。

耳元であやしー音がしたら気をつけなよー。

栗国さんと佐武さんです。イメージと違うかもしれませんが、佐武
ちゃんはもっと可愛いはずです（自分で）。

> i 1 1 4 7 8 — 1 6 1 7 <

そぞろなるままに 其の壹(後書き)

…訝藍ちゃんそれは掛ってないです。と思いつつ。他にも色々な原作キャラを絡ませたいなーと思っております。

それはさておき とういうわけで、まだまだ続きます漫物語。
頑張ります…っ！

さちねハウンド 其の壹(前書き)

今回は色々と挑戦をしようと思っているので…更新は遅くなると思
います。

さちねハウンド 其の壺

001

喜屋武幸音きんおんとの出会いは、俺にとってまさしく偶然の産物であり、決して必然ではなかったと言えた。

だが、そうだとしても、今までどうして彼に対して何の疑問も抱かなかつたのだろうかというのが、疑問だった。

彼の中に少なからず存在している怪異。

それに、何も気付かなかつたなんて。

喜屋武は、同じ学校の中学三年生。虚栗高校は、中高一貫の生徒も通っているのだ。

幸音、という名前ではあるが男子。

中高一貫という響きからどんな印象を受けるかは人それぞれだが、俺の高校の中学生は（表現が可笑しい）、ほとんど全員が、例外なく頭がいいらしい。

喜屋武も勿論、俺なんぞに比べてとても頭がいいのだろう。

彼は、まだ幼さが残る顔で、そして大人しくていい子そうな顔立ちをしている。

同じクラスということをし置いても、俺と彼はよく廊下ですれ違ふことがあった。移動教室の際に、いつも前の時間に喜屋武のクラスが授業を受けていたからだ。

青柳とは違って、異なるクラス、学年であっても、よく会う、よく目にする生徒だった。

この間、その青柳の一件が解決して何日か経った日のことだった。多分、例の移動教室のときだろう。

すれ違いざまに、彼は俺にぶつかってきた。

いや、故意にぶつかつたわけではない。

上級生が来た為、ちよつと出遅れた彼は単に急いだけなのだ。

思う。

誤って、ぶつかつた。

青柳よりはちよつと高いが、やはり俺よりは低い身長だつた為、肩の辺りにやつと頭が届くほどだつた。

くしゃくしゃの黒髪が目に入ったと思つた途端。

ぼすん、と。

彼の小さな頭が俺の肩に当たる。

無論、俺も相手も、大ダメージを受けたなんてことはない。

何てことはない。

ただ、彼の筆箱やらノートやらが宙を舞い、床にばら撒かれただけの事だ。

だが勿論、俺は申し訳ないと思つていたのでそれらを拾う為にしやがみこむ。

「大丈夫か」

ところが、相手は言つのだつた。

二人、しゃがんでるので周りの生徒には聞こえない。

彼も、それが分かつて言つたのだらう。

俯いたまま、散らばつた筆記具を拾い集めながら。

それでも耳元で、ぼそり。と。

「オレに関わらない方がいいですよ　噛み殺されたいんですか」

敵意。

戦意。
てきが
敵愾。

全部剥き出しになつて、俺に向けられたような気がした。

これ以上干渉したら、冗談ではなく、本当の本当に、噛み殺されそうだった。

いや、誰に？

何に？

最もそれは、喜屋武の口から漏れた言葉ではあったが、その感情は、喜屋武から滲み出るものではなかった。

この気配。

獣の気配。

物の怪。

怪物。

怪異。

だがそれを確認する暇も、証拠もなかった。

ただ相手の制服に刺繍された名前を確認する暇はあった。

喜屋武。

喜屋武幸音。

それが、彼の名前だった。

今まで目にした事がないわけではない、むしろこうして移動教室の際にいつもすれ違っている生徒であった。

なのに　なのに。

それなのに、何も感じなかったというのは変だ　気持ち悪いほ

ど、何も気付いていなかった。

故意に注意を、引かせないようにはしていたかのような。

そして今日も。

今度は彼の方からやってきて、そして

さちねハウンド 其の壹（後書き）

幸音は男の子なんですね（原作既読の方なら驚かれるはず？）
脱・ハーレム目指して頑張ります（？）

さちねハウンド 其の貳

002

「ええっ!? あ、栗国くん?」

金切り声がして驚いて顔を上げれば、目の前に驚愕した様子の青柳がいた。

今日は、二月十一日の日曜日。

祝日である建国記念日の前日だ。

午後五時頃。

学校もない。

俺と青柳が、一体どこで出くわしたかと言えば、それは、家の近くの商店街。

の、外れ。

人通りが多いが、ほとんどの店のシャッターが閉められている、むしろ閉店してしまっている、そんな通路の一つで。

俺は、折りたたみ式の椅子に腰掛けていた。

「なんだ、青柳じゃん」

青柳の私服姿。

初めて見た。

というか今まで外で会ったこと、なかったんじゃない?

きっと寒がりなのだろう、どこぞのブランドのコートを着て、足のラインを強調させているかのようなぴったりとしたジーンズで、そしてどこぞのブランドで(多分厚底であろう)ブーツを履いて、どこぞのブランド品の小振りのバッグを持っていた。

俺は今座っているの、ちゃんと目を上げて彼女を見る。見る。

すっげえ、化粧してる……。

すっげえ、綺麗なんですけど……。

あれ、何だろう、最初見たときは別に何とも思わなかったのに、意識して見ると美人さん。

いや、優補は化粧なんてしないから、こう、何だろう、今時の高校生像を見ているようで、何だか新鮮だった。化粧って。

あいつは元より化けてるようなもんなのだが。

それに、べっぴんさんな優補にそもそも誰も適わないのだ。と、のろけてしまったが。

それにしても、優補には及ばないにしても、化粧すれば、人ってこんなに変わるんだなあ……。

目元とか。

唇とか。

何だかなかなか魅力的ではないですか！？

「……あれ？ 栗国くん、何ゆえそんなにガン見？」

「……いや、いいセンスしてんなーと思ってよ」

殴られた。

バッグが振り落とされる。

「……。いや、悪かった。ナンセンスだよ」

「栗国くん、ギャグに関してはノーセンスだね」

うん。

分かってる。

センスレスだ。

「でも、先程の台詞は、きつと空耳だよ。なんか一気に、中年ぽい人の空気を醸し出してたからね」

中年ぽいと言われた。

マジへこむ。

「ただでさえ、こんな所にいて。ホームレスみたいだよ」

「やめろ。全ての中年の人をホームレスにするな」

「そんなこと言っただけよ、行間ばっかし読んじゃ駄目」

「行間って……」

「でも、行間を読むって言っても、新聞の行間読んで、何かが得られるのかな？」

「いや、行間を読むって、そういう意味じゃねえぞ……」

「そうなの？ 毎朝新聞読んでたけど、行間読み」

「何が得られるんだ！？」

「もつと世界を知りたくて」

「そこだけピックアップすれば何だか主人公と共に冒険に着いていくヒロイン的な台詞に思えるぞ！」

「だから私は旅に出たい」

「乗るな」

「泥棒さん、私を、どうか連れてってください」

「クラリスだったのかっ！」

「おノリがよろしいようで」

「それ、何も上手くないからな」

「実際、ルパン三世に盗まれてみたいよ。こう、城の天辺に監禁されて、それでも優雅に助けに現れる人」

「彼は優雅ではないと思うぞ……」

「ところで栗国くん、それは盗品なの？」

「は？」

「そこに並べてあるの、戦利品？」

「……。青柳、お前、見て分からないのか？」

「んー、掘り出し物市？」

「いやいや、どこが。」

「いわゆる、弾き語り」

路上ライブ。

……一人で。

ちよっと前までは歌ってたんだけど、今は休憩中。

何っつーか、言い訳がましいのは承知で、ちゃんとバンドも頑張ってる。

まずは勧誘から！

「んー、どうということ？」

どうやら青柳、まだ分からないらしい。

「栗国くんが、シンガーというレッテルを貼られて、商品として陳列されてるの？」

「どうしてそうなるんだ!？」

だとしたら教えてくれ。

俺は果たしてハウマツチ!

「え? デスマツチ?」

「どうしてギターで死闘を繰り広げなくちゃなんねえんだよ」

「あ、ミスマツチだったね」

「上手いこと言った!？」

いや、言えてないな。

ここらへんはノリだ。

ノリノリなのだ。

のるかそるかのギャグの掛け合いなのだ。

何だかポルカと似ている。

ダブルでノリノリ。

「ていうか、お前、そもそもどうして金切り声なんて上げたんだよ

……」

何やってるか分かんなかったんなら。

「いや、おっさんだと思ったけど、よく見たら栗国くんだったから……」

「また中年の話か！」

やめて！

引き摺るから！

ずるずるするから！

「もしかして、中の人おじさん？」

「何だよ中の人って！」

憤慨だ！

ああ、中の人って、中年って意味だな！

隠語なんだな！

「で、じゃあこれはギターだとして、」

「いや、ギターだし」

れっきとしたエレキギターだ。

「じゃあこの大きい箱は？ 集金箱かと思った」

「箱……」

アンプな。

「え？ 何？ あっぷっぷ？」

「笑うと負けじゃない」

つか笑えねえ。

「アナログモデリングギターアンプヘッド　まあ、ここで音調節
したりするんだよ、ほら、ギターとこの線で繋いでるだろ？　いわ
ゆるスピーカーだな」

「ふうん」

さほど興味はなさそうだ。

続いて青柳は、俺の足元に散らばったものを指す。

「じゃあこのつぶつぶは何？」

「つぶつぶ……」

どこからどうきてそうだった。

いっぱいあるからか。

いや、ちょっと出っっぱはよくなかったな……。

って、どうしてこう、ギター入門講座みたいなことになってんだ？

頌史さんと訝藍ちゃんのはじめてのエレキ　うわ、言ってる自分
分で痛い。

「ピックだ。弦をはじく奴」

プレクトラム。

義甲。

「ピック！！？」

急に叫ぶ青柳。

何だかだじろいでいて、逆に俺が焦る。

「おい、何なんだよ」

「ピックって、あれだよね？　ピック病」

「はあ？」

演奏大好きな人なのだろうか。

なんか中毒みたいな。

「認知症だよ……アルツハイマーと違って、原因不明の病気。記憶
力低下や、人格異常になっちゃうんだよ」

「このピックを知らないでそっちを知ってるのは凄いやけどな」

「何言ってるの、有名だよ。それに、これの怖いトコは、病識がな
いってやつで。周りの人も、何も気付かないみたいだよ。相手の話
を訊かずに喋り続けるとか、人格が変わったり、奇怪な行動をとっ
たり。そんなのだけじゃ、誰も分らないよね」

「そう、か」
何だろう。

思い当たる奴がいなくてもない、とかそんな風に思っ
てしま
うのはどうしてだろう。

「……でも、そうなんだ、ピク病の権化って、これだったんだ」

「お前の発想は面白いが、そんなことは断じてない」

あつてたまるか。

そもそもピク病は、ピク博士が発見者だから付けられたので
あつて、これとは全く関係ない。

「つか何でこんなにピクの話してんだ、俺達。」

取り上げすぎだろ。

ピクアップか。

エレキだけに。

「あれ？何かとても寒気がするんだけど」

「風邪じゃないのか？」

「大丈夫、それは心配ないよ。このコートの中、ニンニク入ってる
から」

「臭っ！」
殴られた。

いや、女子の前で酷いことを言ってしまったものだ。

って、俺が悪いの！？

ところで、と青柳はまた目線に戻す。

話を戻す気はないようだ。

そもそも、戻すも何も、戻るとしてもどこまで戻るんだろう。

「いつぱいあるけど、これ全部使うわけ？」

「んなわけねーだろ」

「どんな奏者だよ、それ。」

「まさしく爪じゃん。」

「いや、ちょっといいやつを探しててさ……ほら、これ見ろよ」

「言って、今まで手に持っていたものを青柳に見せた。」

「愛用のピック。」

「他のと違って、金属製。」

「かれこれ 六年間のお付き合い。」

「よくぞこんなに持つてくれたものだ。」

「まあ、ずっと使ってるわけじゃない。」

「一緒に居て、六年間。」

「この、エレキも。」

「あれ？ これだけおにぎり型じゃないね」

「おにぎり言うな」

「丸まってるね」

「そうだろ？ ずっと使っていると、丸みを帯びてくるんだよ。ちょっと使いづらくなってきたてさ、大事なときにしか使わないで置こう、って思ってる。それからずっと、持ち歩いてるだけになってんだ。他ののは、今までに買ったやつ。だけどじっくりこなくってな」

「……ふ」

「あ？」

「今、笑ったか？」

「ううん、ごめん。いや、栗国くん、何だか楽しそうだなーって、思ってた」

「……」

「こつして、ギターを弾いて」

「……………」
「佐式さんっていう、彼女もいて」

「……………」

「青春って感じで 幸せじゃん」

青柳訝藍。

牛に誓った少女。

おせっかい。

面張牛皮。

そして困ったことに、牛飲馬食をする癖がある。

彼女の関わったそれとの問題は、解決はしたものの。

果たして、それ以外は と問われれば、それは、分からない。

彼女は彼女で、今まで、とても辛い思いをしてきた 今も、しているかもしれない。

だから、青柳から見ると俺は、とても幸せそうに、見えるのだろう。

俺は、そうは思わないが。

と。

そんな傍から見ればなんだこの生意気な、と罵倒されるであろう

台詞を言っではしまったが、実際。

俺だって、幸せなど掴めていない。

むしろ必死なのだ。

欲しくて欲しくて、たまらない。

青柳に比べれば、それは幸せだと思ってる者がいるかもしれないけれど。

そもそも比べるものではないが。

「ねえ栗国くん、今暇？」

「ああ、休憩中だし」

「じゃあ、お邪魔します」

と、彼女はアンプの上に腰掛けた。

「つて！ 駄目だ駄目！ 何やってんだよおい！」

「だって椅子なかったし」

「だからってアンプの上に乗んなや！」

「集金箱じゃないならいいかなーって」

「よくねーよ」

「大体さ、どうしてこれにはビニールシートが敷かれてるわけ？
人間様の方が大事じゃない」

「汚したくねーんだよ」

「潔癖症」

ぼそり、と呟いて青柳は渋々地べたに腰を下ろす。

ばさ、と何か巨大なものを隣に置く。

買った物袋だった。

中は、見なくても分かる。

きつと食料だ。

一日かそこらでなくなる、ある意味哀れである意味幸運な食べ物
たちだ。

さつきからその物体に気付いてはいたけれど、彼女の格好にそれ
はあまりに似合わず、存在すら脳内で消していた。

「でもこれ、綺麗だよね、ピックって」

「またそれかい！」

そろそろ飽きる人達も出てくるって！

ん、飽きる人達？

わけの分からんことを口走ってしまった。

「色んな色や模様があるじゃん」

言葉で遊んでないか。

意識のし過ぎか。

「苺みたいだよね」

「さつき粒々といったのはそれゆえか！」
なるほどね！

種に見立てたか！

流石訝藍さん！

食べ物のことなら負けない。

「うーん、苺が食べたくなってきたな」

「ピックを見てそんなことを連想するのはお前だけだな」

「確か、買っておいただよね」

これは買ひ物の帰りなのか。

がさごそ袋を漁る青柳。

その際中身が露あらわになるのだが、これがまた壮絶な絵だ。

一番下は、固いもの（主にパック詰めされたもの、卵や豆腐やら）で、苺もその層にあった。よく潰れねえな……何か入れ方にコツがあるのだろうか、いやもう既に潰れているのか。

そしてその上が、お菓子類。

一番上が、例によってパンだった。

あと、長い物体（葱とか）が突き出していたり、ニンニクや生姜が転がっていたり、見ていたいものではなかった。

全て、ではないだろうが、これらは頂いたものなのだろう。

痛んだものや。

賞味期限切れの品。

それは、青柳の家庭の事情だが。

そもそも青柳の過食症も、家庭の事情なのだが。

「栗国くんも、一緒食べよ」

「……いいのか」

「うん、これは大丈夫なやつだし」

「これはって……じゃあ、お言葉に甘えて」

俺だけ椅子に座ってるのも悪かったので、二人でジベタリアン。
気が進まなかったが。

そして苺を手に取り、頬張る。

俺は口下手なので、甘酸っぱい、としか言えないが。

高レベルな感想を期待されては困る。

「おいしー。苺って、やっぱり今が旬だからか、美味しいよね」

「はい……？」

「苺。十二月からが、旬だよね」

「おい……」

「うん？」

「お前、とてつもねえ勘違いしてるぞ」

「どゆこと？」

マジか。

マジで言ってるのか。

「苺の旬は、五月だ」

「あはははは」

笑われた。

っておい。

本当だよ。

「クリスマス時の苺は、じゃあなんなのよ」

「あれはビニールハウスで育ててんだよ……」

昔習わなかったか。

そもそも一年中苺は売っているのだから、そこで何らかの疑問を
覚えてもいいはずだ。

しかし傷ついた風の青柳だった。

別に、食べ物に詳しいわけではないらしい。

「気にすんなって。過ちを犯していたことより、今過ちを正せたことを喜ぼうぜ。俺だっであつたさ、馬鹿な勘違いが」

「それ、私は馬鹿な勘違いをしたって暗に言ってるよね」

「そうじゃなくて」

マイナスな青柳だった。

女座りでなよなよしている……。

「中学生の頃知つたんだがな、一期一会を毎一回って思つてたんだぜ。一回、つて読み方まで間違えてたんだぜ」

「……。馬鹿？」

「そうだな！俺は馬鹿だよ！」

百人一首を百人一首ひゃくひとひゃくと読んでいた俺は、馬鹿です。

正真正銘の、馬鹿です。

とんだ暴露話だった。

「俺が音楽活動してんのも、成績が良くないからだよ」

「ひねくれないでよ、そんなことないってば」

「いや、本当にだから俺はギターやってんだけどな」

嘘だ。

そんなわけない。

音楽が、好きなのだ。

歌を聴くこと。

歌うことも、大好きだ。

だから、自分でそれを創ってみたくなった。

同じような仲間と、それを弾いてみたかった。

なんて、言えなかった。

青柳は、もうそれ以上言つては来なかった。

俺は正面に座る彼女を見る。

「……お前、楽器に弱そうだよなあ」

「何？ 急に突然いきなしどうしたの」

「いや、お前何にも知らないだろ？」

「そつ、そんなことないよ。私は楽器大好きだし、楽器も私の事が大好きなんだよ」

「そりゃ重畳だ。だったらギターもお前のことを好きなんじゃないか？」

「も、勿論っ」

無茶ぶる青柳だった。

こいつ本当に自滅型だな。

何にでも首突っ込むなよ。

「じゃあ、ほら、持ってみ」
手渡す。

とうの昔に苺を平らげていた青柳は、「え、あつ、う」とか言いながらそれを受け取る。

重そうだった。

俺は手を差し出す。

「はい、返却」

「え、何でっ!？」

「お前には無理だった」

「まだ分らない!」

「ムキになんなよ……俺には分かる。その娘はお前をギタリストと認めていない、故にお前に弾かれるつもりはない」

「この娘……って、女の子!？」
しまった。

何だか変なことを口走ってしまった。

ので、開き直る。

「長年一緒に居るからな。もう俺はこいつを家族の一員と認めてい

る」

「そこまで……」

まあ、私全然ギター分らないし、と返してくる青柳。

無意識に、俺は受け取ったその表面を軽く撫でてしまう。

宝物に等しかった。

家族がいなくなっても、ずっと側にいてくれた、大事な物だ。

かけがえのない存在。

「あのね、栗国くん」

ちよつと言いにくそうに、つつかえながら。

「私、謝らなくちゃいけないことがあって」

「ん？ 謝る？ 迷惑なら十分掛けられてるけど、別にどうってことはないぜ」

「勿論、それについてももう感謝し切れないくらいなんだけど、そうじゃなくて。

私、栗国くんに話しかけたじゃない、教室で、二人っきりで。あ

の時ね、本当は、私栗国くんを巻き込む気だった」

「……？」

「牛に、捧げるつもりでいた」

「……」

優補、マジ凄え。

当たっていやがる。

「本当に、どうしてそんなこと考えたんだろ 今思えば、自分が怖くなる」

「お前も切羽詰ってたんだよ。俺はそれでも気にしない。むしろ、打ち明けてくれて嬉しい」

「……優しすぎ」

「もう終わったことだし」

終わったことにいちいち突っ込んでいても仕方が無い。

青柳は、俯いてしまった。

泣き出すのかと思っただが、彼女は静かに穏やかに笑っていた。安心したのかもしれない。

ありがとう、と青柳は言っ

「そつえば、佐武さんとはどれくらいのお付き合い？」

「いきなり話題を変えたな」

かけがえのない存在。

それは。

優補も。

「何年くらい？ 百年？」

「あー、来月で一年」

「ほほー、なかなかですなー」

「誰だよそれ……。まあ、あいつと知り合ったのはもっと前のことで、小学生の一年だったな」

「そんな前から……。道理で、仲がいいわけだよ。あ」

そつだそつだ、と何かを思い出したような顔をして。

近付いてくる青柳。

近い。

呼吸の音まで聞こえる。

一牛鳴地。

「えつとさ」

戸惑いながら、彼女は言ってくる。

「佐武さんは、何なの？」

初めから、これを聞きたかったのかもしれないな、と俺は思った。もちろん、謝るといつのも目的ではあつただろうが。

こないだの出来事で、青柳も何かに気付いたのかもしれない。
何なの、か。

「彼女」

「知ってるよ」

む。

今のは結構恥ずかしいんだぜ。

「誤魔化しても無駄なんだからね。私の靈感がピンピンきてるんだから」

「靈感、ね……」

「佐式さん、歌が上手いんだね、とは思ったけど……あれは、人間の声じゃないよ」

「面白いことを言うな」

「だって、どれだけ高音域を出してたと思ってるの？ あんなのヴイタスも引っくり返るよ」

「ヴイタスは男だ」

「女性でも出せない声といってもいいね。佐式さん、彼女、何者？」

「恋人って言ったら」

「どんな恋人よ　彼女、実は男なんでしょう？」

「何てこと言いやがるんだ!？」

優補が殺す前に俺がやつちやう勢いだったよ!

とまあこれは言い過ぎにせよ、青柳も女子なんだから、そういうの言われていいとは思わないだろうに。

「お湯をかければたちまちに、」

「らんまじゃねえよ!」

そもそも男じゃない!

そして女でもない……。

正確には怪異には性別などないのだ。

「そう、お湯　　そう、佐武さんは　　水のおいがする。って変かなあ……」

あながち靈感というのは嘘ではないらしい。

ねえ、と青柳はさらに身を乗り出した。

一ミリでも動いたら耳に唇が触れるのではないかと言っほどの距離。

全く、隠し事ができちゃったじゃねーか。

「彼女、人間じゃないんでしょ　　ねえ、教えてよ」

やっぱり気付いてたか。

本人にも言わなくちゃいけないな。

人魚の歌を聞いたのだから、仕方ないことか。

「あれが、俺の関わった怪異だよ。人魚だ」

「人魚。……ええええええ！？」

どゆことどゆこと!?

某漫画だったらずっこける所だが。

連呼して座ったまま上下に跳ねる。

「でもでもそれはおかしくない？　人魚は足が魚なんだよ！」

「あーまあ、そこら辺はややくしくてさ……何だ、漫画とかでたまにある設定　人間に姿を変えられる人魚っているじゃん。ああいうのだと思ってくれていいよ」

全然違うが。

人間になりたくてなったわけではない。

それに、自由に姿は変えられない。

人魚の姿に、帰れない。

「うーん、そっかあ……そんなこともあるもんだね……吸血鬼さん

に会ったり、人魚のクラスメイトがいたり、凄い経験しちゃってるなあ」

「お前も気をつけるよな」

「？」

「いや、一度怪異に関わると、巻き込まれやすくなっちゃうから。意識しなきゃ、大丈夫だと思うが」

「そっか」

頷く青柳。

「私も、関わった人間だもんね」

「ああ」

続けて、お前の家はどんな感じだ、と訊きたかったが、やめた。気にならないわけがないが。

そうそう変わることもないだろう。

何もできないのは悔しい限りだが。

「でも、佐式さんにはお礼言っとかないと。通りすがりの吸血鬼さん達には、あんまり言えなかつたし」

「あれくらい何でもないよ。ただ、その吸血鬼コンビには俺からしつかり礼は言つたよ」

「そっか……。でも、感謝してるんだよね」

何てことはないって、言われても、ね。と彼女は言う。

そっか、と青柳は目をギターにやる。

「栗国くん、何か弾いてよ」

「は？」

「曲。感謝の気持ちを込めて、私はお礼として、あなたの歌を訊いてあげます」

「逆だろ、普通……」

感謝を込めて、歌います。

訊いて下さい。

いや、歌わねーし。

人からせがまれると、一気にやる気が無くなるのだ。

こまった性質である。

これじゃあアンコールとかに答えられねえ。

誰も見ていない所で、ぽつんと一人弾いていたい。

その癖、訊いてもらいたい。

たまに、足を止める人が居るだけで嬉しい。

だが、拍手は欲しくない。

ひねくれてるのかも……。

「さっきまで歌ってたんでしょ？」

「そりゃそーだ」

「じゃあ今から弾いて歌つてよ」

「やだ」

「もー、何でよ」

「頼まれると弾きたくなくなる」

「けち」

「けちだよ」

優補だったら、喜んで歌うがな。

それに楽器も完璧に。

あいつはオールラウンダー。

ピアノだろうがギターだろうがベースもドラムもどこの国の名

前も分からない民族楽器も何でもお手の物だ。

優補はバンド結成したらボーカルやると張り切っていたが、魅了

の歌はやめるように言っておいてある。

彼女の歌で、全国の皆様が虜になってしまっただけは大変だ。

「どうしても訊きたいっつーんだったら、今度は俺に話しかけずに遠くから見てるんだな」

「すごい上からだ……」

でもでも、よく分かったよ、と。

青柳は嫌な笑みを浮かべた。

「栗国くん、とってもシャイなんだね」

「く……！」

「だからさっきまで、^{かつい}鬘とグラサンをしてたんだよね？」

「それは違う」

学校の先生に見つかったらヤバいかもだからってことで、明るい
うちは……あれ、これなんか恥ずくね？

あ、なかなかこれは……羞恥を感じるぞ。

もしかして中年って呼ばれた理由ってコレ？

「あれ？ どうして頬が染まってるの」

「染まってるない」

「もうそれ鬘と同じ色だよ……流石にピンクはないと思うなあ」

「そんな色の被れるか！」

「それは嘘としても、栗国くんの羞恥の念はともかくとしても、栗
国くんの醜態は周知で衆知のことなんだよ？」

「……」

こいつはこいつで上手いのか。

ていうか醜態って言われた。

「醜態を大衆に晒しているというのか」

「それは面白いけど上手くはないね ああ、そうか。これ、照れ
隠しなんだ」

「違い！」

間違いない、みたいに頷いてんじゃねえ！

「分かった、分かったよ。そうやって誤魔化そうとしているんだね、

つまらないこと言ってるのも、だからなんだね」

「ストリートにつまないとか言っつな！」

傷ついていくから！

なんだか色々嫌になっってくるから！

「へえ　面白そうすね」

これまでの会話とは噛み合わない内容の台詞が聞こえてきた。
生意気な声。

それでも、自然に。

今までその場に居たかのような気軽さで。

彼は、割り込んできた。

地面に座る俺達を見下ろして。

その少年は、子供っぽく笑った。

晒わらった。

低めの身長。

体つきは細い。

くしゃくしゃの黒髪。

ちよつとつんと尖った鼻。

見覚えがあった　　ということとは、思い出すまでに時間を要した、

ということなのだ。

あの、敵意。

俺に関わらない方がいいですよ

喜屋武幸音だ。

何故、思い出すのに時間が必要だった。

あんな台詞を吐いた奴なのに。

「盛り上がってるよ、お邪魔しちゃっていいですか？　オレから聞
わるって言っただから、別に構いませんよ」

さちねハウンド 其の貳（後書き）

ハウンド編は短めのつもりが、まさかのギャグパートでこんなになるとは……

さちねハウンド 其の参

003

そう言うなり、彼は近付いてきた。

休日だというのに制服姿だった。

少年の面影残る笑顔を浮かべて、俺のギターを指差した。

「これ、あんたの？」

「ああ、そうだ」

いい子そうな顔なのに、なんか生意気だなこいつ……。

それでも中身が外見を裏切っているわけではないな。

続いて喜屋武^{きやん}は青柳を指差す。

「これ、あんたの？」

「お前ふざけんな」

「仲よさそうに話してたじゃないすか」

「それとこれとは違う」

一方青柳はきよとんとしていた。

人から指差されても何も言わない。

「人をこれとか言ってるじゃねえよ、そもそもよ……」

「ああ、ノリで言っただけでしたね。さーせんでした」

言葉だけだなこいつ……。

もっと心込めて言えや。

「それは置いといて、あんたオレの事知ってるんすか？」

「あ？」

知ってるかって……知ってるだろ。

こないだ会ったばかりだろうが。

まだあの日の方がマシに思えた。

「当たり前だろ……喜屋武幸音だろ。おら、フルネームまで把握されてんだから、気をつけるよ。いつ殺されるか分かんないぜ」

「デスノネタすか。でもオレ偽名かもしんないすよ？」

「お前の名前を確認する為にわざわざ死神の目を授けられるまでも無い。すぐに本名割り出してやる」

「うざいっすねー」

「お前がな」

うーん、話は面白いが生意気な口調の所為で台無しだ。

むかついてしかこない。

相手は、そこでふうと溜め息をついた。

「……オレをまだ覚えてやがる」

空耳、ではなさそうだが、確かにそう言っていた。

戦慄。

まただ。

あの時も感じた、敵意。

この今にも襲われそうな、緊迫感

「あんた、名前は」

その言葉は、青柳に向けられていた。

年上に対してあんたはないんじゃないのか。

今時の子ってこんなもんなのか？

流星に青柳もむっとしたようで、刺々しい口調で、それでも答えた。

「私は青柳訝藍」

「変なの」

「……」

こいつ……。

青柳は、もー、栗国くんこいつ何？ みたいなキツイ視線をこちらに送ってくる。

俺だって知りたいわ。

「青柳……か。でも、あんたはオレに、関わる必要はない」

その時。

感じた。

これは本物だ。

確信した。

確かに、何か風の如く通り過ぎてゆくのを。

ガチリ、と音がする。

牙を鳴らす音に似ていた。

すると、青柳は弾けたように立ち上がり、そして、

「ごめん、栗国くん。私、帰る」

そう言ったかと思うと、荷物を持って、走って行ってしまった。

喜屋武の方を見向きもしなかった。

わけも分からずにいると、喜屋武が可愛い笑い声を上げていた。

「あいつには効いたのか。ま、そうだよな」

「おい、お前」

「ねえ、栗国先輩」

勢いよくその場に座って、椅子に腰掛ける俺を見上げるその表情は、無邪気な子供のものだった。

あれ？ 俺の名前知ってるのか。

今日は制服じゃないし……いつからだろう。

「それ、エレキじゃないっすか！ ちょっと弾いてもいいっすか？」

「ああ？」

口調は変わっていないものの、態度が少し変わった。何だ、この無垢な子供……と思わせるような。

「いや、お前いきなり何なんだよ。そもそもお前ギターなんてガチリ。」

耳元で音がして、俺は飛び上がりそうになった。怖い。

身が凍るようだった。

何だ？

俺はどうしてこいつにエレキを貸してやらないんだ？
少しくらいいいだろう。

全く、何を悩む必要があったらう。

「あざーす」

ニコニコと満面の笑みで、そっとエレキを受け取る喜屋武。
ここだけ見れば、とても可愛い男の子だ。

「ふーん、随分と使い込んでるんすね。でもちゃんと手入れしてる」
「え？ 分かるのか？」

「分かりますよ。手垢も目立たないし、しょっちゅう拭いてるみたいすね」

「……すげー。」

引っくり返したりしながら、吟味している。

「先輩、ピックはありますか？」

「あるさ。いやまずその前に先輩って何だ」

「音楽の先輩すよ」

何ともなさそうに言う喜屋武。

少し弾いて音を確認している。

慣れた手つきだ。

ギターの方も満足しているみたいで、いや、そうじゃなくて。

「弾いていいすか？」

「……慣れてるみたいだからな、駄目じゃないけど、ちょっとだけだぞ」

鋭い音がして。

もう既に彼は弾き始めていた。

いやこれプロじゃねえの!?

なんだこのイントロからのテクニク!

小さい指を素早く動かして　　ってうるせえ!

「駄目だ、ここでそんなでかい音出すな!」

いつの間に調節しやがったこいつ。

アンプに飛びついて音を一気に落として叫んだ。

懲りることなくそのまま弾き続けようとするから、俺はヘッドホンを投げつける。

それは、勿論故意に当てるつもりで投げたのではなく、注意を引くためだ。

だが、それが喜屋武の肩に当たりそうになった途端。

ヘッドホンが、粉碎した。

……。

安物の方を投げてよかった。

って、粉碎かよ。

砕け散ったのかよ。

当たってもないのに砕けたのかよ。

これは……間違いないな。

流石にヘッドホンがばらばらになったのに気付かないわけがなく、喜屋武は弾くのをやめた。

多くの人の目が俺達を

あれ?

誰も、見ていない？

「あれ、ヘッドホンあるんなら言っておきなよ。壊れる前に」

「安心しろ、まだあるよ、高価なのがな」

弾きたくなるのも経験者なら無理も無いが、時と場所を考えて欲しい。

それに怒られるのはきつとこいつじゃなくて俺な気がする。

……俺は、驚くほど落ち着いていた。

気持ち悪いほど、落ち着きを保とうとしていた。

「じゃあ弾いちゃっていいすか」

「もう存分にぞんざいに弾いちゃってると思うがな」

ヘッドホンをして、目を輝かせながらギターを構える彼を眺めながら俺は言った。

そして、彼は再び弾き始めた。

力強く、激しく、可憐に。

ぎゃんぎゃんと。

はつきりとは聞こえないものの、振動で曲を感じた。

すげえええ……。

圧倒される。

意に反して、見蕩れてしまう。

五分以上は経っただろう、一曲弾き終えた喜屋武はヘッドホンを引っこ抜き、汗を拭いた。

「あースッキリしたす」

「それはそれはよかったな」

「でもオレは、先輩みたく弾きながら歌うのはムリっすね」

「練習すれば誰でも って」

「聞いてたのか？」

「相手は頷く。」

「目立ってましたからね。ずっとオレは見てましたけど」「ブチ、と電源もきらずにコードを引っこ抜く喜屋武。

うぜー。

容赦なくうぜー。

調子が悪くなったらどうしてくれる。

座られるわ乱暴な扱いされるわ。

今日はとんだバッドデーだよな、アンプにとって。

「今更なんだけど、喜屋武」

「なんすか」

「お前すげー上手いよな」

「は、なんすか気持ち悪い。そんなおべっかはやめてくださいよ」

「おべっかって……」

また古い言葉を使うな……つつか、おべっかって目上の人に対して、へつらうのに使うものであって。

「それに、オレとしてはギターよりもベース派なんす」

「はあ……」

それは、面白いな。

何かこだわりがあるのかもしれない。

興味が沸かないでもない。

「サッカーよりも野球が好き、みたいな感じすね」

「ベースとベースボールは何も上手くないからな」

「はあ、なんだバレちゃうのかと笑う喜屋武。

「いや、俺を馬鹿にしてんのか。」

「してるんだな。」

「栗国先輩はいつからやってるんすか？」

「ギターはかれこれ六年だな」

「すげ」

言うまでも無いことだが、お前の方が相当へらへらしてへつらつてみたいだからな。

誰に対してもこうなのだろうか。

全く最近の若者は。

「道理で、……いや、それでもやっぱり分からねえ」

ぼそりと吐き捨てるような声が出たかと思うと、相手の顔は怒りで歪んでいた。

「どうしてすか」

それは質問というより、尋問であり、喚問かんもんだった。俺をぎろりと睨む。

「どうして憶えてやがんだよ、え？ 栗国頌史さんよ オレの犬が、いつあんたを殺すか、わかんねえぜ？」

犬？

今、犬って言ったか？

「脅しなんかじゃねえ、あんた、死ぬぜ」

ガチリ 今度はもつと近くで聞こえた。

その上、何かが耳に触れたような気がした。

震えずにはいられない。

喜屋武は俺に対してではなく、誰に対してもなく、狂ったように、壊れたように、呟く。

呪いの呪文のようであった。

「みんな、オレのことなんて忘れてくりゃいいのに。忘れ続けてくれよ。関わってくんな。偽りを信じ続けていりゃ、それでいいんだ、

オレのことなんて」
そして、ここで俺の意識は途絶える。

さちねハウンド 其の肆(前書き)

時系列は、阿良々木くんが大学一年生ということで忠実に2008年です。あんまり最近の話題とか取り入れないように心がけます…。

さちねハウンド 其の肆

004

誰かに揺さぶられているのに気付いて、俺は目を開けた。

俺は、閉まった店のシャッターに寄りかかるようにして、眠っていたようだった。

顔を上げて相手を見る。

「大丈夫？ 栗国くん」

その主は、みなくれない皆紅瞳だった。

温和丁寧。

紅顔可憐。

同じ高校で、一組。

そして俺の友人の一人。

「ああ、平気平気。ちょっと疲れてたのかな、何で俺」

皆紅は、ほっとした顔になって、言う。

「それでも栗国くん、熟睡でしたよ。それに、それは、く、く、どうかと思
いますね」

「……？」

言っている意味が分からず、きょとんとしてしまったが、ふと右
肩が重いことに今更ながら気付いて、横を見ると青柳の小さな頭が
あった。

え ！？

驚きたじろぐ、しかし起こさないように無言で騒ぐ俺を見て、皆
紅はくすりと笑う。

「佐武さんには秘密にしといてあげますよ」

「いや、ちが」

混乱している。いつの間に俺は寝てしまっていて、そしてどうして隣に青柳がいる？ 青柳とは、さっき別れたはずで あれ？
そもそもどういったやりとりをしたんだっけ。

何だか……頭が痛い。

皆紅は人差し指をぴんと立てて口にあて、「しー」と俺に微笑んだ。

「寝ている子を起こしちゃ駄目です」

「いや、そんなつもりはないけど……って、お前は俺を起こしたじやん」

「それは、栗国くんは男の子ですから」

男女肩を並べて寝ているのは、見るに耐えられませんでしたしと彼女は言う。

この歳で男の子と呼ばれるのはくすぐったいというか何とか、まあ恥ずかしかったが。

うー、ん？

全く身に覚えは無いんだよなあ……いくら潔白を主張しても、優補には無駄だろうな。

バレたら……ヤバイ。

「ていうか、お前、今日祝日なのに何で制服なんだよ」

と、癖で思わず聞いてしまった。

またこいつも制服か。

「学校で勉強してましたよ。休みとはいえ、部活等で学校自体は開いていますし、それに祝日だろうと制服で過ごすのがふさわしいと校則にありましたよ、確か学生手帳の」

「ああ、そうだったな、わり」

これほどまでに真面目で立派な人間を、俺は同じ年齢ではお前し

か知らねえよ。

ん？

またこいつ「も」制服？

助詞がおかしくないか？

ああ、またこいつも、の間違いか……な？

「それで、栗国くんは今日も一人ライブですか」

「ライブって言えんのかな、これ」

「ライブっていうのは、生演奏のことですから、間違いではないかと」

「そうか……」

そついやそつだっけ。

「誰にでも分からないことはありますからね、間違つのも当たり前です」

「ああ、当たり前だな」

「栗国くんは英語で面白い間違いをしてみましたよね。確かあれは、

ジーニアスをイージアスと勘違いした上に、」

「それは言わなくていい」

「あら」

俺は英語が好きなのだが、勿論、というか、皆紅には敵わねえな。

イージアスがイージーの最上級だと思うような奴だ、英文法が全く分かってない上に単語もつる覚えだ。

「もうすぐ試験だし、弾き過ぎは駄目ですよ」

「ああ、分かつてる」

そついやテストか。

二週間後だっけ？ ……正直やばい。

もしかしたら、休みだから弾いているというより休みだから弾かざるをえないというか、無理に弾いているというか……現実逃避な

のかもしれなかった。

そついや、修学旅行もあるんだつたな。

「そついうお前は？ 勉強終わって、帰るところ？」

「いえいえ、今日はバイトの日」

「ふうん、頑張ってるな」

「大変ですけど、やり甲斐は十二分にありますよ。それに、明日は私も息抜きをしますし。苦ではないですよ」

「息抜き？」

はい、と頷く。

長い、一つ結びの髪が揺れる。

丁寧過ぎるその口調は、最初は慣れられなかったけど、今では違和感無く、むしろこの口調でないと不自然に思うほどだ。

「ちょっと遠いですが、がじゅまるの木があつて。それを見にいってください」

「見に、」

「見ているだけでとても癒されますよ。時が経つのも忘れます。私は月に一回は行くようにしてますね」

「木、か……」

俺としては木のある森よりは水のある海派なんだよな。これは人によるんだろうが。

どっちも嫌いというのもそうそう聞いた事がない。俺的には屁理屈言つてひねくれてるとしか思えない。

「それでは、そろそろバイトの時間なので」

「うん、じゃあな」

皆紅が人込みに紛れて見えなくなったのとほぼ同時、青柳が目を擦りながら、お目覚めのようだった。

暢気なもんだ。

「あ、あれ？ 私……？」

「いーかげん頭をどけてもらいてーな」

「ええっ！？ あ、栗国くん！？」

さつきも似たような台詞、聞いたぞ。

あたふたして立ち上がる。おもしれーな、こいつの反応見ると。つて、きつと皆紅も俺をそんな目で見てたんだろうな……。

「な、どうして私栗国くんの肩に頭乗つけて寝てたんだろ……私、忘れ物をとりにきたはずなのに」

「忘れ物？」

「うん、その鞆」

見ると、ああ、俺の足元に彼女のバッグらしきものがあった。買い物袋だけ持って行きやがったな、こいつ。

「寝てたのは栗国くんのはずなのに」

「……え、俺そんなに前から寝てたの？」

うん、と相手は頷く。

記憶にはないのだが、青柳の言うことには俺は熟睡だったらしい。いつからだろう。

「うーん、何か思い出しそうなんだけど、えーと……」

ここは黙っていた方がよさそうだと分かっていたので、何も言わずにいた。

「ダメ。何を思い出したいのか思い出せないよ……（・ー・…？）」

今、会話表現の際に絶対に、ぜったいに使用してはならない物質が見えたような、いや聞こえたような、感じたような気がしなくもなかったのだが、普通のおしゃべり中にそんな思い違いもないだ

ろつと、とりあえず無視することにした。

縦書きだと最早何だか分からない。

しかしまあ、彼女の言うとおり、何かを忘れているという自覚は俺にもあるのだ。だがそれが何かすら忘れていて、非常に気持ちが悪。

「青柳、俺も寝た覚えはまったくないんだけど、というかそもそもお前といつどうやって別れたっけ？」

「うん？ ああ、そうか、忘れ物を取りに来たってことは、私達一度別れたって、ことだよな……」

今更、気付いたように言う青柳。
眉根に少し皺しわを寄せて

「あ痛ッ」

ふいに青柳は自分の頭を押さえた。よろける青柳を俺は急いで立ち上がって受け止めた。

本当に弱々しい細い身体だった。

どうしてこんな体つきで今まで立っていられたのだろうか……と真面目に考えてしまっくらい。

「うう……ごめん、栗国く」

「りゅ」

突然。

不思議な単語が聞こえた気がして、気が付けば、目を見開いた彼女の姿があった。

彼女と言うのは、三人称の彼女ではなく。

ア・スウィートハート。

恋人のことだ。

佐式優補。

才色兼備だが、人格破綻者。

ピック病の話を出すまでもない。

彼女の個性は、個性が無いことだ。

一人称がころころ変わる。

私、あたし、僕、オレ、うち、わっち……目まぐるしいどころか聞き苦しい。それには何か基準があるのか、気分で変えているのか、全く分からない。

まあ、怪異ゆえなのだが。

怪異は周りの影響を受けやすい、その特性、性質、性格は周りの人間によって形成される。

というわけで、今回の彼女は。

「儂のしょーじに何すんじゃあ！」

忍の影響に決まっているが、そんな感じで、俺達に、いや詰まるどころ青柳に突進していった。

元気だなあ、こいつ。

髪を乱して猛烈に突き進んでいくさまは、あたかも牛のようだった。

りゅー！ と一風変わった叫び声を上げながらというのは、どの生物にもないものだと思うが。

まあでも、普通彼女でもないのに肩に手を置いてたら、誰でも疑っちゃうよな。

「降臨きゅぴゅん！」

手をグーの形にして青柳を狙うが、何とか俺がその手首を掴んだ。だが反対の手が伸びる。

「大陸力チ割るドリーム彗星！ クレイジーコメント！ さらにい
く！ トウインクルスター！ まだまだあゝ！ ミックスマスター
！ もいっちょあゝ！ ぷりんせす・おぶ・まーめいど！」

いや、言っても分かるのかこれ！？

しかも振りが長い！

テイルズに毒された人魚がここにいた。

まあ、そんな長々と呪文詠唱をしている間に、俺は優補の両手があつちり捕らえて、動きを封じてしまったのだが。

一方で開いた口が塞がらない様子の青柳は、俺が弾いている時に座っていた椅子に落ち着いていた。目が点だ。

「何で攻撃が効かないかな　！」

「利いてないんだよそもそも……」

「うるさい！」

暴れるのをやつとやめて（実に大人気ない姿だったが）、手を掴まれたまま青柳を見る。

「くうっ、生意気な……儂の恋路の邪魔をするは、その泥棒猫！」

「落ち着け、優補」

「これが落ち着いていられるか！　何やってんのしょーじ、意味分かんない　」

「意味分かんないのはお前だよ　あのな、青柳が頭痛……痛っ！　蹴られた。」

優補の膝が、俺の臍へそにピンポイントで命中する。頭痛の話して痛いも何もないな。

……何か今日、色んな人に暴力振るわれてません？

「離して放してよー！」

「何で俺が悪者みたいになってんだ!?」

人目が！　みんなの視線が！

「俺は別に何も　青柳が倒れかけたのを支えただけだって、な？」

青柳

「え？　うん、まあ」

「何で曖昧に返事するんだ!? って痛エっ」

優補に蹴られたわけではない、頭痛だ。

頭が力チ割れるような痛み。

途端に優補は俺の両手を振り切って（つまりはちよっと力を入れれば逃げられたわけで）、今度は俺の肩に手を置いた。

俺は青柳の顔を見ないように必死だった。

「しよーじ、しよーじ?」

「だ、大丈夫だから」

「待って」

ぱっ、と俺の額に片手を当てる。

これはヒール効果とかそんなものではなく、怪異なりの、人魚なりの意思疎通だ。

意思疎通というよりも、記憶共有。

優補は俺から、青柳から、周りの人から、空気から、過去を知ることが可能だ。

彼女の持つ歌の力の応用だが。

「穴がある」

「あ、穴?」

うん、と頷いて優補は手を離れた。

穴って……そんな欠陥商品みたいなさ。

「しよーじと訝藍ちゃんの記憶に、穴があつたよ。でも、この周囲の空気からね……その埋め合わせを試みたら、二人とも記憶が飛ばされてる事が分かった」

あーあ、と彼女は俺を見た。呆れ顔だ。

「関わっちゃったみたい、それも性質タチの悪い忠犬にさ」

「……?」

「怪異だよ」

きっぱり言って、再び溜め息。

……。

……………思い出した。

思い出させられた、と言った方が正しいか。

そうか、あいつだ。喜屋武幸音だ。

あいつに、俺は会ったんだった。そして、確か、青柳の様子が変わって　彼にギターを弾かして　俺は気を失ってしまったんだっけ。

そして同時に恐怖も蘇る。

あの、ガチリというリズムカルともいえる音。

全てが吹っ飛んでしまいそうな、そんな音だ。思い出してしまっただけで身震いする。

それじゃあ、彼は。

「じゃあ、喜屋武はその犬の怪異に憑かれているのか」

「さあ、それはまだ俺にはわからんねー」

その一人称やめてくれ。

いくら忍が好きでもお前には似合わない。まだオレとかのがマシだ。

「だって俺に分かるのは、その怪異の表面だけで中身は分かんないんだもん」

怪異とはいえ、それ自体を詳しく知っているわけではない、か。

俺だって全ての人間を把握しているわけじゃないし。

当たり前だろう。

「……………」

「それで、しょーじはどうしたいわけ？」

優補と、青柳の目がこちらを向く。俺は、口を開いた。

「関わるよ。もしも彼が危ないようだったら、助けたい」

「ふーん」

相変わらず突き放すような物言いで、優補はそこで俯いた。

「でも、その子の居場所を知っている人がいるか、って話なんだけどね……」

さちねハウンド 其の肆（後書き）

佐武さんのキャラ設定は、「キャラ崩壊」です。設定が崩壊って…
…。

さちねハウンド 其の伍

005

俺は優補にできるだけ詳しく話して聞かせた。途中、青柳も話に参加して、無事に記憶は繋がった。

俺が気を失っていた間は、こんな感じだ。

青柳は自分が買い物袋を持って商店街から出ていることに気付いた。気付いた、ということとはそれまでどこを歩いていたのか自分でもちゃんと分かっていなかった、ということだが。そして、自分のお気に入りの鞆をどこかに置き忘れてきてしまったことも知った。

そこで彼女は振り返る。俺と会ったことを思い出し、忘れてきただろうと引き返した。その時俺は気を失っていたそうで、起こさない方が無難だろうと彼女はそのまま立ち去ろうとした。だがその時背後から何かの気配を感じたそうだ。

殺気に等しい。

「まだいたんすか」

「……！」

振り返り、その顔を確認する。前に既に、彼女もまた気を失ったのだ。そして俺は皆紅に起こされたというわけなのだが。

分からない。

喜屋武は何故、俺達にそんなことをするのだろうか、恐怖を植え付け、はたまた殺気まで発しているのだろうか。

まるで狂犬のように。

優補は、一年前の情報ではあるが、皆栗の性別学年問わず生徒を

全て把握している。理由は簡単に言うと、浮気性の確認。俺はしな
いって言っているのに、警戒心バリバリで、俺がいつどこの誰と地
球が何周回ったときに接しているのかを知りたがった。それゆえの
行動だ。

……人間だつたら恐ろしすぎるが。

そんな彼女には勿論知り合いが大勢いて、中高一貫生にも同じよ
うに顔見知りがあるのだが、そのネットワークをフル活用しても喜
屋武の家は全く把握できなかった。それどころか、一人一人にメー
ルや電話をしてみても、彼のことを詳しく知っている者すら、誰も
いなかったのである。

情報が掴めないまま、というのは気持ちのよいものではないだろ
うが、それでも青柳には帰ってもらった。

口論はしたが。

「なんで？ 私だつて協力するよ、栗国くん」

「やめろ。自分から突っ込んでんじゃねえよ。さっき俺が言ったば
っかだろっが」

「その『俺』も、自ら突っ込もうとしてるじゃない。どうして私は
駄目なの？ 栗国くんに助けてもらったんだもん、できることなら
なんだつてしたいんだよ」

音楽を聴くとか、そんなんじゃなくてさ。と青柳は言う。

嬉しい言葉だったが。

それと気持ちだけ、頂いておくよ。

だから、俺は冷たく突き放す。

先程の優補のように。

「正直言つて、そういうのは迷惑なんだよ青柳。俺は好きで首を突
っ込むけど、お前はそうしていい人じゃない。お前は人間なんだし、
怪異に関わって無事だとは限らない」

「……何言ってるの？ 人間って……栗国くんだつて無事とは限ら

ないじゃない」

「いや……人間とは違うよ」

「……？ ……？」

困った風な顔をする彼女に、そこで優補が口を開いた。

「しよーじには僕がいるからさ。僕と彼で一心同体みたいなもん、だから半分怪異みたいなもんなのさー。もう夜になっちゃうし、よい子はおうちに帰らないと、お化けが出ちゃうよ。可愛い子は狙われやすいしね」

青柳は納得いかないようだった。それでも、口下手な俺とは対照的に、口上手な優補が説得した。こいつは、気が抜けるような物言いではあるが人を丸め込むのが得意だ。

色んな意味で。

「私だつてさー、しよーじの悪趣味には途方に暮れてるんだけどね」
青柳が渋々帰ってしまった後に、彼女は言ってきた。

一人称が正常になった。

「悪趣味か……悪かったな、途方に暮れさせて」

「うん、もうとほほんって感じ」

「どんな感じだよ」

のほほんとしてそうだな、それ。

「でもしよーじ、怪異に関わらせたくない人に自分が人外みたいなこと言わない」

「ほか、と軽く叩かれる。」

「あー、そうか……」

話せる人もいないからさ。

俺は自分の首飾りを、見つめながら呟いた。

白い、眩しいほど白い欠片に紐が通してある、一見すればただのアクセサリーだが。

これが、今の俺の象徴と言えば、そうだった。

そうか、優補は俺がこれ以上言わないように……ああ言ってくれたのか。

ロクに活動もできなくて名残惜しさもあり、最後に一曲、弾いて今日はひとまず帰ることにした。

優補がそれを勧めたこともあって。

ただ、歌は歌わない。考えることで頭が一杯だ。

落ち着く為に、曲を奏でる。

だが思考は止まらない。

その狗というのは、記憶喪失にさせる怪異か何かなのだろうか。

喜屋武は、何がしたくて

「……しよーじ」

そっと、隣で座っていた優補が囁いた。

弾きながら俺は顔を上げる。

人ごみの中に、まるで逆らうかのように、いやそこに元からいて当たり前のように、喜屋武が立っていたのだ。

じっと、動かず、俺を見つめている。

睨んでいる。

俺の目線に気付いて彼は歩を進めた。一步、また一步、じりじりと近付いて、再び、いや三たび、俺の前に現れた。

やはり。

手を止めて顔を上げる。

「よう、……喜屋武」

今の彼に、一番言うべきではないであろう台詞をチョイスして言っただけだ。

案の定相手はお怒りだった。
オレのことを、まだ憶えてやがる　そんな声が、聞こえてきそ
うだった。

そう、彼は確認しに来たに違いないのだから。

「何で憶えてんだよ」

「俺もお前に聞きたいね。何で忘れさせたんだよ」

「……うぜえ」

その声と同時に、いやそれよりも早く、俺の耳元を何かかかす翳めた
ギリギリ、かわせた。ただ、軽く皮膚が破け、血が飛んだ。
だが誰も、俺と喜屋武と優補以外の誰も、それを見ていない。

「なんで」

喜屋武の鋭い目を、俺は平然と見つめ返した。

椅子に座り、見上げたまま。

「その前に、その犬を黙らせる。いくら俺でも、不死身じゃないし
敵わない」

「何なんだよ、お前　今までオレを忘れなかった奴はいないのに」

「俺は、人間だけど、半分違うから」

「ああ？」

意味分かんねえよ、と相手は言う。それと共に感じる、殺気。
狗の、殺気。

「ん」

と俺は、ズボンの裾を膝上まで引き上げた　優補の舌打ちと共
に、脚が露あらわになる。

「……マジかよ」

「それで、お前のは何なんだ？　そのハチ公、どうしてお前の側に

いる？」

「こいつはオレの親友だよ」

ズボンの裾を下ろした後も、喜屋武は俺の脚を見ていた。人間離れした、その脚を。

俺が取り込んでしまった、怪異の一部。

優補から奪った人魚の一部だ。

「親友」

「俺の側にいてくれる、俺の望みどおりのことをしてくれる、大切な」

喜屋武はそう言って。

唇を、強く噛んだ。

優補が大勢の知り合いにメールを送信している間、俺は何もしていなかったわけではない。

正直気が進まなかったが、何も分からないまま彼に会うというのも愚かしいことなので、とりあえずあいつに電話だ。

阿良々木暦。

青柳は俺が助けてくれた、とは言っているが、実際ことを解決したのは、『彼ら』に等しい。

アドレス帳から選び、掛ける。

すぐに、声がした。

「もしもし」

「あ、もしもし、あの」

「私と暦くんの邪魔をするなんて、何様なわけ？ 万死に値するわ」
切られた。

……。

切られた……。

「どしたの？」

隣で優補が携帯画面を見つめながら問う。

いや、なかなかシヨックだった……。

「戦場ヶ原さんが出て……用件も言っていないのに切られた……」

「あー、せん嬢がねえ」
せん嬢。

優補が勝手につけたあだ名で、既に定着してしまっている。

本人の承諾も得ている（メル友だ）。

何だか物騒な感じが消えて、イントネーション的にも可愛くない？ とのこと。

優補がひとを下の名前で呼ばないのも珍しい。

いや、でも俺も彼女をさん付けでないと未だに呼べないのと、何か通ずるものがあるのだろう。

よく分からないが。

「もっかい掛けてみれば？ 今のはギャグだったかもだし」

「万死つて発言はギャグでは出ねーだろ……」

「万死一生を出づつて言うじゃん」

「命を投げ出して電話しろってか」

でも今のじゃ歯切れが悪すぎる。

勇気を振り絞つてもう一回！

「何。殺すわよ」

いきなり殺すって言われた。

もうこれは本気だろ！

「というか何で毎回戦場ヶ原さんが出るんだよ！

でもへこんでいる暇はない。俺は切られる前にと早口で言った。

「栗国ですつ、戦場ヶ原さんっ、お久しぶりです」

「……え？ ああ、栗国くん。なあんだ。あら、御免なさい。わざとじゃないの、本当よ」

「……………」

「嘘だ！」

「いえ、先程立て続けにセールスマンから何故か電話が掛かってね
携帯に……………」

「笑うセールスマンよ」

「喪黒福造もくろふくぞう！？」

彼に万死とか死んでも言えねえよ！

「ホーツホツホツホ」

「怖すぎる！」

アニメ版とかもう半端なかったんだけど。

語りとかね！

「……………そもそも、どうして戦場ヶ原さんが出るんですか」

「ああ、今曆くんはおトイレなのよ。ああちなみに、私と彼は同棲
中」

何の恥ずかしげもなくさらりと言った。

後者ではなく。

「そんなことはないわ。邪魔をするなど言ったのも本当のこと言う
のが恥ずかしかったただだからなの」

「そうなんですか……………」

「恥も恥らう十九歳の私が言うことではないと思ってね」

「花も恥らうだ！」

恥ずかしい間違いを……………思わず突っ込んだじゃったよ。

タメになっちゃうのも仕方ない。

「で。栗国くんは何の用？」

「あー、実は、相談があつて……」

「ああ、」

それだけで、戦場ヶ原さんは察したようだった。
うんうんと頷いているのが、目に見えるようだ。

「ちょっと待っていて頂戴。お取り込み中だろうと関係ないわ、すぐに暦くんを連れて来るから」

「やめてやめてやめて下さいー！」

「冗談よ」

「冗談にならない……」。

と、何やら電話の向こうで騒々しい音がして、気が付けば阿良々木に代わっていた。

「もしもし？ ひたぎが迷惑かけた」

「いえ……」

ちよつとぐつたりしただけです。

というか初めて会ったときもそう言ってたな……口癖になっているのだろうか。

「お前とはあの沖縄五日間旅行以来だな、元気してたか？」

「俺も優補も相変わらずで」

「で、もう大体分かるけど……どうした？」

「それが、なんと言つか」

非常に言いにくい。特徴もまだよくつかめていないものなのに、阿良々木はその僅かな資料から、それを言伝で戦場ヶ原さんと忍に伝えていた。しばらくして、怪異の名前が出た。

「巴狗ともえいぬだな、多分」

「ともえいぬ」

俺はそれを復唱し、優補はそれにぴくりと反応した。
可愛いなおい。
じゃなくて。

「犬の怪異つてのは結構少ないんだ。猫が多いのと対照的にな。だつて犬は、人間に忠実で、仲がよくて、裏切ることがないイメージだろ。人間を騙すとか、自分勝手に、裏切ることもある猫とは違ってな」

「まあ……」

「それでも、忍が言うには、犬の怪異はその忠実、誠実を権化にしたようなものが多いんだそうだ」

犬ね……狛犬とか、かな？

でもこっちではシーサーだよな。

「そう、それ。狛犬」

「え？」

「巴犬は、狛犬の一種だ 対象にどこまでも忠実で、守護し、敵には牙を剥く。栗国が言っていた、牙の音 それから判断した。記憶を消す、というのはたくさんいるんだが、本人が犬と言ったなら、当てはまるのはそれくらいだ……忠犬、何でも望みどおりにしてくれるのは、巴狗しか当てはまらない」
いいか、とそこで阿良々木は声を潜めた。

「大事なものは、この犬が憑く人間は、決まっていることだ」

「……それは？」

「家がない人間だよ」

喜屋武は、巴狗という怪異が、いつの間にか当たり前のように自分に憑いていることに気付いたと言う。

いつだったかは憶えていない。中学生になる前には、もう犬と共にいたらしい。

これまでにその存在が他人にはれたことはなかった。

ということはつまり、大して周りには影響が及ばないと言うことである。

その気にならなければ、だが。

その気になれば、人も襲うし容赦しない。最も怖いのは、憑いた人間のことしか考えないことだろう。

「喜屋武。お前どうしてあんなことしたんだよ」

「ああせざるを得なかったんすよ」

俺は地面に腰掛け、喜屋武は椅子に座っていた。

「ってあれ？」

何でこいつが御偉いさんみたいになってんだ。

ちなみに優補はスタンディング。壁に寄りかかるようにしている。

「オレのことは、記憶から消されるべきなんす」

「……」

俺が言葉に詰まっていると、相手は溜め息交じりに立ち上がった。

「で、先輩は何がしたいんすか。わざわざ足見せつけて、『あなたには何か憑いてるんですか？ 僕もだよ』って、オトモダチの輪を作ろうとでもしてんすか？」

「お前言うことのひとつひとつがうざいな……」

「癖なんす」

「どんな癖だ」

「知ってますか？ うざいっていうのは、有才って書くんすよ。才

が有る、つまり物知りってことなんすよ

「うぜえー！」

言ってみただけだ。

商店街の中心でうざいと叫んだだけだ。

略してシヨウチュウ。

いやしかし中心ではなく端っこだが。

ていうかそれ言ったらお前だって、俺のことうざいって連呼してたじゃん。

やったぜ、俺も才が有るうざい奴だ。

「で、どうなんすか」

「ああ？ いや、お前が怪異について知ってはいるようだったけど、害をなす怪異だったらいけないなと思って」

「優しくも救いの手を差し伸べた人ってわけっすね。かつくいー」

「……その様子だと、全く持って必要なさそうだな」

「当たり前すよ。大体あんたは何様なんすか。なんかできるとでも思ってるんすか」

たかが、魚に。

嫌味たっぷりにそう言ったのが勿論優補に聞こえたようで、彼女は眉を少し上げた。魚と言う言葉に傷ついたのかもしれない。

喜屋武はそのまま歩き出した。

「おい、どこ行くんだよ」

「どこも」

そっけなく答える。

答えるだけよかった。

「オレには居場所がない。先輩達とは違って」

「……」

「あ、勘違いしないで下さいよ。別にオレ、野良みてーに路地裏ゴ

「三漁って生活してるわけでは、ないんすから」

振り返りもせず、彼は言う。

それは……本当のことだろうな。でも、阿良々木は家がない人間
って……。

「もうオレは諦めたす。先輩はオレのことを忘れない上に狗も効か
ないみてーだし。本当のことも言ったし」

「……お前、どこに住んでんだ」

だが彼はそれには答えず、ゆっくり歩を進めるだけだった。

敵意は失っているものの、これ以上関わるなどでも言いたげだっ
た。

『私の夢を いざ語らん』

死の淵 震える其の中で』

突然、優補は歌いだした。ゆっくりとした曲を、俺と彼女で創っ
た歌を、アカペラで。

喜屋武は足を止めたが、まだ背を向けたままだった。

『今も未だに憶えてる』

涙も隠さず 手を伸ばす

赤い月 晒さらう

銀の瞳 零こぼれて

気付けば微苦笑

伝う雨は 涙と為す

ああ

どうか私を どうか私を

深い水底へ 沈めてくれ

もう私は もう私には

帰る処がないのです

安らかな流れよ 静かな夜よ

私の心を歌にして 奏でて聴かせてくれないか』

優補が歌うと、老若男女問わず多くの人が惹かれて集まってくるのだが、今日は誰一人寄っては来なかった。

喜屋武を除いて。

彼は振り返り、首を傾げて優補を見ていた。

「姉ちゃん……あんた、何なんすか」

「んー、ただのうたのおねえさんだよ」

……。

子供達が歌に聴き入って一緒に歌うどころじゃなくなりそうだな。この歌は、彼に何を思わせたのだろう。

何を思い起こさせたのだろう。

今までとは酷く対照的に、気が抜けてしまっている風の喜屋武だった。

「幸音くん、今から、どっか行くところでもあるの？」

「……ない」

先程と同じ質問に、先程とは違う答えを、喜屋武は返した。

ない、と。

行くところは、行く場所はない、と。

「じゃ、私がつくったげりゅよ」

りゅってさ……わざと噛んだよな」。

まあ、こいつの口癖がこれなのにはちゃんとした理由があるにはあるのだが。

「うちにおいで」
優補は微笑んだ。

さちねハウンド 其の陸

006

人に恐怖を植え付ける、はたまた記憶まで消してしまう、モノは粉碎させるわ、魅惑の歌すら周囲に浸透しないようにするわ、主人に仕えるという点に置いて巴狗に勝るものはなし、と言った感じだった。

そう、ヘッドホンが噛み砕かれたとき、優補が歌ったとき、気持ちの悪いくらい周りが反応を示さなかったのは、犬の力に他ならぬい。

「で、その俺の犬の名前ってなんでしたっけ」

「巴狗だ」

「そうそう、そんなんだ　　なんだか、いかにも凶暴な犬って感じすね　　先輩、MWとか読んでます？」

「ムウ？　手塚治虫の？　聞いたことはあるけど」

「あれに出てくる雌犬は巴ともえって名前だったんすよね」

「ふうん……」

またマイナーな漫画を持ち出すな。

俺は武将の妻の方しか出てこなかったっつての。

俺達三人は、あの二階建てアパートに向かっていた。

ちゃんと楽器も道具も片付けて、粉々のヘッドホンも拾ってた。

積もる話は、盗み聞きされたものではない。たとえば、忠犬がっいているとはいえ、聞かれてよいものではない。

「手塚先生が、『鉄腕アトム』だとか『ジャングル大帝レオ』だとか、そんな可愛らしいヒーローモノしか描いてないと思ったら大間違いなんすからね」

「まあ……そりゃ青年誌向けとかも描くだろうよ……」
「個人的には未完に終わった『火の鳥 大地編』とか『ネオ・フ
アウスト』とか気になって仕方がないんすよ」
「随分古い上に大人な漫画を好むんだな、お前……」
デスノだつて少年漫画とはいえ、結構濃ゆいし。優補とかゲラゲ
ラ笑いながら読んでたな。
ちなみに今彼女がハマっているのは『バカボン』。

「MWつてあれっしょ？ ちょっとボーイズラブ的な要素も入っち
やってる」

と、優補が言う。
ていうか読んだの!?

「あー、姉ちゃんそこだけ取り上げたら折角の話が台無しすよ……
というか、BL好きの人が読んでも面白くはないと思います」
こいつら何話してんだ。

「あんなドロドロした漫画は素晴らしいと思うよー、でも絵も凄
いの。写真かと思つたし」

「大人にはなりたくないっすね」

「あと核廃絶はホントに思った」

「ですね」

盛り上がるな。

俺にも分かる話をしてくれ。

「で、巴狗は、その漫画よろしく凶暴にもなれば大人しくもなる、
そうなんすね？」

「ああ」

あくまで主人に従う。

絶対服従だ。

こうして帰つてるときも、何だか周りの人が避けて通つてくれているような気がする。巨大なシェパードのような犬が、唸りながら俺達の周りをぐるぐる走っているのが頭に浮かんだ。

「犬は狒犬なんだって。」

「狒犬って、神社に対になつてるとかいうアレすね。守り神みたいな。シーサーとは違うんすか」

それは俺もさつき阿良々木に訊いたよ。

「仲間でも、別モンだ。シーサーはな、攻撃する生き物じゃない。敵にだつて噛み付かずに取り込んで調和させる。平和を好む奴なんだ。一方狒犬は、敵には牙を剥く。容赦なく襲い掛かる、だそうだからこれが主な違いだな」

「ふうん……まあオレにはそっちの方がいいすね。攻撃型の方が」

「怪異をゲームのモンスターみたいに分類してんじゃねえと。」

おら、あれが俺達の家だ」

彼は敏感に反応した。

「『俺達』？ 今、俺達の家って言いました？」

とりあえず無視して鍵を取り出す。優補も空気を読んで黙っていた。

「なんすかなんすかー、どう見ても兄弟とかじゃなさげだし、まさか同棲すか」

俺達がいつまで経っても喋らないので（いや、優補は別に話すことには躊躇いが無いのだが）、喜屋武はますます確信を深めたようだった。

いいぞ。

別にバレること承知の上のご招待なんだから。

喜屋武は子供っぽい笑みを浮かべたまま、リビングに腰を下ろした。俺も重い荷物を下ろして、優補は飲み物の準備に取り掛かる。喜屋武はもとから手ぶらだった。荷物持ってやるうとか思わないんだろつか。全部俺一人で運んだし……いやまあ、行きも一人で全部運んだけどさ。

「てゆうか先輩、二人だけでこんな豪華なとこに住んでんすか。有り得ないすよ」

「今ここが存在しているなら有り得てるよ」

「屁理屈すね」

「うるせえ」

羨まし。

ぼそりと相手は呟いてから。

再びにやにやしだすのだった。

「いやあ、先輩ってなかなかなんすねえ」

「何がだ、同棲のことかよ」

シツッこいな。

「いえ……まあそれもなんすけど」

喜屋武は急に声を潜め、囁いてきた。優補に聞こえたとまずいのだろうか、ちらりと彼女が忙しいのを確認して、言う。

「だって彼女超ベツピンさんじゃないすか。声だつてきれいだし」

「ああ……？」

暗に人魚つてことを言いたいのか。

「きつと足とかだつて透き通るように綺麗なんしょうね」

「……」

「何回二人で夜を明かしたんすか？」

「黙りやがれ！」

何を知ってる中学三年さんよ！

とまあ、年頃の男子はそれくらい知ってるのか。

全く青春シーズンは恐ろしいね。

どんな春だよ。

「いや、でも先輩二人きりならあんなことこんなことなんでもできますよ？」

「それはそうだがしていいことと悪いことがあんだよ！」

「あんな美声のねーちゃんが叫んだり髪を乱したりすんのか興味紳士っしょ？」

「そいつは紳士じゃない。変態と言っただ」

興味津津なのはお前くらいだ。

いや、まあ、……多分。

はー、とつまらなそうに溜め息をつき、喜屋武は伸びをする。
わざとらしい奴だ。

「なーんだ、童貞野郎なんすか」

「年下に言われて傷つくことこの上ない台詞だな」

「はいはい、どうぞご自由に傷ついちゃって下さいよ。先輩がダメ男なのはよく知ってます」

「会って間もない奴が何したり顔してんだ！？」

「マダオでした？」

「その訂正はいらん」

「そーそー、しよーじはマダオなんだよ」

飲み物を卓袱台ちやくぶだいに置きながらのんびり優補が参戦してきた。

オーダーはもう聞いていて、俺と優補はコーヒーで、喜屋武はコアだった。どれもホットで。ここらへんで子供と大人の違いが表れるんだよな（と強がってみる）！

「こちよこちよに弱いし、すりすりにも弱いんだよ」

「おい」

「プライバシーに……」。

「夜トイレに行けないし、朝は私があーんしてあげないとご飯食べられないんだよ」

「そんなマダオじゃねえよ！」

「断じて！」

「なんてデマを！」

「しかも相手がどんな奴か分かってて言ってるから怖い。」

でもこれだと、少なくとも俺はまるでダメな男と認めたことになるな……日本語ってやだな。

「苦いコーヒーを啜りながら嘆く俺。」

「で。喜屋武。怪異の話だけど」

「先輩。その前にその怪異について、どうしてそんなに知ってるんですか？ そのねーちゃんがそういう類だから？」

「随分ストレートに訊いてきやがった。」

「いや、それもないことはないけど。なんつーか、こないだ知り合いができてさ。そういうのに詳しい」

「……はあ」

「そいつが、色々教えてくれたんだよ。お前のその犬について」

「で、彼はなんか言ってたんすか？ 世界を滅ぼすとか、人に攻撃するとか、物騒なこと言ってたんすか？」

「いや……」

「急に声を荒げる喜屋武をまじまじと見る。」

「なら、もう関わらないでくださいよ」

「まただ。」

また彼は、敵意をむき出して……立ち上がり、息を荒げて帰ろうとする。

「幸音くん！」

すかさず、というか、優補が呼び止める。

しかし彼女が指さしたのは、喜屋武ではなく、飲み物だった。

「まだ、飲み終わってないじゃない。駄目、最後まで飲まないなんて」

「んなことどうだって」

穿き捨てるように言いかけた彼は、一瞬そこで優補の顔を見て、怯む。

真っ直ぐな目に、言葉を忘れたようだった。

二人が見詰め合うこと数秒。やっと、喜屋武は目を逸らして、座り込んでしまった。顔を伏せていて、表情は分からない。

俺が名前を呼ぼうとするその直前に、相手から口を開いていた。

「すみません」

謝罪の言葉だった。

最初に漏れたのは、謝罪だった。

「すみません、二人とも……オレ、は、」

言葉を紡ぐように、本当に小さな子供ののように、彼は言った。顔は伏せたままだ。

「……幸音くん」

そつと、優補が後押しする。喜屋武は言われずとも、心の内を打ち明けようとしていた。そうした方が、そうするべきなのだと、彼は最初から分かっていた。催促する必要はなかった。

「オレには、か、帰る場所が、ない」

喜屋武が、震える。

もう私は、もう私には、帰る処がないのです

「帰る場所がないって、でもお前、家がないわけじゃないって」

「家があります。でもないんです」

「……」

「オレ、孤児院にいるんです」

ぎり、と音がした。

歯を食いしばる音。

「で、でもオレはあんなとこにいるのが嫌で。嫌で嫌で嫌で。出て行きたくて。でもできなくて。ずっと願って。そしたら、いつからか、犬が、側に居て」

震えが、少しだけ、治まった。

「オレの願うことは、何だってしてくれた。何でもできた。だから、

オレは、あそこを飛び出した」

「出てったのか……？」

「というよりは、何と言うか、あその連中にはオレが出て行ったことなんて思わないように、オレがあそこにいつも通りいるものだから、偽った。犬がそうしてくれたんだ。今だって多分、勘違いしたままにいる……と思う」

だって、とここで喜屋武は顔を上げて、俺を見た。喜屋武の目は、不安気だった。それもそのはず。

「先輩は、犬が効かなかった」

「ああ、そうだけど、でも」

「他にも効かない奴がいるのか？ そうだったら、オレが今まで嘘偽りを植えつけていた事が知れてしまったら、オレは？ オレはど

うなるんすか？ またあそこに戻されるんすか？ オレは、オレは、ただ忘れたかっただけなのに。偽りを信じ続けてもらいたかったのに」

高い声で、訴える。

俺はやつと、理解した。

家がない、人間。

行くべき場所がない人間。

まさしくそれは、巴犬に憑く対象だったが、それは。

その怪異と対象者は、酷く似ているのだと

「家がない人間って、どういうことだ？」

俺が阿良々木にした質問だった。

相手はそれには答えず、しばらく黙っていたが、突然こんなことを言い出した。

「喪家の狗^{そつうか}って、知^しってるか？」

「は？」

そうか？

「喪中の家の狗^{いぬ}って書くんだけど。史記に載ってるな。あれが、巴狗の元だな」

「はあ……」

「そのまんまの意味で、それ以上の意味だ。喪家の『喪』は『喪失する』、『喪^も』じゃない。つまり喪家は、家を喪失するってこと。

だから喪家の狗は別の言い方で、やどなし犬とも言つ。飼い主に見捨てられた犬、宿無しになった者をさす。そして、巴犬も同じ。そして、憑かれた人間も同じ」

……なるほど。

それで、巴犬は自分と同じ境遇にある人間に憑くというわけか。でも、家がないって……？

「でも狛犬つてのは朝鮮からきてんだよなー、中国からはシーサーだし、史記に載ってる狗のくせに生まれは朝鮮つて……いや、日本にもこうして出てるから場所は関係ないんだっけか……？」

「……詳しいんだな」

「あ？ あ、これ受け売りだから。ひたぎと忍の豆知識だよ」

そうそう、別に言うことでもないが、彼と話をしたのは久しぶりだが、何度かメールでやり取りはしていた。自分で言うのもなんだが、幾分か俺達は親しくなっていた。

「そうだった、あとは名前の由来か。ええっと、巴は模様だろ？」

え？ 何だつて？」

「……」

人に聞いているのがバレバレです。

「尻尾の形、か。ふうん、柴犬みたいな尾なんだな。巴狗。かつこつけて書くと『ともゑぬ』ってところか。別の漢字で当てると、友へ、狗ととつて狗が親友であるとれるし、あとは、友へ去ぬ、共へ去ぬ 要するに一緒に死ぬってことだ。似たもの同士の怪異と人間、ふたりは同じ苦しみを体験した。家がない、居る場所がない、行くべき場所がない……そうして一度は死すら望む……。粟国。巴狗は、害を及ぼす怪異じゃない。ただ、対象にどこまでも忠実で、守護し、敵には牙を剥くだけ。友人と共に居るだけ。いつまでも居て、いつかは死ぬ。それも一緒に。ただそれだけで、でも、そういうことだ」

「じゃあ……ずっと居ても、大丈夫な怪異なのか」

「その喜屋武つて娘が世界を我が物にしたいとかそんなことを願う奴じゃなけりゃ、なんも起こらないさ」

「……すみません、えっと、喜屋武は男です」

「え？ そうなのか？ 幸音って言うからつい……なんだ、裏切りやがって」

「えーと……何を？」

「その喜屋武って子が、突拍子もないこと考える奴か？ 犬の力を使って好き放題やらかしてるか？」

「うーん……」

判断できない。俺の記憶を消したけど、それだけって言えばそれだけのことだし。別にそんな風には見えなかったけどな。

自信ないけど。

「ま、本人の意思に委ねな。少なくとも何かが憑いてることくらいは本人も知ってるんだし、とつくにことは解決してんのかも」

「……分かった。友達の輪を広げるとします」

「ん？ なんだそれ、いいともか？」

「古……」

みんなで輪するのか。

某携帯のコマーシャルとか出てこないんだ。

「栗国。分かってるかもだけど言っとく。」

もし喜屋武がそのままでもいいって言ったとしたら、そのままにしてやれよ。僕もお前も、同じように怪異を身に宿した人間だからこそ、放置することも選択肢の一つだ」

「あ、それで思い出した」

ちよっと訊きたい事があったんだった。

今聞くタイミングではないだろうが。

「戦場ヶ原さんって、彼氏が吸血鬼って知ってるのか？」

「え？ ああ、というか、彼女と話すようになった初日から、もう

バラしちゃったんだけどな」

「ええ……」

それを、彼女も知っていたいながら、交際しているっていうのかよ。なんて言うか……相当戦場ヶ原さんも化物じみてるな。

普通そんな彼氏と付き合わねえだろ。

いや。

俺も、優補が人魚だと 怪異を怪異と 知っていながら、同棲しているんだ。まあ、俺はとくに、化物……人間以下の、化物だ。

「旦那様は吸血鬼、みたいなの？」

「うーん……？」

ボケ？

微妙な線だ。

「ダーリンは吸血鬼^{ヴァンパイア}、みたいなの？」

「いつからボケになったんだよ……」

疲れたのか？

ぱっつあんみたく、疲れちゃったのか！？

「んま、僕が言いたかったのは 僕たちは怪異に身を宿した人間だけど、だからこそ、人のことなんて言えねえよな、ってことだ」

お前だって人魚と交際してんだからよ と、彼は言う。

「でも、」

と俺は続ける。

「そのままでもいいとは、思っていない 阿良々木も、そうだろう？」

相手も、答えた。

「ああ、そうだな」

「だから、」

だから。自分の思うことを、正直に言った。

「俺が、あいつと犬と一緒に居るのがいけないって引き剥がしたとしても、阿良々木は何も言わないよな？」

しばらく沈黙があり、やがて呆れたような笑い声が聞こえてきた。

「お前は、本当に僕に似ているな　　ずけずけ他人に関わって、いいことなんてないぜ？」

「別に、いいことがなくても、俺は構わない」

見返りなんて求めない。

俺は、何も、求めない。

ただ、何としてでも、怪異に関わった人は助けたいのだ。
自分と同じような目に遭う人を、助けずにはいられない。

同じ道を辿ってほしくない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9162m/>

漫物語

2011年6月21日09時20分発行